青と赤の白黒テレビ

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青と赤の白黒テレビ

【Ｎコード】
Ｎ４４６０Ａ

【作者名】
暁

【あらすじ】
青い髪の色をした四色海。人との関わりを嫌い、フリークライミングだけが生き甲斐の主人公が、赤い女の子に出会い、二人の親友に支えられてどう変わって行くのか？新人ですけど、応援してくれたらありがたいです。

青の事情

「おい！シシキ！」
シシキ？あぁ、俺の名前か、四色海（シシキカイ）、眠気で自分の名前も忘れるところだった。
ってか誰だよ？朝から俺の名前を、大声で叫ぶず太い声の主は
「おいシシキ、止まれ。」
教師か、確か体育のだな、名前は忘れた
「何？」
「髪はいつになったら、黒くするんだ？」
それか
「自毛だよ」
「嘘を付くな、こんな色の毛があるか！」
この教師がそこまでうるさく言う髪、青い髪だ
「残念ながらあるみたいだな」
「ふざけるな！」
怒り始めたよ、しょうがないだろ、自毛なんだから
「説教なら後にして、もう授業始まるから」
そういって俺は、逃げるように走って教室に向かった。
その後しっかり説教くらったのは、いうまでもないだろ。

昼休み使われてない教室に行った、手紙を貰ったからだ、恐らくコクられるんだろ
「お待たせ」
教室には手紙の主がいた
「あっ、シシキ君…」
緊張してるらしい、じれったいから俺から先に喋った
「俺、付き合う気とか全くないから。それでも何かある？」
長くなるのが嫌だから、自分の用件だけ伝えた。黙ったままで何も

言って来ない
「無いんだな？なら帰る」
相手は何か言おうとしてたけど、俺が出る方が先だった俺が出る方が先だった。
教室に戻ると、一人の男子がよって来る
「カイ、また告白？」
クラスの井上だ
「そうだけど」
「良いねぇ、イケメンは。３年になって何回目？」
「４回」
「まだ４月だぞ、俺にも分けてくれよ」
なんかウザイ、ほっといて欲しい
「あげれるんなら、全部あげるよ」
「かっ、うらやましい言葉だね」
そう言いながら去って行った。
告白されるけど、いつも今日みたいに断る、他人との関わりを持ちたくない、今の井上だって友達と思った事は一度もない、むしろ友達何ていらない。
５、６時間目は全部寝た、つまんない授業受けるくらいなら、全部睡眠時間にまわしたほうが、１００倍マシだ。
「カイ、今日暇？」
また井上だ、コイツやたら俺に絡んでくる
「用事がある。」
実際ないに等しいけど、コイツといてもつまんないから、大概は断ってる
「あっそう、またいつか遊ぼうな。」
俺は電車に乗ってた、ジムに行くためだ、ジムっていってもフィットネスや格闘技のじゃない、フリークライミングだ。
フリークライミングはいわば壁登りだ、ロッククライミングの類だ、

唯一の俺の趣味だ。
「おはようございます。」
挨拶をして準備をした。
フリークライミングをやってる時だけは、嫌なこと全部忘れて楽しめる、ロッククライミングは更に楽しい。一つ、また一つ上に上がった時の達成感、踏み外しそうになった時のスリル、頂上に着いた時のクラクラする高さ、全てが俺にとっての薬物みたいなものだった。

あいつに会うまでは…

赤との出会い

ジムで2時間くらい登って帰り支度をしてるとき、何となく渋谷に行きたくなった、いつもは行かないし、避けてた街なのに、無性に引き付けられた。
渋谷に着くととりあえず飯を食いに行った、洋食屋でハンバーグを食った、案外マズイ、絶対俺が作った方がうまい。
服やCDを見ながら渋谷を歩いてた。
「つまんねぇ、何でこんな街に人が集まるんだよ」
口には出さなかったけど、顔には出てたはず。
俺は吸い込まれるように、暗い路地に入って行った、ふと泣き声が聞こえた
「誰かいんの？」
何でこんなことしたんだろ、こんな面倒な事スルーすればいいのに。
「……」
黙りやがった、仕方ないから近くに行った。そこには赤い髪の女の子がいた、髪も短くてボーイッシュな雰囲気だった
「もしもし、どうした？」
しゃがんで覗き込むように、顔を近付けた
「ひっ！」
スゴい怯えてる、その瞬間ただ事じゃない事だって分かった
「どうした？力になるよ」
力になる？なに柄にも無いこと言ってんだ俺は、こんな事して何になる
「……」
「黙ってたら分かんないだろ」
少し引いてみた、ずっと覗くのに疲れた、女の子は俺の顔を見上げてきた
「話す気になったか？」

やっと泣き止んだ
「盗られた」
「何を？」
「バッグ」
「はっ！？スリにあったって事だよな？」
女の子は無言で頷いた
「携帯とか財布もか？」
また頷いた
「警察には行ったか？」
「行ったけど、見つからないって」
頭が真っ白になった、この後どうするか考えた。
ってか何で俺はこんなに必死なんだ、他人の事だろ、ほっとけば良いだろ、いつもそうしてきただろ
「家はどこらへん？」
「島から来た、明日の朝に帰る予定だったけど、全部盗られた」
「じゃあ、帰れないって事だよな」
静かに頷く
「なら家に来いよ」
あれ？俺の口から、おかしな言葉が
「一日だけ泊めてやるよ」
誰か俺の口使って何か言ってる、俺絶対こんなこと言わないだろ
「…でも」
「親いないから、大丈夫」
「違う」
「あぁ、何もしないよ、約束する」
そんな事じゃない、女の子があたふたしてるだろ、迷惑だから
「ホントに良いの？」
今だ、前言撤回のチャンスだ
「良いよ、お前が良ければ」
良くないんですけど、友達すらあげたことないのに、見ず知らずの

他人を泊める？以上だろ
「じゃあ、お言葉に甘えて…」
やめてくれよ
「お願いします！」
「お願いされた！」

赤との一夜

朝目が覚めるとソファーの上にいた
「あれ？どうして俺こんなとこに？」
学校だから制服に着替えに部屋に行くと、女の子が布団の上に寝てた
「……」
そういえば昨日のよる
―渋谷で助けた女の子と家に帰った
「服は適当に俺の来て良いよ」
「ありがと」
女の子が風呂に入ってる間に、俺は夕飯を作ってた、ほとんど3食
俺が作ってるから料理は得意な方
「お風呂ありがとうございます」
後から声が聞こえた
「飯作ったから食べな」
「ありがと」
二人で飯を食った、女の子と二人で飯を食ったのも始めてだし、家族以外に自分の料理を食べさせたのも始めてだった
「うまい？」
「かなり！」
「喜んでもらえて、嬉しいよ」
くだらない話をしながら、今後の話をした
「これからどうするの？」
「明日の朝帰ろうと思ってたけど、チケットもバッグの中に入ってるから…」
「なら帰りの金、貸してやるよ」
そういって、俺は金を差し出した
「こんくらいで足りる？」
「いや、でも…」

「気にするな」
困ってるようにも見えた。
俺もよくやるよな、こんな他人のタメに、でも何となくほっとけないんだよな
「じゃあ、今いくつ？」
「えっ？いくつって？」
「歳だよ、歳。何歳？」
「何でそんなこと？」
「いいから答えろ」
かなり強引だけどこれしか無いだろ
「……１４」
「……１４？」
ヤベッ、少し裏返った。
相手は軽く頷いた
「俺とタメじゃん！中学３年？」
「うん」
「何だガキっぽいから、年下だと思った」
「タメかよ！何だよ構えて損した」
その瞬間、姿勢よく座ってたのに、崩して座り始めた、俺の服だからダボダボでかなりだらしなく見える
「ってかさぁ、老けてるって言われない？」
身をのりだして、頬杖をついて聞いてきた
「言われないし、ってか何かキャラ違くない？」
「いや、前が違ったの。そりゃ年上だと思ってたし、最初からこれだと引くだろ、フツー」
「いや今も十分引いてるんだけど」
「あっそ。で、何で歳聞いた？」
「あ、あぁ」
我ながら順応速度の遅さにビックリする、いや、これが普通だろ、そこらへんにいるような女の子だと思ってたのに、こんなにキツイ

性格だったなんて
「来年バイトして返せよ」
「なんで？」
「貸しとくから、後で返すんなら文句ないだろ？」
「まぁ、そんなに貸したいんなら、借りとく」
「いやお前の事を気にしてなんだけど」
「分かった分かった」
そういって欠伸をした
「悪い、眠いや、ベッド借りるよ」
「そこの廊下の左ね」
「おう、おやすみ」
「おやすみ」
ってか俺はどこで寝る？親のベッドは気が進まないし、しかもアイツのずうずうしさは何だ、まぁつべこべ言ってても始まらない、片付けて寝よ――
それから片付けてソファーで寝たのか、それにしても、昨日は濃い一日だったな
「朝飯でも作るか」
いつも通りに朝飯を作った、でもいつもは一人分だけど今日は二人分。

赤との別れ

「飯食ったら支度しろよ」
「支度することも無いだろ、盗られたんだから」
「確かに。９時に家出るからな」
「お前も来んの！？」
芸人バリのオーバーリアクションで、驚いてた
「送るだけだよ」
「着いて来んなよ！大丈夫だから」
「またどっかで泣かれたら困るから」
「何で、お前が困るんだよ？」
不思議そうな顔で見てきた
「いいだろ別に。お前が何と言おうが、送るからな」
「勝手にしろ」
呆れた感じだった。
何だろこの感じ、ほっとけない感じ……

港に着いてしばらく時間があった
「ってかさぁ、お前みたいな奴が何で、あんなに泣いてたの？」
「“あんなに”って、そんなに泣いてねぇよ！」
「分かった分かった。で、何で？」
顔を真っ赤にしてる、あれ何か悪い事言った？
「…恐かった」
目を潤ましてうつ向いてしまった
「ゴメンゴメン。悪い事聞いたな、忘れてくれ」
「いいよ別に。しかもアタシこれでも、お前に感謝してるから」
「へっ？」
変な声だしてるし俺、でも始めて、面と向かってお礼言われたかも、
相手が相手だから嬉しいな

「お前が来てくれなかったら、どうなったか考えるだけでも、怖い」
「でも、どんな奴でも、見ず知らずの奴の家にあがったのは最悪だぞ」
「分かってるよ、でもお前の目が、嘘つくような目じゃなかったから」
「おだてても、今後は何言われても着いてくな、他人を信じるな！」
柄にもなく説教してる俺がいた、でも始めて心の奥底から、人の心配をしたかも
「…分かったよ」
ヤベッ、言い過ぎた、また泣きそうだよ
「泣くな！もう泣くなよ」
「泣かねぇよ！」
涙声で言われてもなぁ、女の涙は最大の武器か
「でも良かったな、俺が拾って」
泣いてるのを見たくなかったから、顔を覗き込んで、滅多にしない笑顔をみした
「気持悪い」
「ヒド！せっかく頑張ったのに」
「慣れないことするな、無愛想」
「うるせぇよ」
『ハハハ！』
やっと笑ってくれた、しかも俺も笑ってる、相手が笑ってくれたのも始めてだし、俺も何年ぶりに笑ったかな
「おっ、もうそろそろフェリー来るよ」
「もうこんなに。ホントにありがとな」
「はい、これ」
紙を差し出した
「なにこれ？」
「携帯番号とアドレス、携帯買ったらメールして」
「分かった、絶対するから」

「後金も絶対返しに来いよ」
「ケチだな」
「郵送とか卑怯な事するなよ、そんで泣いて感謝しろ」
「上等だ、覚悟しとけよ」
何かスゴい悪い事した気分、でも今の照れ隠しでもあるかな、だって真っ直ぐ言えないだろ。
フェリーに乗って行った、手を振って見送った、出港した後気付いた
「ヤベェ！名前と島の名前聞いてねぇ！」
周りの人がみんな向いたのに気付いた、その後軽く涙腺が緩んだ
「辛い一年になりそうだな」

その日始めて学校をサボった、胸がいっぱいってこういう事？
苦しい、辛い、切ない、愛しい
俺、変われるかな？

青の憂鬱

チカに会って2ヶ月が経った。
あ、チカって渋谷で助けた、赤い髪の女の子ね、本名は潤間千夏（ウルマチカ）っていうんだって。
あの日の2日後きメールが来た。
―“件名：赤い髪の女の潤間千夏”
“本文：メール送ったぞ、０９０＊＊＊＊＊＊＊＊←これ携帯番号ね”
えーと、某トレインマン風に言うと
「キターーー！」
かな、メールってこんなに嬉しいんだ、しかも名前、潤間だって、泣き虫だから潤？
“件名：よろしく”
“本文：名前言って無かったけど、四色海。ヨロシクな”―
こんな感じで今日までメールをし続けた、朝起きたら“おはよう”、寝る前は“おやすみ”みたいな感じで毎日メールをしてる、たまに電話をしたりもしてる、距離は離れてるけど繋がってる、古いけどそんな感じがした。

でも学校が更に嫌いになった、チカの純粋さ（言葉は悪いけどな）に触れてると、ここら辺の奴らは荒んでる、話てると息苦しいし、笑ってても楽しそうじゃない、更に他人との関係を嫌ってる俺がいた。
そんな夏休み1週間前に差し掛かったある日、一応“学年一美人”らしい女の子が
「シシキ君、夏休み遊びに行かない？」
教室に入ってきて、俺の前に来て言った
「カイ！どういうことだ、これは！？」

井上が隣で大騒ぎしてる
「コレって？」
「学年一美人の渡辺が、何でお前をデートに誘ってるんだ？」
そのことか、そんなに騒ぐ事か？第一どんな美人も興味ないし
「美人だなんてもぉ」
否定しきらないってことは、この女満更でもないな
「いや、で……」
「7月28日、11時に駅で待ち合わせね」
何だコイツ、強引だな
「じゃあ、楽しみにしてるから」
走って教室から出てった。
……あっ！？その日俺の誕生日だ、あの女最悪だ、どこからそんな情報入手した、ってかもう断れないじゃん、最悪だな
「クソ！なんでイケメンに全部持ってかれるんだよ！」
「お前行く？」
「いや行けないだろ」
何だよ、行ってくれよ、行きたくねぇ、人生最悪の誕生日になりそう。
欝だ、欝病だ、生きる気力を無くした、へこむ、ってか俺何でこんなにマイナス思考なんだろ。
チカにはこの事は言わなかった、勘違いされたくないし、屈辱的だったからだ。
次の日、学校に行くと
「シシキ君、おはよう」
何だコイツ、待ち伏せしてたかのように、後ろから肩叩きやがって、しかも彼女気取りかよ
「あの、28日の事何だけどさぁ…」
今しかない、今を逃したら本当にこの女とデートをすることに
「楽しみにしてるからね」
「…うん」

終わった、確実にデート決定だ
「カイ、おはよう…、って同伴出勤！？」
井上だ、またタイミングの悪さは天下逸品だな
「違うから」
「ホントか？どうなの渡辺？」
「…同伴出勤かな」
このアマ殺す
「そこで会っただけだろ」
「照れなくていいでしょ」
「照れてない」
足早に学校向かった、この女は俺の“逆鱗”を逆撫でるどころか、電動ヤスリでガリガリと。
昼休み、いつもは教室で食べるけど、気分が悪い時は校庭の隅で弁当を食べてる、当然今日もそこにいた、良い感じに風も通るし、何より誰も来ない、一人に慣れるから唯一の憩いの場がココだ
「シシキ君！」
まさか、もしかして、嘘だよな
「一緒に食べよ」
予感的中、渡辺だよ、この女どこまで俺の事を苦しめれば気が済むんだよ
「たまにココにいるよね」
「うん、まぁね」
ってか、ストーカーかよコイツ、しかもズケズケと俺の隣に座りやがって
「シシキ君って、お弁当いつも自分で作ってるんだよね？」
そうだよ、ストーカーさん、とは言えないよな
「親が作らないから」
「じゃあ今度から私が作って来るよ」
やめろ、俺の弁当の方が１００倍マシだよ、いやちょっと待てよ
「でも今日で弁当終りじゃん」

俺頭良い！
「休みの日でも弁当持って来てるの、知ってるよ」
コイツがストーカーだって事を忘れてた、俺頭悪
「一応ね」
「フリークライミングやってるからでしょ？」
「あぁ」
「だからこれからは、私が作るから、楽しみにしてて」
完璧、相手ペースだよ
その日から、フリークライミングの時に弁当を持ってきてる、しかも俺のジムと、塾が近いとかで終わるといつも、ジムの前にいる。
そんな日が何日か続いて、遂にあの日が来た

青のデート

遂にきちまった、この日が、ありとあらゆる手を使ったけど、あえなく散った
「遅い！」
「ゴメン」
今の時間は、１１時１０分、予定通りだ
「で、どこ行くの？」
「原宿」
最悪、俺の嫌いな街の三本指に入る所だし、この女知ってか知らずか、俺を欝モードにするのは天才的だな
「気がのらないけど、行くか」
「行こ行こ」
手を繋いで来ようとしたけど、掴まれないように、手を避けた。
電車の中は質問攻めにあってた
「好きな食べ物って何？」
「俺が作るの全般」
「趣味は？」
「登ること」
「特技は？」
「登ること」
「家でいつもなにしてるの？」
「何もしない」
「好きなアーティストとかは？」
「パンク全般」
適当に全部答えた、コイツに自分の事を知られるのが嫌だった。
でも嘘はついてない、料理で好きなの中心に作ってくし、趣味・特技はフリークライミングだし、家にはあんましいないし、音楽もパンク以外は聞かないし

「何か適当すぎない？」
「別に」
「何か冷たくない？」
「いつも通り」
「もぉ。じゃあ私に何か質問ある？」
コイツやりづらい質問しやがって
「ない」
「何かあるでしょ」
「じゃあ、何でそんなに俺に構ってくるの？」
「…」
我ながらナイスな質問だ、やっと黙ってくれたよ、コイツといると疲れる、沈黙がここまで気持良く感じるとは
～♪～
あっ、俺の携帯が鳴ってる、ってかマナーモードにしわすれた、周りの目線が痛い
“ヤッホー、今何してるんだよ？”
チカからだ、デートにも関わらず、即返信
“電車乗ってる”
沈黙が続いたまんま、これなら早く帰れるかもな、相手も居心地悪いだろうし
“あっ、悪い、遊んでた？なら帰ったら電話しろ。（^＿^）／~バイバイ”
おい！やめるなよ、唯一の安らぎが…
“分かった、バイバイ”
助け舟沈没、チカ、肝心な時に気を使うな
「誰？」
「友達」
「男？女？」
「どっちでもいいだろ」
「良くない！」

いきなり怒鳴り始めた、電車の中だぞ
「何で？」
「私だけを見てて欲しい、今日だけでいいから、一日だけでいいから」
今にも泣き出しそうだ、どうも女の涙には弱いんだよな、俺
「分かった、今日だけな」
なんだろ、段々コイツが怖くなってきた
「ほら、もうすぐ着くから、行こ」
原宿についてとりあえず雑貨屋を回った、でも俺は心ここにあらず、早く帰って電話する事だけを考えてた
「ねぇ、もうそろそろお昼にしない？」
「良いけど、オススメの店とかあるの？」
「あるよ、最近できたばっかの、カレー屋さん、美味しいって評判だよ」
「じゃあそこ行くか」
カレーは嫌いじゃないし、腹が減ったから考える余地もなかった。
カレー屋は、いかにも若者向けのオシャレな感じだ、こういう店は嫌いだ
「オシャレなお店でしょ」
「うん」
「気に入った？」
「まぁまぁかな」
そんなことを話ながら、先にメニューに手を伸ばした
「何が美味しいの？」
「えぇとね、これ」
指差した先には、“チキンカツカレー”の文字が
「ふぅん、渡辺は決まってるの？」
「まぁ一応」
店員を呼んだ
「俺チキンカツカレー」

「私もそれで」
「えっ、俺といっしょで良いの？」
「うん」
「じゃあ以上で」
スタスタと店員は歩いて行った、にしてもこの女も何で俺といっしょのを
「さっきのメール女の子からでしょ？」
何で自分から蒸し返す、コイツよくわかんねぇ
「そうだけど」
「私と、どっちが大事？」
また場の空気を冷めさせるような質問を、ってかすでに冷めてるか
「今はメールの相手かな」
こう言っとけば相手も満足だろ
「ってことは、明日には私の方が大事って、言わせてみせる」
「頑張って」
あえて他人事のようにした、だって何があろうとこの女に傾く事は、後にも先にもまずありえない。
その後相手は、少し上機嫌だった、スグにカレーが来たから良かったけど、割と空気が重かったりもした
「これ美味いね」
「でしょでしょ！」
目を輝かして言ってるけど、お前が作った訳じゃないだろ、作ったのは店だろ
「量、多くない？」
「そう？普通じゃない」
いや絶対に多い、俺は食いきれるけど、確実に相手は食いきれないな
「多かった」
「早！シシキ君食べるの早すぎ」
「まぁね。進んでないけど、もうお腹いっぱいなの？」
静かに頷いた、もったいない、せっかく作ってく貰ったのに

「頂戴」
「えっ？」
「だから、もったいないから頂戴」
「おばちゃんみたい」
「なら自分で食う？」
「いや、お願いします。」
かなり無理して食べた、若者向けだからって、明らかに以上だよ
「ヤベ、死ぬ」
思わずその場に伏してしまった
「大丈夫？」
「まぁ、何とか」
「何で、そんなに無理したの？」
「自分で稼いでないのに、飯を残すほど、デキ悪くないから」
「何かよく分からない」
分からねぇよ、何も苦労しないで生きてきたお嬢ちゃんには
「自分の食える量だけ頼む、それ常識だろ」
うつ向いてる、当たり前だろ。コイツ、育ちが良いので有名だからな、いわゆるお嬢様ってやつだ
「今度からは残すなよ」
「うん」
「じゃあ行くか」
そうして俺等は店を出た。
その後カラオケに行った。
たまにカラオケは行くけど、歌いたい歌がないから、大体1・2曲歌って聞き手に回るのがいつものパターンだ
「ココって曲の層が広いんだよね」
高が知れてる、と思ったらビックリ、歌いたいのがほとんどある、曲数多！
2時間くらい歌ってでた

「シシキ君歌超うまいね」
「普通じゃない」
「プロみたいだったよ、でもなかなか私の番が回ってこなかった…」
「すみません…」
俺がほとんど歌ってた、あまりの曲数にテンションがあがって、ついついマイクを独占してた
「でも良いよ、今日一番良い顔してたから」
「ありがとう」
良い顔してた、始めて言われた言葉かも
「もうこんな時間だ、帰ろうか」
「うん」
俺は少し早めに、切り上げた、帰りの電車の中では大半が世間話だった
「じゃあここで」
「あぁ、気を付けて」
「うん、バイバイ」
「じゃあね」
はぁ、一日疲れた、マジシンドイ、何であの女といると疲れるんだろ
チカに電話するか

赤との電話（前書き）

今回はカイとチカの会話中心に進んでいきます

赤との電話

“呼び出し中”
「もしもし」
「俺、俺」
「詐欺？」
「違う。今帰ってきた」
「で？」
「いやチカが電話しろ、って言ったんじゃん」
「あぁ、そうだった」
「で、何？」
「夏休み暇？」
「暇っちゃ、暇だけど」
「うちらの島に来ない？」
「うちらの島って、チカが住んでる？」
「家、民宿やってるんだけど、団体さんの予約が入って、人手不足なんだ、だからカイが手伝えと」
「期間はどのくらい？」
「2日間で良いから、やってくれたら、夏休み無料で泊めてやるよ」
「分かった、全身全霊をかけて手伝わせて頂きます」
「で、船が明後日のに乗らないと間に合わないんだけど…、大丈夫だよな！」
「まぁ一応」
チカに毎日会えるなら、何日でも手伝いたい、でもこんなに早く会える何て、世の中棄てたもんじゃないな
「で、仕事内容は？」
「料理できるだろ？」
「特技が料理ですから」
「朝と夜の飯を作って欲しいんだ」

「良いの？俺なんかで？」
「良いの良いの！で、どうするの？」
「一度“やる”って言ったんだからやるよ」
「流石カイ。でも良いの？大事な夏休みをタダ働き何かに、費やして」
「良いよ、こっちいても、つまんないし、そっちの方が楽しそうだし」
「何にもないぞ」
「だからだよ」
「何で？」
「何もない所が大好きだから」
「変な奴」
「あっ、もう手伝わねぇ」
「アタシはその考え立派だとおもうよ、うん」
「民宿の手伝い、頑張るか！」
「調子の良い奴」
『ハハハ！』
何で、
何で電話なのにこんなに楽しいんだろ、
何で声だけで相手の心がわかるんだろ、
何でこんなに俺、笑ってるんだろ、電話越しなのに笑ってる
「チカ、ありがと」
「何だよ急に、気持悪い」
「うるせぇ、素直に受けとれよ」
「…どういたしまして」
「何かチカと話てると、楽しい」
「アタシも」
「一番早くてそっちに行く、フェリーはいつあるの」
「明後日」
「はっ！？」

「明後日の、それを逃すと5日後」
「じゃあどっちにしろ明後日か」
「何、凹んだよ？」
「早くチカに会いたいから、2日は長いなって」
「えっ？」
「なぁんてな、ビックリした？」
「…馬鹿」
あれ、何か涙声だぞ、ヤベェもしかして、また泣かしたの俺
「ゴメンゴメン、泣くなよ、なっ？」
「泣いてねぇよ！」
「ホントに？」
「しつこいなぁ、ホントに泣いてねぇよ」
「よかった」
「何で？」
「女を泣かす男は最低だろ、女の笑顔を作れる男になりたいんだ、だからせめてチカだけは笑顔でいて欲しい、他の女を裏切るかもしれないけど、チカだけは笑顔にできる男になる、そう決めたから」
「何でアタシなの？」
「始めてできた、親友だからかな」
「何だよ、アタシに惚れてるのかと思った」
「へ、変な事言うなよ。親友、親友だよ」
図星？少しテンパった
「でも何かカイって、哀しいね」
「何で？」「つい最近会ったアタシが、唯一の親友だよ、アタシの何倍も、話して・笑って・怒って・泣いた人だっているでしょ？」
「他人に感情を出すことは、まず有り得なかったんだ、だから笑いもしないし、怒りもしない」
「何で感情を出さないんだよ？」
「ゴメン、言えない」
「どうして？」

「俺がこの事を話す相手は、何があっても守り抜く人、そう決めてるんだ」
「何か重そうだな、いつかその重りがとれる時が来ると良いな」
「そうだな」
「何かしんみりしちゃったな、今日こんくらいにしとくか」
「そうするか、じゃあな」
「じゃあな」
“プッ”
切れちゃった、守り抜く人か、チカにあの事を話したかった、でも今の俺に他人を守り抜く自身も力もない、いつかは言えるような男になるよな。
その日まで待っててて欲しい

青への想い

昨日は寝れなかった、チカの事、過去の事、これからの自分の事、だから凄く眠い
“ピンポーン”
またかよ、昨日会ったからもういいだろ
「何？」
玄関の前には案の定、渡辺が立ってた
朝っぱらから、何でコイツの顔を見なきゃいけないんだ
「一緒に行こう」
一緒に？あぁジムか
「ゴメン、今日は気がのらないから、やめとく」
「何で？」
お前が嫌いだから、じゃなくて
「寝不足」
「なら少し話そう」
「少しだけな」
今すぐにも寝たいくらいだったけど、帰ってくれるなら、我慢するか。
家の近くに大きな公園で話をした
「で、話って何？」
「いや、とくに無いんだけど、シシキ君と話たかった」
寝不足だって言ったのに
「なら帰るよ」
何も無いなら帰ろうと思って、立った時に後ろ手を掴まれた
「待って」
「何？何も無いんだろ」
「そうだけど、側にいて欲しいの」
ふざけるな、コイツ彼女気取りかよ

「眠い」
「なら私の肩で寝ていいから」
“プチッ”
何か切れる音が聞こえた、何が悲しくて、嫌いな女の肩で寝なきゃいけないんだよ
「悪いからいいよ」
「お願い、一緒にいて…」
あれ、泣き出しちゃった
「ゴメン、側にいるから、泣くな」
「…ありがと」
それから何分たったかな、ホントに隣に座ってるだけだ、何回か寝かけた
「何かあったの？」
「…昨日から、シシキ君が遠くに行っちゃうような感じがして、凄く怖いの」
予知能力！？でも夏休みの間だけだし
「明日から旅行行くだけだから」
「ホントに旅行？」
「お手伝いを兼ねた旅行」
「…でも」
まだ渋った顔をしてる、俺としてはもう会いたくないけど、コイツは何で俺に固執するんだよ
「夏休み会えないくらい、大した事じゃないだろ」
「大した事だよ！」
「何で？」
怒ってるし、何でそこまで、別に俺と違って友達はいるだろうし、友達一人がいなくても差ほど変わらないだろ
「シシキ君の事が好きなの！誰よりも大好き！」
……？
「はい？」

「私ずっとシシキ君の事が好きだった、だから一秒でも長くシシキ君といたいの」
もしかしてこれって、告白ってやつ？
「何で俺？」
「シシキ君は憶えてないと思うけど、私一年の時に今の中学に転入して、始めて話かけてくれたのがシシキ君だったの」
「そんだけ？」
「違うの。私が初日で教科書とか無くて、困ってた時に隣にいたシシキ君が教科書見せてくれたの。スゴく嬉しかった」
「…そんなこともあった」
記憶が曖昧だけど憶えてる、確かに見せたけど、当たり前の事をしただけなのに、それに話って言っても
「見る？」
だけだし
「だから私シシキの一番になりたい」
「ゴメン。俺、渡辺に興味ないから」
我ながら冷たい一言だな
「ヤダ！これから好きになって、私はシシキ君じゃなきゃダメなの」
「無理だよ、後にも先にも渡辺の事を好きになる事はないよ」
「何で？私の何がいけないの？治すから」
全部ダメだけど、理由はそこじゃない
「気になる人がいるんだ」
唖然とした顔をしてる
「だ、誰？私の知ってる人？」
「知らないよ」
「何で私はダメで、その人なの？」
コイツ自意識過剰もほどほどにしろ、せめて同じ土俵に立ってから、自惚れろ
「それは渡辺の俺に対するキモチと同じだよ」
「私の入る余地はない？」

「じゃあ渡辺は、俺以外の誰かを好きになれるか？」
「……」
自分は相手無しの生活は考えられない、でも相手は自分の事を想ってない、その時俺だったらどうするかな
「ゴメン、だから俺は、好きになれないよ」
「私諦めないから、絶対にシシキ君の一番になる」
「良いの？」
「このまま友達でいてくれれば、いつかは好きになってくれる、そう信じてる」
可哀想だけど、その日は来ないよ
「あぁ」
「じゃあ私帰るよ、じゃあね」
「じゃあね」
帰って行った、帰り際泣いてた、俺が泣かしたんだ、最低だ。
でも嘘ついて、付き合うよりはマシだろ、もし付き合ったとしても、同じ末路だろうな。

帰った後、昼寝をした。
起きたのは夕方だった、時間が長く感じた、一秒が一時間に、一分が一日に、一時間が永遠に感じた、こんなに明日が待ち遠しいなんて、始めてだ。
やっと明日会える、短いけど長かった

赤との再開

変な夢を見た、長い長いトンネルみたいな所を歩いてる、後ろと前に光がある、振り返ると光が無くなって、地面が崩れていった、呑み込まれないように必死に走って、前の光にたどり着いたら、人が3人立ってた、そこで夢が終わった。
何だか悲しいけど、心地よい不思議な夢だった。
ってかそんな事考えてる暇ねぇ
「お袋！もう行くから」
「行ってらっしゃい」
時間が無かったから走って家を出た、電車に乗って港に行く時に、自分の街がいつもより遠くに感じた

「何とか間に合った」
出港１０分前に着いた、今日はチカの島に行く日だけど、どうも昨日の事を考えてたら、また寝不足気味、着くまでは時間があるから寝るか

あぁ、船揺れてるな
「…ろ！…きろ」
ガキが騒いでるよ、うるせぇな、人の眠りを邪魔しやがって
「起きろカイ！」
“バチン！”
「イッタ～！何すんだよ、馬鹿が！」
「カイが起きないからいけないんだろ！」
「チカ？」
チカの顔が真正面にある、周りには誰もいない
「何でチカがいるの？」
「何でじゃねぇよ！早く降りるぞ！」

「降りるって？」
まだ頬がイテェ、何かフラフラするし
「もう着いてるぞ！」
「何処に？」
「島にだよ！馬鹿が！」
“バチン！！”
本日二度目也、やっと状況把握ができた…
「…痛いし、ヤベェ！」
今の状況は、寝過ごして島に着いたは良いけど、起きなかった、でも何でチカが？
「チカが何でいんの？」
「いいからとりあえず、降りるぞ！」
チカが俺の腕と鞄を掴んで走って船を降りた。
二発目のビンタで起きてるけど、案外チカのビンタが頭にきた
「で、何でチカがいるんだよ？」
「港で待ってたのに、カイが来ないから船に入れてもらったら、爆睡したカイがいたんだよ」
「あぁ、納得」
「納得じゃねぇよ！子供じゃないんだから、自分で起きろ！」
「うわっ、危な！」
またチカのビンタが飛んできたけど、三度目の正直ってやつ？流石に何回もビンタはされてたら顔が腫れる
「なかなかやるじゃん」
「いや、眠くなきゃこんくらい…。ってか良い島だな」
今始めてまともに島を見たけど、自然が多くて、喉かで、何より最高の岩山
「だろだろ！」
「あの岩山何？」
「あれか、未開の地。あんな岩山だから誰も登れないんだよ」
ヤケに燃えた、久々に興奮っていうか、血が騒ぐっていうか、とり

あえず
「あの岩山まで案内して」
「何で？」
「登る」
チカが大笑いし始めた
「馬鹿じゃないの！９０度の壁をどうやって登るんだよ！」
「じゃあ登れたらどうする？」
「逆に登れなかったからどうるんだよ？」
「土下座でもなんでもしてやるよ」
「じゃあアタシも何でもやってやるよ」
こんな先の見えた勝負つまんね、１５ｍくらいだから、何も無しで余裕だな

「ほら、着いたぞ」
「……」
「どうした？怖じ気付いたのか？」
「少し黙ってて」
集中、
「どんなに簡単な所でも、観察を怠るな」
ってコーチが言ってたな
「ヨシ！１０分ちょっと待ってろよ」
「頑張れ」
あれ、何かチカがマジで応援してる。
思ったより簡単だな、掴み易いし、堅いし
「えっ？あれ？嘘！？スゴ～イ！カイ凄いな！」
案外簡単に登れたな、眺めが最高だし、誰も来ないし、何か俺だけの場所みたい。
下りるとチカが跳ねてた
「カイ、スゲェスゲェ！ホントに登っちまったよ！」
「はしゃぐな、こんくらい普通だ」

「何で登れるんだよ、壁だぞ壁」
「フリークライミングやってるからこれくらいなら」
「フリークライミング？」
「俺が今やったのに近い事だよ」
「スゲェな」
「さぁ、罰ゲーム、どうするかな」
「ホントにやるのか？」
「そうだこの島案内してよ、それが罰ゲーム」
疑問と安堵が顔に出てる、まぁ勝って当たり前だったから、こんくらいでいいだろ
「しょうがねぇな」
「お願いします」
荷物を民宿に置いてからまわった、医者や学校、その他いろいろまわった、この島最高だよ
「ホントに良い島だな」
「何も無いだろ」
「でも良い所じゃん、チカのオススメスポットとかある？」
「あるよ、行く？」
「行く」
チカに案内された場所は、林をの奥の砂浜で、入り江みたいになっていた、波の音が周りに反響して、最高に気持良い音を出してる
「スゲェ」
「だろ、アタシくらいしか知らない所だぞ」
「えっ、良いの、こんな所に案内してくれて？」
「カイが案内しろ、って言ったんだろ」
「そうだけど…」
嬉しかった、チカと二人だけの秘密が出来たきがした
「ここの夕日が最高なんだよ、まだ時間があるけどな」
「時間があるか…」
その時ふと頭を一つの事が浮かんだ、何となく引っかかってた事が

あった
「あのさ、一つ質問していい？」
「良いよ」
「答えたく無かったら、答えなくていいから」
「何だよ、早く言えよ」
「チカってさぁ、気が強いのに、何で泣き虫なの？」
黙っちゃった、やっぱりマズイよな、俺があの事を言わないのと同じように、言いたくない事の一つや二つ
「ゴメン、言いたくないなら、言わなくていいよ」
「大丈夫だよ、そんなに聞きたい？」
「聞けるんなら」
黙ってる、考えてるのか、言いづらいのか
「アタシね、東京に兄貴がいるんだ、アタシ兄貴の事が大好きなんだ、親よりも誰よりも兄貴が好きだった。小さいころは泣き虫で、甘ったれで、金魚のフンみたいに兄貴に引っ付いてたんだ」
今でも泣き虫だし、金魚のフンってジジイか
「どんな事があっても守ってくれたし、泣いてても慰めてくれた。でも高校に行ったら、長期の休みにしか帰って来なかった、それでも帰って来てたから、まだマシだった。でも5年前に兄貴が大学進学で、東京に行ったんだ、、兄貴が全てだった、それが無くなって気付いたんだ。アタシはダメな奴だ、兄貴なしじゃ何もできない、それで強がりで最初のうちは、こんな感じだった、でも今はこれが板についてきたんだ、でもたまに弱い自分が出てくるんだ」
凄い可哀想な奴なんだな、でも俺と似てる
「じゃあ今度からは、俺にいろいろ相談しろよ、メールで電話でも、そうすれば少しは楽だろ」
「ありがと。夕日、綺麗だな」
「ホントだ」
丁度夕日が沈んでる、真っ赤に燃えてるみたいだ、海に一筋の道が出来てる

「スゲェ…」
チカの顔が真っ赤に染まってる、前髪を上げて短い髪の色と夕日
「同じだ」
「何が？」
「チカと夕日」
「美しさ？」
「色だよ」
「じゃあアタシと夕日、どっちが綺麗？」
「夕日」
即答、しかも女の台詞か、それ？
「少しは考えろ」
「いや、当然の結果だろ」
『ハハハ』
何かチカといると全部忘れて、素直になれる、チカマジック？
「もう暗くなってきたから帰ろう」
立ち上がって、チカに手を差し出した
「そうだな」
やっとチカに会えた、２ヶ月ちょっと、長かった

白との出会い

辺りがすっかり暗くなって、少ない街灯を頼りに歩いてた。
前からサーフボードを持ったデカイ男が歩いてきた
「おう、チカぁ！」
「ユキ！」
ユキ？女の子？でもこんなデカイ女は嫌だな
「あれ、お隣にいるイケメンさんは誰ぇ、チカの王子さま？」
「チゲェよ！」
かなり独特な喋り方、ヘラヘラしてるけど、軽い感じがしない不思議な奴
「ほら民宿手伝ってくれる奴だよ」
「あぁ！チカを助けてくれた人かぁ、大人っぽいなぁ」「ども、はじめまして。チカとタメの四色海、よろしくな」
「俺は樹々下雪（キキシタユキ）、髪の色が真っ白で雪みたいだからぁ、ユキィ」
確かに真っ白だ、街灯の淡い光でも綺麗な白、それに黒い焼けた肌が更に、短い髪を際立たせてる、それに身長もあるけど、顔立ちもスタイルもモデルみたいだ、ジャニーズですって言っても誰も否定しないような感じだ
「高校一年の１６歳、ダメ口で良いよぉ、チカ何て俺にはメチャクチャ口悪いしぃ」
「いらねぇ事言うんじゃねぇよ！」
「ほらねぇ」
「確かに。じゃあお言葉に甘えてタメ口で」
「だから今日チカも海に来なかったんだぁ」
「アタシもって、マミ姉も？」
「うん、一人で淋しかったぁ」
「マミ姉は何で来なかったの？」
「こないだのあれぇ」

「あぁ」
「ねぇ、マミ姉って誰？」
二人で進んでくから思わず、横から入っちゃった
「マミ姉はユキの女」
「違うよぉ、マミは俺とチカの幼馴染み」
「ユキの女か…」
「カイもそんな事を」
「ユキもマミ姉もカイと一緒に民宿手伝ってくれるんだぞ」
「そうなんだ」
「カイはコックさんだっけぇ？」
「そうだよ、ユキとかは何するの？」
「俺とマミとチカは接客兼雑用ぉ」
「同じなのは雑用だけか」
「一緒にがんばろうなぁ」
「あぁ」
ユキといると自然と笑顔になる、本物の笑顔って他の人に移るもんなんだな、こんなユキが惚れたマミ姉って人はどんな人なのかな？てか他人に興味もつなんて、俺も変わったな
「チカは明日、海に来るの？」
「明日くらいだしな、明後日から仕事が始まるから遊んどかないと。カイも来るだろ？」
「まぁ、暇だし行くよ」
「マジでぇ、じゃあ明日は俺張り切っちゃお」
「頑張れ～」
「何か適当だなぁ。俺はもう帰るよぉ」
「じゃあ明日、見に行くから」
「おう、期待してろぉ、バイバイ」
『じゃあね』
ユキが帰って行った、後ろから見ると更にデカイ、黙ってれば良い男って、ユキの事だな

「明日はマミ姉連れてくか、カイも見たいだろ」
「でも急に行って、迷惑じゃないの？」
「大丈夫、マミ姉は優しいから」
「まぁチカがそういうなら…」
そういえば、ユキはあの感じだとサーフィンやってるみたいだけど
「チカとマミ姉って人はサーフィンやってるの？」
「アタシはサーフィンやってるけど、マミ姉はしてないよ」
「ふ～ん」
「何？」
「別に」
チカのサーフィンってのも、楽しいみだな
「チカのサーフィンも楽しみにしてるよ」
「楽しみにしてろ」
明日が楽しみ、チカに会ってからそう思えるようになった、未来に希望が見い出せるって事は、過去を許せたって事かな

黒との出会い

「起きろ！」
うるせぇな、朝っぱらから、誰だよキンキン怒鳴りやがって
「起きろ！カイ！」
“ドスッ！”
「うっ！」
腹に鉄拳が…
「早く起きろ」
「く、苦しい…」
チカが怒って俺の顔を覗いてる、ってかコイツはまともに人を起こせないのかよ
「苦しいじゃねぇよ、何時だと思ってんだよ？」
「…8時」
「遅い！サーフィンは朝からだ、これじゃあ遅刻だ！」
「分かったから、朝から騒ぐな、頭に響く」
「早く支度したら行くぞ」
「OK」
にしても、チカ朝からテンション高いな、朝弱いから、俺にはサーフィンは無理だな
「早くしろよ、カイ！」
「分かってるよ！」
ヤベェ、チカのテンションについていけない、そういえば起こされたの久しぶりかもな。
着替えて飯を食ってチカと家を出た
「多分マミ姉は家にいると思うから、そこに寄ってくから」
それはいいんだけど、一つだけ物凄く気になる事が…
「チカ、ボードは？」
「それも今から取りに行くから」

「チカは持ってないの？」
「持ってるけど、ジョニーの所に置いてある、この島のサーファーは大体ジョニーの所に、ボード置いてあるからな」
ジョニー？外国人？
「ジョニーって誰」
「それも紹介してやるよ」
気になる、俺の中でいろいろ想像が膨らんでいくけど、どうも確信まではいかない、また一つ楽しみができた
「ココがマミ姉の家」
「床屋？」
どこの床屋にもあるクルクル回ってるのがあった
「マミ姉は髪切るのが上手なんだよね、アタシもユキも切ってもらってるんだ」
すごいな、チカは前髪を上げてるけどオシャレだし、ユキもオシャレな髪型してたし、才能ってやつかもな
「マミ姉！！」
「うわっ！ビックリした」
チカがいきなり叫び始めた、非常識な奴
「あのさぁ、叫ぶのはかなり迷惑だろ」
「大丈夫、みんなこんなだから」
「ホントに？」
「あぁ」
「なら信じるけど」
でもおかしいよな、叫ぶのは無いだろ。
中から黒くて長い髪の女の人が出てきた
「チカちゃん、叫ぶのはやめて、っていつも言ってるでしょ」
俺は静かにチカを睨んだ、チカは笑って目を反らした
「あら、チカちゃん、お隣の男の人は誰？」
「あっ、どうも、チカの民宿の手伝いで来た、四色海です」
「そんな堅くなら無くても、楽にして良いよ」

「ユキも同じ事言ってた」
「あら、ユキ君にも会ったの？」
「昨日、チカと一緒にいたら会った」
「ふ～ん」
「な、何よマミ姉」
「カイ君はチカちゃんの王子さまか」
「もぉ！やめてよ」
「照れなくてもいいよ、東京で助けてくれたのも、カイ君でしょ」
この人鋭い、しかも悪魔
「あの、マミさん」
「やだ、マミさん何て、マミ姉で良いよ、っていうか自己紹介してないっけ私？」
「うん」
「ゴメンね。蘭真珠子（アララギマミコ）、ランって書いて、アララギ、珍しいでしょ」
「始めての出会いかな」
「楽しい事言うのね、」
「いや別に狙ったわけじゃ無いけど」
「あらそう。カイ君は大人っぽいけどいくつ？」
「チカとタメ」
「そう、私はユキ君と同い年、一個上になるのね」
高校生にしては大人っぽい、背も高いしユキと一緒にいたら目を引くだろうな、それに綺麗でお嬢様風で少し悪魔で、男はみんな惚れるよ
「マミ姉はかなりモテるでしょ？」
「そんなでも無いよ」
「マミ姉はユキ一筋だから、他の男に興味ないから」
「あぁ、そういうことか」
「チカちゃん、カイ君…」
目が怖い、笑ってるけど、目で訴えてくる
『ゴメンナイ』

そりゃ謝るよ、あんな目をされたら
「良いのよ謝らなくて、二人には敵わないから」
「変なこと言わないでよ、マミ姉」
悪魔だ、マミ姉には歯向かわない方が身のためかもな
「アタシ達はジョニーの所に行ってくるから、マミ姉は先にいつもの海に行ってて」
「変なこと考えてないわよね？」
「タダ単にボード取りに行くだけだよ」
「そう、じゃあカイ君、チカちゃんの事頼んだわよ」
「頼まれた！」
「カイ、変な事言うな！」
マミ姉に頼まれ無くても、そのつもりです。
マミ姉の家を離れて、二人でジョニーっていう人の所に向かった
「マミ姉って、時々怖いよな」
「カイもそう思う？」
「悪魔だよな、あれは」
「ユキには違うんだよな、ユキにだけは甘いんだよ」
「良いんじゃないの」
「まぁね」
ユキもあんな綺麗な人に惚れられるとは、なかなかやるじゃん

青の自信

チカと話をしながら、歩いてるとサーフボードがいっぱい並んだ、家が目の前にある
「もしかしてあれ？」
「そうだよ」
いかにもって感じだな
「ジョニー！！」
また叫んでるよ
「あのさぁ、それ絶対におかしいよな、マミ姉も嫌がってたじゃん」
「あはっ、バレた」
「いや、バレバレだから」
中から金髪の長い髪を後ろでオールバックにして結んだ、いかにもサーファーっぽいおっさんが出てきた
「おう！チカちゃんじゃねぇか！ボード取りに来たのか！？ユキはもう海に出てるぞ！」
声デカっ！しかもかなり豪快な喋り方、ユキとは真逆だ
「そうだよ。カイ、これがジョニー」
「あ、どうもはじめまして、四色海です」
「ジョニー、コイツが東京でアタシを助けてくれた人」
「そうか！お前がチカちゃんを助けてくれたのか！礼を言う！でもチカちゃん！良い男ゲットしたな！」
「変なこと言うなよ、ジョニー！」
ジョニーの勢いについていけない、しかも耳がキンキンする
「カイ！」
「はい！？」
思わずピンッと、背筋を伸ばした、そりゃこの声のボリュームで呼ばれたら、当然でしょ
「チカちゃんを頼んだぞ、あの子あぁ見えて弱いから、誰かが守っ

てやらねぇと」
肩に腕を掛けて、耳元で小声でチカに聞こえないように、言ってきた
「女を守るのが男の当然の義務ですから」
「ブハッ！気に入った！カイ！お前は最高の男だ！これやるよ！」
耳元で大声張り上げないでくれよ、鼓膜が破けるだろ
「じ、ジョニー！そんな大事なものあげて良いのかよ！？」
ジョニーが持ってきたのは一枚のサーフボードだった、チカは異様に驚いてたけど、俺にはその理由がサッパリ分からない、沢山あるボードの内の一枚だろ
「あれ、何かスゴいの？」
「これはな、儂がハワイの大会で優勝した時の副賞だ！使わないからカイにやる！」
まだそのスゴさの実感が、まったく湧かない
「ふ～ん」
「ふ～ん、じゃねぇよ！これは日本人で持ってるのは、ジョニーだけなんだぞ！」
「どういう意味？」
「日本人で、この世界大会で優勝したのはジョニーだけなんだよ、しかも3連覇で前代未聞の大記録まで作ったんだぞ」
……
「はぁ！？いや、そんなもの受け取れないですよ！」
「良いんだよ！あと一枚あるし！一人で何枚もいらないだろ！？それに一目見たときからお前に才能を感じてたんだ！」
「いやでも俺サーフィンやったことないですから」
「ならユキに教えてもらえ！あいつはこの島で儂の次に上手いからな！」
へぇ～、ユキってすごいんだ、でも島って言っても狭いし、期待しなくてもいいだろ
「じゃあ、お言葉に甘えて…」
「おう！持ってけ持ってけ！」

「あの、一つ聞きたい事があるんですけど」
「何だ！？」
「俺が一枚、ジョニーが一枚、後一枚はどこにあるんですか？」
「ユキの奴が使ってる！」
「へぇ～、ユキが」
自惚れじゃ無いけど、俺は出来ないスポーツはない、大体最近のスポーツは簡単過ぎてつまんない、サーフィンはやったこと無いけど、波に乗って上に立つだけなら一発でいけるだろ
「ユキは無理だと思うけど、この島で３番目くらいになってくれれば、儂の見る目も確かなんだか！ま、とりあえず頑張れや！」
俺は慣れない手付きでボードを持って、チカと海に向かった。
内心、ジョニーには勝てないけど、ユキには勝てるそういう出処の分からない自信があった、

その自信が砂上の如く崩れ、俺のプライドごと消し去ってしまうとも知らずに……

青とサーフィン

「着いたぞ」
そこは誰もいない浜辺だった、誰もいないって言っても、マミ姉とユキがいるけど
「穴場？」
「そう、アタシ達しかしらない場所」
水も砂浜も綺麗だった
「悪い、カイこれ持ってて！」
チカがボードを俺に渡してユキ達の方に走って行った、ユキの後ろに行って思いっきり蹴りを入れてた
「意味わかんねぇ」
「痛ぁ！何するんだよチカぁ！」
「イチャイチャしてねぇで、サーフィンしろ」
更に意味が分からねぇ、チカは何かとユキをイジリたいのかもな
「チカ、これ持てよ」
チカの側に行って、ボードを渡した
「おう、カイ。あれぇ、ボード持ってるけど、カイもサーフィンやるのぉ？」
「いや、ジョニーに無理矢理持たされた」
そう言ってボードをみした、ユキはニカッと笑って自分のボードを俺に見せてくれた
「俺と一緒ぉ、あの人の才能センサーはスゴいぞぉ。チカもこんなだけどぉ、チカのボードはハワイの別の大会で優勝した時の物を、少し加工してチカに合わして作ったんだぞぉ」
何か分からないけど、チカにも才能があるって事が分かった
「いや、でも俺初心者だし、貰ってもな」
「じゃあ、俺が教えてやるよぉ」
「お願いします、先生」

ユキは照れてる
「先生なんてやめろぉ。一時間で完璧に乗れるようにしてやるよぉ」
チカが大笑いしてる、何がおかしいんだよ
「ユキはやっぱり馬鹿だ！一時間は無理、アタシでも半日かかったんだぞ」
「俺は一時間だぞぉ」
「ユキは天才だからだよ、普通は1日以上かかるもんなんだよ」
何か二人の話を聞いてると、二人が凄い事は何となく分かった
「でもボード貰ってるから大丈夫ぅ」
「一時間は長い、３０分で乗れるね」
ユキの表情が変わった、背筋が凍るような目をしてる
「カイ、サーフィンなめるな」
静かだけど怖かった、俺は何となくその理由が分かった
「悪い悪い。これから俺が一回やるからそしたら海でるぞぉ」
「はい、先生」
ユキは慣れた感じで、海に出ていった
「カイ君、ユキ君はね、あんなヘラヘラしてるけど、サーフィンへの情熱は誰よりもあるんだよ」
何か、物凄くユキに悪い事をしたと思った。
ユキは波に乗ってる時は、満面の笑顔だけど真剣さが伝わって来た。
ユキが海からあがってきた、俺はココに来る前に海パンを履いてた
「じゃあ、カイ行くかぁ」
海はの中は気持ち良かった、この後海と格闘するとも知らずに…
「じゃあ、最初は俺が合図するからぁ、それに合わしてぇ」
「分かった」
ユキのを見てて何となく一連の動きを把握してた
「おっ、波来るぞぉ」
俺には全然分からなかった
「準備しろぉ」
何かだんだんと緊張してきた、スポーツで緊張したのは、フリーク

ライミングを始めてやった時以来だ
「今だぁ！」
ユキの合図と同時に、パドリング（クロールの腕だけ）で進むような感じで、何となく波を捕えた感じがした
「立てぇ！」
ユキの合図で、腕を突っ張って立った…、と思った瞬間、足をすくわれてそのまま転んだ
「クソが！」
「何でぇ？凄いよ、最初から波を捕えられるなんてぇ」
「立てなきゃサーフィンじゃない」
「ハハッ！確かにぃ、なら立てるまでやるかぁ」
燃えてきた、難しくて、スリリングで、新しい、乗れなかったけど、サーフィンに魅了された俺がいた
「ユキ、試しに一人でやってみるから、合図はいらないから」
「頑張れぇ、カイは俺が思ってた以上だよぉ」
俺は集中して沖を見た、さっきの感じを始終忘れないようにして
「…キタ」
さっきとまったく同じように、スタートして、さっきと同じように立とうとした、でもまた転んだ
「何でだよ！」
「カイ、凄いよぉ、二回目でここまでなんてぇ」
「でも…」
「大丈夫、カイは才能あるからぁ、すぐに乗れるようになるよぉ」

その後、ずっとやり続けたけど、でも一回もまともに乗れなかった、最初の自信はもう無いよ、悔しい、だって簡単そうだから甘く見てたら、この様だ、諦めはない、むしろ挑戦の気持ちが強かった
「カイ、少し休んだらぁ？疲れたでしょ」
「大丈夫、あと少しで何か掴めそうなんだ」
「熱心だなぁ、カイがそんなに熱かったなんてぇ…」

「サーフィンの魔力ってやつ？」
「頑張れぇ」
今までスポーツはいろいろやってきたけど、どれも少しやれば出来るレベルだった、だからどれも興味が湧いてこないんだ、でもサーフィンは何度やっても出来ない難しさ、こんなの始めてだった、よく分からないけどそこに惹かれた。
波が来て、パドリング、波を捕えたところで立つ！何かいつもと違う、スムーズだ。
気付いたら波に乗って、立ってた、普通に波乗りしてる
「ヨッシャー！！」
少し調子に乗りすぎて転んだけど、確かに乗れた、嬉しかった、最高の気分
「ユキ！今乗れたよな」
「スゲェよ、乗れてるよぉ、カイにはやっぱり才能があったのかぁ」
俺は興奮した足で、チカとマミ姉の方に走った
「見た！？俺、乗れてたよな？」
「スゲェじゃん」
「カイ君、凄いね、まだ４０分ちょっとしかたってないよ」
俺はユキの肩に、ポンッと手をのせて
「ゴメンな、ユキ」
「何がぁ？」
「あっという間に抜いちゃうかもな」
「ムリムリ、急速成長してぇ、来年には３番目かなぁ」
「島で？」
「日本でぇ」
「…日本？」
「うん」
俺は一瞬フリーズした
「一位はジョニー後は？」
「二位は俺、三位はカイだったら良いなぁ」

「妄想？」
「ユキ君は日本人で二番目なんだよ」
マミ姉の言った事にビックリした、ユキが凄いのは何となく分かってたけど、そんなにとは…
「ホントに？」
「そうだよぉ」
「なら3番目は無理だろ」
「大丈夫だよぉ、俺以降はヘッポコだからぁ」
「いや、でも日本でだろ、無理だって」
「チカでも3番目くらいは行ってるよぉ」
「バ～カ、準優勝だよ」
コイツら、化け物だ、俺はこんな奴らを相手にサーフィン余裕とか言ってたんだ、馬鹿だな
「来年には最低でも、5本指に入ると思うよ」
「でも帰ったら、サーフィンを出来る環境がないし」
「そっかぁ、ココに住んじゃえばぁ」
「出来たら良いよな」
俺も住めるんならココに住みたい、でもまだガキだ、そんな行動力も勇気も悔しいけど持ち合わせてない。
そうか、俺、この島も、チカもユキもマミ姉も全部夏休みだけなんだよな、離れたくない

赤の孤独感

その後、ユキにコツなんかを教えて貰いながら、ユキ・チカ・俺の3人でサーフィンんし続けた
「カイ、お前ホントに天才かもな」
「チカとかと一緒だと、いかんせん説得力がないんだよな」
「素材は俺以上かもなぁ」
この二人、以上なくらいに上手い。
チカは女の子の柔かさを使って波を乗ってるから、波を乗りこなすって感じだ。
ユキは正確に似合わず豪快だ、来た波を力でねじ伏せるかんじだ、でもスピードが速いから豪快でもトリッキーに見える
「二人とも同じサーフィンしてるのに、全然違うよな」
「そんなもんだよぉ、カイも何となくスタイルが出てきたし」
「そんなもんなんだ」
「そう。あのさぁ、家に花火が余ってるんだけど、やらない？」
「良いねぇ、明日からはお手伝いだしな」
「ユキもたまには役に立つじゃねぇか」
「ユキ君カッコイイ、でどんな花火なの？」
「手持ちと、噴射、両方共いっぱいあるよ」
「じゃあ両方いっちまえ」
「チカ、別けた方が良いだろ」
「何で？」
「2回できるじゃん」
「私は手持ちが良い」
「マミがそう言うなら手持ちにするかぁ」
マミ姉の力は絶大だな、この中だったら最高権力だよ
「どう思うチカ？」
「ベタ惚れだな」

『ハハハ…』
マミ姉が物凄い眼光で、俺等を睨んできた
「二人共、何？」
『何でも無いです』
怖ぁ、マミ姉の悪魔を久しぶりに見たけど、子供ならトラウマになるぞ
「じゃあ、俺は花火取ってくるよぉ」
「私も行く」
『行ってらっしゃ～い』
ユキとマミ姉は、二人で花火を取りに行った
「あの二人っていつもああなの？」
「そうだよ、もう慣れたけど」
「チカが可哀想だな」
「何で？」
「いつも一人だったんだろ？」
「あぁ、いつもあんな感じだろ、だから一人に慣れてきたんだよな」
「なら夏休みの間は、俺がいるから寂しくないな」
「馬鹿な事言ってんじゃねぇよ！」
顔を真っ赤にしてるよ、ってか俺も変なこと言ってるし、でもチカが俺を頼りにしてくれるんなら、どんな恥ずかしい事でも言ってやる
「でも時々寂しいんだよな、アタシ一人置き去りにされた感じで」
「いつも3人だったんだろ？」
「そうだよ、だから最近更に孤独を感じる事があるんだよな」
「だから、俺がいるんだろ、夏休みが終わってもメールとか電話で相手してやるよ」
「そんな時がくればな」
コイツ、こんなに強がってるけど、内心ユキとマミ姉がいなくて寂しいはずだ、幼馴染みの三人組なのに、二人だけで先に行って一人だけ置き去り
「ユキとマミ姉は高校は、この島じゃないんだろ？」

「そうだよ」
いくら友達がいるって言っても、チカの事だから泣いたんだろうな、戻って来てもこれだ
「もう俺がいるから泣くなよ」
「泣かねぇよ！」
「どうせユキとマミ姉がいなくなった時、泣いたんだろ？」
「…うるせぇ」
「泣きたくなったら、俺を頼れ、なっ？」
「…分かったよ」
笑って頭を強く撫でた
「よろしい！」
あれ？何かチカがうつ向いちゃった
「ど、どうした」
覗き込むと、チカがうるんでた、ヤベェ俺何かしたか？
「おい、泣くなよ」
「嬉し泣きだよ！俺を頼れって言われたのは、兄貴だけだった、他人に言われたのは始めてだったんだ。だから、ありがとう」
嬉しかった、それにチカが自分が泣いてるのを隠さないでくれた、俺がチカに認められた気がした。
好きな人に認められるって、どんな形でも嬉しいよな

青への花火大会

「お～い、二人で楽しそうだなぁ」
ユキが物凄い量の花火を持って走ってきた、マミ姉は手ぶら、ついていった理由があからさまますぎて笑える
「多すぎじゃない」
「4人でやればあっという間だろぉ」
「マミ姉は全部ユキに持たしたんだ」
「そんな事しないよ」
そう言ってポケットからライターとロウソクを出した
「チカ、やっぱりマミ姉って悪魔だよな」
聞こえないように、チカの耳元で言った
「かなりな」
「二人で何話してるの？」
怖っ、悪魔な上に地獄耳、人は外見だけじゃないな
『いや、何でも無いです』
「なら良いんだけど」
「ほらほらぁ、日も暮れてきたから、早くやろうよぉ」
ユキが跳ね始めた、ユキはたまにガキっぽくなるんだよな、特にマミ姉と一緒にいるとき
「ほら、みんなでやろ。そうだ！カイ君の歓迎会も兼ねちゃおっか」
「マミ姉それ良い！カイ、良いよな？」
「俺なんかのタメに良いの？」
「良いに決まってるよぉ、だって俺等は親友だろぉ」
“親友”その言葉がすごく嬉しかった、マミ姉もユキも会って間もないけど、最高の友達だった
「親友か…。じゃあ、お願いします！」
「ユキ、用意だ」
「はいは～い、ほらみんなで準備準備ぃ」

「カイ君良かったね」
「うん、みんな俺のタメに…、感謝してるよ」
「ココにいるみんな、カイ君の事好きだからね、特にチカちゃんは」
「どういう意味？」「そのうち分かるよ」「カイ！マミ姉！始めるよ、早くこっち来て」
「チカちゃんが呼んでるから行こう」
さっきマミ姉が言った事、気になる、まぁ気にしてても始まらない、花火楽しむか、親友がせっかく用意してくれたんだから
「え～とぉ、カイがこの島に来てくれたお祝いの花火大会、カイのタメにみんなで楽しもぉ」
「ほらカイ、つっ立って無いで花火やるぞ」
「分かったからそんなにはしゃぐな、転ぶぞ…」
「痛っ！」
転んだ、思いっきり顔から砂浜に突っ込んでる、手を差し出した
「言わんこっちゃない、ほら立って花火するぞ」
「痛たた…、悪いありがとな」
「チカちゃん、カイ君がいて嬉しいからって、転ぶ事ないんじゃない」
「違うよ、変なこと言わないでよマミ姉」
「ほら、やるぞチカ」
俺はチカに花火を渡した
「うん」
個人的には花火は好きだ、一瞬に全てをかけて光を放つ、その儚い命から力強さを感じる
「綺麗だな、大きい花火も良いけど、小さいのも小さいなりの美しさがあるよな」
「何しんみりした事言ってんの、カイっぽく無いぞ」
「うるせぇ、たまにはこういう事言わせろ」
「あっ、消えた」
「俺も」

短いな、消えた時って、何か寂しい
「カイ、次はこれにしよ」
「閃光花火か」
「勝負だ、フリークライミングの時は負けたけど、これは負けないからな」
「もっと楽しもうよ」
「負けっぱなしは嫌だからな、勝負だ勝負」
「分かったよ」
「じゃあ、ヨ～イ…スタート！」
勝負って言っても、ジッとしてるだけだし
「なかなかやるな」
「別にまだ落ちないだろ」
「パチパチしてきた」
「俺も」
『……』
地味だ、地味すぎる、静かすぎる勝負だ
『…あっ』
「落ちた」
「俺も」
「これって引き分け？」
「だな」
「また勝てなかった」
「引き分けだから、進化したじゃん」
「勝たなきゃ意味がないだろ、引き分けは負けと同じだよ」
「あっそ、じゃあ次は頑張れよ、ここまできたらチカには負けないからな」
チカに負けないか、対抗意識燃やしてどうする、別に負けたところで何もないし
「カイ、ホントにありがとな」
「何が？」

「手伝ってくれて」
「良いよ別に、東京にいてもつまんないし」
「アタシ、カイが来てくれるって言った時嬉しかった」
「俺も」
「カイが助けてくれた時、不思議だった、無条件でカイを信じられた」
「俺もだよ、普通だったら、声掛けないのに、家に入れたなんてありえない事だよ」
「何か不思議だよな」
信じられるって言われた時は、嬉しかった
「チカを家に誘った時、自分の考えに反して喋ってるような気がした、でも心の声が喋ってたのかもな」
「心の声？」
「コイツは救え、って」
「かっこつけちゃって、でもアタシには心の声だろうが、本心だろうが嬉しかった」
ヤベッ、涙腺緩みそう、嬉し泣きしそう何て始めてかもな、チカは俺の心の真っ青な氷を真っ赤な炎で溶かしてくれたのかもな
「にしても、ユキとマミ姉は一目散に、二人きりになったよな」
「あの二人は切っても切れないよ」
「それで良いんだけどな、アタシもマミ姉がユキを見つけたように、素敵な人が欲しいな」
俺がその素敵な人になりたい、でも今はまだその時じゃないし、今この事を言ったら、帰れなくなる、それが怖かった。
でもいつか言いたい、チカが想ってなくても、
チカの事が好きだって

青の仕事《前編》

朝起きたら身体中が痛かった、フリークライミングをやってるから筋肉痛じゃない、この痛みは日焼けだ、確かめるタメに鏡の前に行った

「黒っ！」

比較的、インドア派の俺が一日中海にいたんだから焼けるよ

「うるせぇよ！朝っぱらから騒ぐ…。黒」

「いや、チカに言われたくないよ」

「早く飯食え、仕事の説明するから」

そういえば今日からか仕事、ってかこのタメに来たんだよな、頑張るか。

飯を食い終わって、暫く休んでると、ユキとマミ姉が同伴出勤してきた

「おはよぉ…。黒ぉ」

「チカと同じ反応ありがとう」

「カイ君真っ黒ね、白くて綺麗な肌だったのにね」

「案外凹んでるんだから、あんまり触れないで」

「今からでも日焼け止め塗れば何とかなるよ」

「ホントに、マミ姉？」

「うん」

日焼けなんて何年ぶりだろ、海にも行かなかったし、外にも出なかったから日焼けなんて無縁だったからな

「いつまでクヨクヨしてんだよ、ほら仕事の説明するからこっちこい」

チカとかユキは黒いから良いよな。

「あ～あ、俺ほとんどみんなと会えないじゃん」

「そんな気にするな、忙しいからそんな事気にする暇も無いから」

これから部屋の片付けやら用意だけは一緒だけど、後はずっと厨房、料理の補助だけだけどきつそうな内容だ。
部屋の準備は二人一組で、俺はマミ姉とペアになった
「マミ姉は前にもやった事あるの？」
「あるよ、いつもは私とチカちゃんの二人と、ユキ君一人だったんだけど、カイ君がいるから早く終りそう」
「ふ～ん、変なお客さんとかもいたでしょ？」
「セクハラみたいな事はたまにされるよ」
「子供なのに？」
「うん」
「…ムカツク」
「何でカイ君が怒るの？」
「だって人間としてありえないだろ」
「そうだけど、大体ユキ君がお客さんに怒鳴って、その後でチカちゃんのおじさんにゲンコツ貰ってるよ」
「ユキも怒るんだ」
「怒るよ、しかも凄い怖いよ」
こんな話をしながら仕事してたら、いつの間にか終わってた
「こっちは終りました」
「ありがとね、シシキ君が来てくれて助かるわ」
チカの親は娘とは違って、普通だった、ってか家中あれだった疲れるよな
「カイとマミ姉、早いね」
「ユキ君とかは、遅かったね」「どうせチカがユキを蹴ったりして、仕事が進まなかったんだろ」
「流石カイ、よく分かってるぅ、遅いとか言ってすぐ蹴るんだよぉ」
「ユキが遅いからいけないんだろうが！」
また蹴りを入れてる
「痛ぁ！こんなだから進まないんだよぉ」
「じゃあみんな、もうそろそろお客さん来るから、私とチカは迎え

に、キキシタ君とアララギさんは出迎え準備、シシキ君は食事の準備をお願い」
かったる、でもこれを乗り越えれば後はサーフィン漬け、二日間頑張るか
「そういえば、何の団体なの？」
「塾の旅行か何かだってぇ、よくこんな所にわざわざ来るよなぁ」
「ホントだよな。あっ、ゴメン俺、やらなきゃいけない事があるから」
「頑張ってね、カイ君」
「頑張れぇ」
呑気だな、ってか何で俺だけこんなハードなんだよ、初心者だぞ。

疲れたぁ、厨房は軽い戦争だった、あれやれ、あれ取れ、あれはまだか、もう無理
「カイ、お疲れぇ」
外で涼んでたら、ユキがジュースをくれた、そういえば飲まず食わずだったな
「ありがとう」
「何か始めからあれは、キツかったでしょ？」
「かなりね。ユキは女の子に取り囲まれてたよな？」
「ああいうの慣れないんだよなぁ」
「それなら厨房の方が良いかもな」
「確かにぃ、マミも同じようなもんだよぉ、男からのお誘いがひっきりなしに…」
「ヤキモチ？」
「別にぃ」
ユキも分かりやすいな、でもマミ姉もユキの事知ってるんだよな、ユキも可哀想に
「あっ、ユキさ～ん！」
前から女の子の集団が、やりづらいな

「じゃあユキ、後は楽しんどけ」
「えっ？カイはぁ？」
「逃走！」
そう言って逃げようとした時だった、聞いたことある声が俺を呼んだ
「シシキ君？」
「誰？」
「私、渡辺」
え～と、たしかこっちに来る前に俺にコクって来た奴か
「渡辺か…、ってはぁ！？何でココにいるの！？」
「カイ、誰この人ぉ？」
「ユキゴメン、めんどくさいから後で話す、今はその取り巻きを相手してろよ」
「いや、助けてよぉ」
俺は渡辺を連れてその場を離れた、当然ユキにその他大勢を任して
「シシキ君久しぶり」
「久しぶり」
「何か楽しそうだね」
「まぁね」
「いつ帰って来るの？」
コイツがいるなら一生帰りたくない
「四日くらいしたら」
もう少しいるけど
「寂しいな」
「あっそう」
「私、シシキ君に会えてすごく嬉しかった」
俺はすごくムカツイた
「そう」
「シシキ君はここで何してるの？」
コイツ、ホントにムカツク、ほっといてくれよ、ユキを置いてきて失敗した

「手伝い」
「そうなんだ、頑張って」
言われるまでもない、ってかコイツに言われると頑張る気を無くすよ
「カイ！何してんだよ？」
救世主！？じゃなくてチカか、でもこの状況ヤバいよな
「カイ、誰それ？」
ほら来た、どう説明すりゃ良いんだよ
「シシキ君の友達です」
「あっそ。カイもう帰るぞ、ユキとマミ姉も待ってるから」
「そうするか、ゴメン、もう帰るから」
「ちょっと待って」
やっぱりな、この女が何も説明しないで納得するわけないよな
「この女の子は誰？」
ほらきた、俺から言わせれば、お前は何様だって話だよ
「親友」
「…そう、バイバイ」
帰ってからチカとユキに渡辺の事を説明した
「カイは良いのか？あんなに綺麗な人」
「うん」
「カイもあんな可愛い子を惚れさせるなんてやるなぁ」
マミ姉がユキの事を睨んでる、またあの目だ
「自分が可愛いって思ってる奴に、まともな奴はいないよ」
「何かアタシには分からないけど、カイがそれで良いなら否定はしないよ」
チカにだけはアイツに会わしたくなかったけど、しょうがないな
「チカ大丈夫だよ、アイツとは何もないから」
「な、何でアタシに言うんだよ？」
「何となく」
チカだけには、変に思われたくなかった、だってどんな女でも、障害になりうるだろ

青の仕事《後編》

憂鬱再来、アイツがいると俺が憂鬱になる、俺を怒らせる事ばっか
言いやがる、でも女に怒れないのが俺のイタイところ
「カイ、何怒ってんの？」
「いろいろと」
「昨日の人？」
「まぁね」
アイツの事をぶり返さないでくれ、考えるだけで欝モード突入
「シシキ君、今日は接客の方をやってくれない？」
おの地獄から抜け出せるのは良いんだけど、アイツらを相手するの
も地獄だよ
「いや、でも厨房が忙しいんじゃ…」
「私が行くから大丈夫、やっぱりシシキ君には可哀想だから」
良かれと思って言ってくれたんだと思うんだけど、やっぱり辛い
「良かったなカイ、キツイって言ってたもんな」
「じゃ、じゃあお言葉に甘えて、接客の方を…」
おばさんの笑みを見たら断れないって、第二次地獄戦争勃発。
接客の仕事は主に、料理を出すのがほとんど、でも終わってからが
俺的にはこっちの方がキツイ
「シシキ君って言うんだ、カッコイイからモテるでしょ？」
「シシキ君は里花が狙ってるんだよ」
里花は渡辺の事だ
「でも、フラレたんでしょ、なら大丈夫だ」
この女二人の暴走を止めてくれよ、お前らに惚れるほど女に飢えて
ないから
「ねぇねぇ、今お仕事ないんでしょ」
「一応」
休憩中だからサーフィンしようと思ったのに、ゴキブリホ●ホイに

捕まったゴキブリって、こんなに絶望感に満ちてるのかな
「なら遊べるよね？」
「いや、でも…」
「ほら、遊ぼう」
終わった…、と思ったその時！向こうから色黒の髪白のデカイ男が、ユキだ、救世主！
「ユキ…」
叫んだ俺の声がフェード・アウトしてく、後ろには女の群れが
「カイ～」
ユキが目で訴えてくる
「助けてくれぇ」
って、でも俺も助けて欲しいんだよ、万策尽きるとはこの事だな
「シシキ君行こ行こ！」
「いや、ちょっと…」
無理矢理腕を引っ張られて連れてかれた、チカとかどこ行ったのかな、いれば違うのに
「シシキ君は好きな人とかいるの？」
好きな人、俺の好きな人か…
「そんな事聞いちゃダメだよ。もしかして彼女とかいたりするの？」
「別に…」
「なら私でもチャンスあるんだよね？」
早くココから抜け出したい、辛い、苦しい、こんなにチカが恋しくなったのは始めてかも
「ねぇ、アドレス教えてよ」
何かさっきから流されるままに相手が話を進めてるな。
ってか歩きながら話してたから、かなり歩いたな、向こうに何か変な群れがいる
「マミちゃんはどんな男がタイプなの？」
男の太い声、ってかマミちゃん？マミ…、マミ姉か！最高の救世主！
「マミ姉！」

「あらカイ君。じゃあ皆さん、バイバイ」
マミ姉が俺の腕を掴んで、周りに聞こえないように
「合わせて」
「じゃあ、行くか」
マミとその場を立ち去った、心強いよマミ姉、後ろから女の子の
「何あれ？」
っていう声や、男の
「何だよあれ？」
みたいなのが聞こえたけど、無視して民宿の方に歩いて行った
「みんな、こんな感じなのかな？」
「ユキはもっと酷かったよ」
「あらそう…」
ヤベッ、口が滑った、これはあんまり言わない方が良かったよな
「チカは？」
「分からない、チカちゃんだけいつも見当たらないのよね」
どこ行ったんだろ
「おい！ヤメロ！ふざけるな！この馬鹿が！」
女の子の叫び声だ、この口の悪さはもしかして
「チカ！？」
「カイ！助けて！」
声がする方に走ってくと、チカが男に襲われてた。
俺はその男の肩を掴んでこっちに向けた
「なにしてんだよ」
「あぁ！？うるせえな！どっか行けよ！」
うるせぇな、優しく言ってんだから
「お前がどっか行けよ」
「ぶさけるな！」
あ～あ、殴りかかってきた、馬鹿だな、俺に喧嘩売るなんて
「あぁ！うるせぇ！」
思いっきり顔面殴ったら、吹っ飛んだ

「弱っ」
相手はそのまま顔を押さえて走って行った
「大丈夫か？チカ」
「あ、ありがとう…」
泣いてるよ、そんなに怖かったのか、ってかあのクソは旅行先で何してやがる
「何であんな事に？」
「あの人が島を案内してくれ、って言ったから案内してたら」
「馬鹿じゃないの！そんな男に着いて行くなよ！」
「でも…」
「でも、じゃない。何でマミ姉といいチカといい、危機感がないんだよ」
『ごめんなさい』
二人に謝られるとな、しょうがない
「まぁ、何も無かったんだから良かった」
思いっきり笑って、無理にその場の空気を変えるしかないだろ
「怖かった。カイ、ホントにありがとう」
チカが思いっきり泣いてる、何で俺がいる時にこんな事が
「もう泣くな」
チカの頭にそっと手を置いて、顔を近付けて笑った
「カイ君、私先に帰るよ、ユキ君の事も気になるし」
マミ姉には居心地が悪い空気だっただろうな、でもユキはこの後悪魔を見る事になるんだろうな
「チカもう泣き止んでくれよ、帰ったらずっと一緒にいてやるから」
その瞬間チカが俺の胸に飛び込んできた、転びそうになったけど、何とか受け止めた
「お、おい、チカ」
「ゴメン、少し胸貸して」
えっ？ちょっと良いムード？でもその瞬間ワッと泣き出した、俺が知ってる中では過去最高の泣き方だった。

俺はそっとチカ頭に手をあてた、その時俺は決めた

何があってもチカを守りたい、何処にいてもチカを守りたい

赤の大きさ

朝が清々しい、昨日はいろいろあったな、チカを襲った奴は俺に会うと目をあわさないで行ったな、チカは俺からずっと離れなかった（かなりおいしかったけど）。
そんで今日からは、サーフィンライフ！天国の日々、昨日のウップンを発散
「おはよう、チカ、もう大丈夫なの？」
「そんな引きずるほど弱くないから」
「なら良かった」
チカは思ったより元気そうだった、安心したけど、昨日の落ち込み方から考えると、少し疑問が残る
「今日から俺は海に行くけど、チカはどうするの？」
「行くに決まってんだろ」
「じゃあ飯食ったら行くか」
「おう」
これから暫くの間はこの生活が続くんだ、でも俺はチカやユキ、マミ姉がいない生活に耐えられるのか？
「どうしたカイ？」
食べ終った後の食器が片付けられてた
「いや、別に」
「じゃあ着替えたら降りてこいよ」
「分かった」
俺は着替えて降りて行った
「じゃあ行くか」
ジョニーの所でボードをとって、海に向かった、海ではユキとマミが話してた
「おはよ」
「おっ、カイとチカかぁ、おはよぉ」

「朝からベタベタしてんじゃねぇよ！」
あっ、蹴った、何か恒例になってるな、この後は
「痛ぁ」
このくだりはよく見るな
「チカちゃん、ユキ君が可哀想じゃない」
「そうだよぉ、俺が可哀想だよぉ」
「馬鹿ユキが！」
また蹴ろうとしたけど、俺が一応止めておいた
「もう蹴るな」
「う～～」
いじけてるよ、そんなにユキをイジルのが生き甲斐なのかな
「カイ、チカがいじめるから海にでよぉ」
「理由はともかく、海に出るか」
俺とユキは海にでた、チカはというとマミ姉と話してた
「ユキ、昨日どうだった？」
「どうだったってぇ？」
「マミ姉と」
ユキがガタガタと震え始めた、そんなにヤバかったのかな
「カイ、その話は触れないでぇ」
気になる、俺の中に眠る野次馬の血が騒ぐ
「ちょっとだけでも」
「ショック死するかと思ったぁ」
聞いた自分を悔いた、多分いつも見てる悪魔じゃなくて、魔王が出てきたんだと思う
「辛かったな、ユキ」
「ありがとぉ、頑張るよぉ」
その後はずっとサーフィンをしてた、チカも少ししてから来た、その日は一日中しつづけた。
「カイとかは明日も来るよなぁ？」

「行くよ」
「じゃあ、また明日ぁ」
「じゃあね」
ユキとマミ姉は一緒に帰って行った、俺はチカと一緒に少しの間海にいた
「あとどんくらいこの島にいるの？」
「一週間くらいかな」
「一週間後には帰るんだよな？」
「そうだよ」
「そっか…」
やっぱりこの話をすると悲しい
「俺がいなくなるからって、泣くなよ」
「泣くかも」
えっ？何か嬉しいけど複雑だな、俺のタメに泣いてくれるのは嬉しいけど、俺のせいで泣かれるのは困る
「嘘だよ、泣くわけないだろ！」
「泣かないように頑張れよ」
「泣かないって言ってるだろ！」
「何だよ、泣いてるチカは可愛いのに」
「なっ！？」
顔を真っ赤にして、そういう所が可愛いんだよな、って俺何でこんなキモイ事言ってんの
「そうだ、久々に夕日見に行こうよ」
「分かった」
まだ気にしてるのかな、チカって案外こういうのに弱いんだ、今度から使っていくか。
着いたころには空が赤みがかってた、いつ見てもいいな
「綺麗だな」
「いつも同じ事言ってるよな」

「それしか言えないんだもん」
「でも、やっぱり綺麗」
海にレッドカーペットができて、俺らの方まで伸びてる
「何な夕日に歓迎されてるみたい」
「この島でカイを歓迎しないのはいないよ」
「嬉しい事言ってくれるじゃん」
こんな俺なのにチカとかは、すんなり受け入れてくれた
「俺、みんなに感謝してる」
「何で？」
「友達のありがたみ、それを教えてくれたから」
「アタシも感謝してる」
「何で？」
感謝してる、その言葉が嬉しかった
「アタシ、いつも一人で泣いてたんだ」
「今でも泣いてるじゃん」
「違うよ、カイが来てから、ずっとカイの前で泣いてる、何か文字通りカイは私を包んでくれる海みたい」
人に頼られてる、始めてかも、そう思う事も思える事も
「じゃあチカは海の氷を溶かしてくれる、太陽だな」
「大袈裟だな」
「チカもな」
チカに会ってから素直になったし、笑うようになった、チカのお陰で毎日が楽しくなった
俺、気付くとチカの事ばっか考えてる、多分チカの事、大好きだからかな……

青のターニングポイント

あれから毎日サーフィンをしたり、チカ達と無駄話したりしながら過した。
あの手紙が来るまで、俺は人生最大の大事件に気付く余地もなかった
「カイ、何かカイ宛に封筒来てるぞ」
「俺に？」
「あぁ」
いつも通りにサーフィンして、いつも通りに話して、いつも通りに笑った一日の夜だった
「何だろ？」
「知らない、開けてみろよ」
封筒は割と重みがあった、開けると俺は愕然とした
「おい、どうしたんだよ？」
「こ、これ…」
中には通帳が入ってた
「通帳？」
「あぁ、何で通帳なんかが」
中には手紙も入ってた、この手紙が俺の人生を大きく狂わせるとは知らずに

‘カイへ
突然ごめんなさい、人として間違ってるのは分かります、でももう貴方を育てていく自信がありません、これからはお父さんと二人で暮らしていきます。
通帳は貴方のお金です、これで生活してください。

本当にごめんなさい

母より，

おい、嘘だろ？ありえないだろ、俺、親に捨てられたのかよ。
あまりの絶望感で俺はその場に崩れた
「カイ！どうしたの！？」
俺は無言でチカ手紙を渡した、チカは無言で手紙を読んでる、だんだんと顔が険しくなってきた
「な、何これ？」
「捨てられた」
「嘘、ホントに？」
「あぁ」
「電話は？」
「チカ、ナイス！」
俺に一筋の光が見えた、電話が繋がれば何とかなるかもしれない
“この電話番号は現在…”
携帯は繋がらない、でもまだ家の電話が
“この電話番号は現在…”
嘘だろ、家も繋がらない、しょうがない最後の砦だ、電話したくないけど
“はい、もしもし”
「井上か？俺の家どうなってる？」
井上の家は俺の家の隣だ、世間一般では俺達の関係を幼馴染みって言うのかもな、小さいころから何となく嫌いだったけど
“おう、カイか！久しぶり。お前の家って、引越したんじゃないの？”
「引越した？」
“あぁ、だって無いよ”
「分かった」
その時完璧に理解した、俺は完全に親に捨てられた、俺に帰る場所が無くなった

「どうだった？」
「家が…、無い」
「えっ？家が無いって、ホントかよ…」
親が死ぬのは納得できる、でも俺に捨てられるのは納得できないし、理解できない
「カイ、大丈夫か？」
虚ろだったと思う、目が死んでたし、目の前は真っ白だった。
俺の抑えてたものが、一気に溢れ出した、悲しいとかじゃない、絶望の涙だ
「カイ…」
その瞬間目の前が真っ暗になった、チカの胸に抱かれてた
「アタシはカイの胸で泣かしてもらった、だから今度はアタシが胸で泣かしてあげる」
「…ありがとう」
暫くの間泣き続けた、子供の頃から滅多に泣かなかったのに、こんなに泣いたのは始めてだった

やっと泣き止んでチカから離れた
「もう大丈夫か？」
「ありがとな、チカのお陰で楽になった」
泣いた事で全部を出せた気がした、頭の整理がついて冷静になれた。
手紙が気になって通帳があるのに気づいた、その通帳を見てビックリした
「えっ、うっ、えぁ？」
言葉にならない言葉が出てきた
「どうした？」
「金が…、いっぱい」
「はっ？」
「１０００万も…」
「嘘だろ！？数え間違いじゃないのかよ？」

１０００万が入ってた、俺が一歳の時から毎月５万づつ、それと俺がココに来たのと同時に金を入れたらしく、調度１０００万、最初のは積立てだろう、でも後の大きいのは恐らく捨てるタメの金だろう
「どうするんだよ？これから」
「分かんない、一晩考えてみる」
「分かった、おやすみ」
「おやすみ」
今後の事を考えたけど、何も思い浮かばなかった、この日はいろいろ疲れてすぐに寝た

白はお兄ちゃん

昨日はすぐに眠ってた、頭の中がごちゃごちゃして疲れてたんだと思う。
昨日はチカに心配かけたから、今日は楽にさしてやるか
「おはよ」
「おう、カイ。大丈夫か？」
チカにはもう心配をかけたく無かったから、笑顔を作った
「余裕余裕！引きずらない男だから」
「ホントに？」
「ホントだ」
内心まだ少しきつかったりする、でもチカの前では強がっていたかった
「シシキ君、暫くはうちにいていいからね」
「じゃあ、お言葉に甘えて」
早く次の事を考えないと、自分に整理がつかない
「カイ、今日はどうするつもりなんだよ？」
「一応ユキとマミ姉にも話そうと思ってる」
「そっか」
あの二人に話さなきゃいけない感じがした、話す事で俺が一歩進めるような気がした。

海に行った時、俺とチカはボードを持っていなかった
「あら、二人ともボードは？」
「今日は必要ないから」
「何で？」
「話があるんだ」
そういって海に出てるユキを呼んだ
「あれぇ、二人ともボードはぁ？」

「あのさぁ、話があるんだ」
そういって俺は昨日の手紙の事、通帳の事を全部話した
「それで、カイはどうするのぉ？」
「そうよ、今は家も何もないんでしょ？」
「あるのは１０００万だけ」
「そんな金どうやって集めたんだろぉ？」
この事を言わなきゃな、極力自分の家の事は言いたくなかったんだけど
「親が社長やってるから」
『社長！？』
皆がビックリすると、こっちまでビックリする
「聞いてないぞ、何でアタシに言ってくれなかったんだよ？」
「言いたく無かった」
俺は親父の事がこの世で一番嫌いだった
「何で？」
「アイツ俺の事を同居人としか見てないんだよ」
「じゃあ何で金なんか？」
「手切れ金のつもりだろ」
親父は金で何でも解決しようとする奴だった、俺が喧嘩して相手の骨を折った時も、学校のパソコンにウイルス入れた時も、全部札束出して無言で帰ってきた、そんな親父が嫌いだった
「何の会社か聞いても良い？」
「今流行りのＩＴだって、だから１０００万くらい端金なんだろ」
「スゲェ…」
子供も金で切ると思うと、ムカツク
「あのさぁ、俺んちに居候しない？」
「へっ？」
「だからぁ、うちで暮らさない？」
「良いのか？」
「当然！」

嬉しかった、あの最悪な家族とも縁が切れて、この島に残れるこんなに良いことはないだろ
「マジで！？ユキんちが良いなら喜んで！」
「じゃあ、今から話つけるかぁ」
「良かったな、カイ」
「でも、帰らなくていいの？」
「良いの、良いの。この島にいた方が１００倍楽しいから」
俺は新しい人生に希望が生まれた、チカとも毎日会える、ユキと毎日サーフィンできる、マミ姉と毎日話せる、それだけで何もいらない。
チカやマミ姉と別れて、俺はユキの家に行った、居候願を出しに、でも、ユキの独断であって、ユキの家の親が頑固だったらどうしよう。
「ユキの親って、どんな？」
「会った事あると思うよぉ」
「いや、そんなハズは無いと思う」
「まぁ、会えば分かる」

ボチボチ歩いたころだった
「ココが俺の家ぇ」
そこはサーフボードがいっぱい立掛けてあった。
ユキは玄関に行った
「おとぉ！おかぁ！話があるんだけどぉ」
もしかして、ココって…、まさかなぁ、でも俺のボードとチカのボードもあるし…
「何だよ！うるせぇな！」
この声まさか…。
中から金髪のおじさんが出てきた
「ジョニー！？」
「おう！カイじゃねぇか！」

もしかして、もしかすると
「ユキのお父さんって、ジョニー？」
「そうだよぉ」
どうりでユキがサーフィン上手い訳だ、血統書付きとはこの事だ
「おとぉ、話があるからおかぁ呼んできてぇ」
「おう！」
ユキに案内されるまま、家に入った、極一般てきなリビングに通された
「ユキ！呼んできたぞ！話って何だ！？」
「実はぁ…」

これまでの事を全部話した、通帳の事、手紙の事、親の事、居候願の事
「カイはそれで良いのか？」
「はい」
「おかぁちゃんはどう思う？」
今までずっと黙ってたユキのお母さんにふった、お母さんは目が怖い、それ以外は普通なんだけど、とりあえず目が怖い
「私は良いわよ、人手が増えて有り難いし」
声低っ！ドスが聞いてて威圧感がある
「ユキは良いのか？」
「俺は良いよぉ」
ジョニーが暫く腕を組んで険しい顔をしてる、もしかして…、と思ったその時、いつもの顔に戻って
「おかぁちゃんがＯＫ出したら誰も逆らえねぇ！カイ！居候と思うな！今日からカイ儂らの家族だ！」
「あ、ありがとうございます！」
嬉しかった、ユキの暖かさの源も何となく分かったし
「もっと楽にしろ！儂らは家族だぞ！」
「じゃあ、俺はカイのお兄ちゃんかぁ、これからは“お兄ちゃん”

って呼べよぉ」
「それは断固拒否」
「えぇ～」
案外落ち込んでた、そんなに弟が欲しかったのかな
「じゃあ、これからはカイも、おとぉ・おかぁって呼ぶのかぁ」
「そうだな！その呼び方以外しっくり来ないしな！」
少し戸惑ってた、急にそこまで
「分かったな！？」
「分かったよ、お、おとぉ」
「それでいい！」

その後チカとマミ姉に報告しに行った、二人とも喜んでくれてたみたいだった。
これから新しい生活か、楽しみだな。

これでチカとの別れの涙を流さずにすんだ

青の新生活

今日は何時になく早起きをした、今日は樹々下家一日目という事で、朝飯ビックリ作戦実行中、俺を受け入れてくれた感謝の意味を込めて、朝飯作ってる、って言ってもいつも通りの朝飯だけど

「おはよぉ、おか…、じゃなくてカイ？」

最初に起きて来たのユキだった

「おはよ」

「何でカイが？」

「良いじゃん別に」

何か恥ずかしくて

「感謝してます」

とは言えないよな。

その後、おとぉとおかぁが起きてきた、ってかこの呼び方慣れないな

「カイじゃねぇか！朝飯作るとは気が利くな！」

朝からこのボリュームはキツイな、頭がガンガンする

「これからはカイに3食頼もうかしら」

「いや、たまにで…」

「たまにでも有り難い」

朝から威圧感があるな

「早く食べようよぉ」

「じゃあ食うか！」

「おいしいじゃない」

『早！』

おかぁはマイペース過ぎる、すぐにみんな食べ始めた

「うめぇじゃねぇか！」

「料理上手だなぁ」

「料理は慣れてるから」

料理を誉められて嬉しかった、コックさんになろうかな

「美味し過ぎて悔しいわね」
目がまた怖い、あれは獲物を狙う目だ
「ごちそうさまぁ！」
「ユキ早！」
あっという間に食べ終ってる、その後ユキが食器が洗いだした
「偉いなユキ」
「うちじゃ当たり前だよぉ」
「おかぁちゃんが怖いからな！」
おかぁがおとぉを睨んでる、おとぉが小さく見える、この家の男は尻に敷かれるタイプらしい（今日の教訓）

俺も食べ終って部屋に行った、ユキの部屋にいさしてもらってるんだけど
「カイ、ホントに料理上手いなぁ」
「いつでも作ってやるよ」
「マジでぇ！？あれがいつでも食えるなら最高だよぉ」
「かなり過大評価されてるな」
いつもこれしか食ってないから分からないけど、俺って案外才能あったりして
「ユキ！カイ！」
この声は…、下を見るとチカとマミ姉がいた、相変わらず非常識な奴
「うるさい」
「いいから早く海に行くぞ！」
何か今日はテンション高いな
「用意して行くかぁ」
「ゴメン、少し待ってて」
チカとマミ姉を待たして、着替えた、こうやってユキと暮らしてるとホントに兄弟みたいだな……、いや、兄弟なんだよな
「お待たせ」

「この調子だと、ユキんちに居候させて貰ってるんだな」
チカの安堵の表情を見ると、俺まで安心する
「居候じゃないよ」
「カイはもう家族だよぉ」
「ジョニーらしいな」
「そうそれだよ！何でみんな黙ってたんだよ？」
みんながクスクス笑ってる、何でだろ
『何となく』
全員でハモらなくてもいいじゃん、しかも自信満々で
「もういいや、海に行こ」
俺は一人で海に行こうとしたけど、チカが後ろから走ってきた
「逃げるなよ」
「逃げてないし、テンション高くない？」
「グフフフ……」
変な笑いかたしてるし、何がそんなにおかしいのか
「キモイ」
「うるさい」
“ボフッ！”
痛っ、チカ裏拳が腹に入った、久々に食らうと更に痛い
「痛いし」
「カイが変な事言うからだろ」
「で、何でテンション高いの？」
朝飯が出てきそう、チカは格闘の道で生きた方が良いんじゃないの
「だってこれからずっと、カイとサーフィン出来ると思うと、嬉しいだろ」
サーフィンか、俺は会えるだけで嬉しい、何て普通に言えたら良いんだけどな
「じゃあ、サーフィン漬けになるか！」
「おう！」
こうやって俺の新生活が始まった、焼けないように頑張ろ

黒は人魚

今日も昨日と同じように海に行った、朝飯は作ってないけど、チカとユキは先に海に出ていった、俺は何となく砂浜に残った
「そういえば、何でマミ姉はサーフィンしないの？」
「ボディーボードやってるからね」
なにそれ？未知の乗り物？
「ボディーボードって？」
「説明するのもめんどくさいから、これから取りに行く？」
「取りに行くって？」
「今修理に出してるの」
「…気になるから行くよ」ボディーボードなるものも気になるし、気になったままじゃサーフィンできない。

マミ姉と一緒に向かう途中気づいた事だけど、樹々下家に行くのと同じだ
「ここだよ」
やっぱり、これ樹々下家だよ
「ボディーボードって、波乗り？」
「そうだよ」
俺はおとぉを呼んだ
「おう！マミちゃんじゃねぇか！ボード取りに来たのか！？」
「うん」
「じゃあちょっと待ってろ！」
ようやくボディーボードを見れる、想像すら出来ない
「マミちゃんの言ってた所も直したぞ！それにマミちゃんのやり方ならこのフィン使ってみな！」
「ありがとう」
ボディーボードって小さい、それにフィンなるものもヒレみたい

「こんなのでどうやって乗るの？」
「乗るんじゃないよ、うつ伏せでやるんだよ」
ヤベェ、理解の範囲を大幅に超えた、俺の頭じゃ無理
「分かんね」
「なら見せてあげるよ。ジョニー、家借りるよ」
「おう！」マミ姉は家に入って行った、多分着替えるんだろ、マミ姉の水着か…、って今はボディーボード！
「マミちゃんのボディーボードはスゲェぞ！あれは天才だよ！」
「そんなにすごいの？」
「おう！見て腰抜かすんじゃねぇぞ！」
マミ姉が家から出てきた、水着！？ってシャツ来てるし
「行こうか。ジョニー、ありがとう」
「頑張ってこい！」
マミ姉が髪の毛結んでるのも始めてみた、案外これはこれで良いんじゃない。

海に着くとユキがいじけてた
「どうしたユキ？」
「何で俺を連れて行ってくれないんだよぉ」
「熱中してたから邪魔しちゃ悪いかなと…」
「ふ～ん、まぁいいやぁ。マミは今日はやるの？」
「うん」
話をしてるとチカが海からあがってきた、一直線にユキの方に来て……、蹴った
「何いじけてんだよ！？」
「痛ぁ」
好きだなコイツらも、そんな事してるうちにマミ姉は一人で海に出て行っちゃった
「マミ姉がやるよ」
「久しぶりだなぁ」

海に出て波待ちするまでは一緒だ
「始まるぞぉ」
スタートはパドリングじゃなくて、フィンでばた足、波に乗った瞬間立つのかと思ったらそのままだった
「失敗？」
「そんなわけ無いだろ、よく見てろよ」
乗った瞬間、足を上げて横やら縦やらに回り始めた。
人魚を見てるみたいだった、波と戯れる人魚を、フィンが尾びれ見たいで綺麗だった
「スゲェ…」
「マミのボディーボードは波乗りの域を超えてるよなぁ」
サーフィンは波に乗る感じだけど、ボディーボードは波と戯れるだな、それぐらい似て否なるものだった
「マミ姉って日本でもトップクラスでしょ？」
「大会に出たことないから分からない」
「何で出ないの？」
「人と比べるのが嫌なんだって」
「出れば確実に優勝出来るのになぁ」
ナンバーワンよりオンリーワンか…、俺の一番嫌いな言葉だ
「マミ姉はこうも言ってたよ“私が出たら、みんなが優勝出来なくなっちゃうでしょ”って」
前言撤回、マミ姉は多分勝てる試合はしない、つまらない事はしないタイプなんだ。
にしても現在ナンバーワンの人も可哀想だな、マミ姉が出てたら二番目って事だもんな、マミ姉から一番目を譲りうけてるんだ
「久しぶりだから全然ダメだった」
マミ姉ってかなりの自信家なんだな
「マミ姉、俺スゲェ感動した」
「これくらいで感動してもらったら困るよ、もっとすごいんだから」
マミ姉が強がり言うとは思えない、だから多分まだ本調子じゃない

んだろう。

波と戯れる人魚の悪魔か…

青と赤の秘密

いつも通りに起きて、いつも通りにサーフィンをした、一つ違うところは、マミ姉のボディーボードが加わった事だ、楽しい時間はあっという間に過ぎるとは言うけど、ホントにあっという間だった。みんなでうちにボードを置いた、俺とチカは久しぶりに夕日を見に行った

「じゃあねユキ、マミ姉」

ユキとマミ姉と別れていつもの所に行った

「まだ時間があるな」

「これからカイとこうして、いつでも夕日が見れるんだよな」

「そうだよ」

チカと夕日を見ると、ちょっとずつ心の氷が溶けてくるような気がする

「カイが来てから、アタシ素直になれた気がする」

「俺も、他人との触れ合いが好きになった」

「アタシ達、会って変われたのかな？」

「少なくとも俺は変われた」

夕日が沈んで行くのを二人で静かに眺めてた、今日の夕日はいつもと違う気がした。

俺とチカは海沿いの堤防の陸側を歩いて帰った、灯が十数mに一つの割合であるから暗い、東京だったら１００％痴漢がでるくらいの暗さだった。

でもこの島で暗い場所は、星が綺麗に見える場所、今も見上げると星に押し潰されそうなくらいの星空だった

「スゲェ星空」

「そうかぁ？普通だろ」

慣れって怖いな、でも毎日これだったら、普通だな
「東京はこの一割も無いよ」
「何で！？」
そんなに驚く事か？しかも一歩退いて
「明るいから、光が届かないんだよ」
「そうなんだ、じゃあこの星空は大事にしないとな」
「良いこと言うじゃん」
そう言ってチカの頭にそっと手を置いた。
チカは頭に手を置くとキュッと縮まって顔を真っ赤にするんだよな、
今は暗くて分からないけど、顔は真っ赤だろ
「早く帰ろ」
「…うん」
チカと空を見ながら帰ろうと歩いていた時、堤防の上に人がいた、
暗いからよく把握できない
「誰かいるよな？」
「マミ姉とユキだ…」
「何でわかるの？」
「嘘だろ？二人で寄り添ってる」
普通にスルーされた…、って寄り添ってる？何で？
「う、むぅ！ん！」
驚いて叫びそうになった時、チカに口を手で塞がれた
「ぷはっ！何すんだよ？」
「うるさい、何か二人がおかしい」
「おかし…、っておい！」
チカ走って近づいて行った、何だよ急に、何も説明しないで一人で
行くなよ、しょうがないからついていった
「どうしたんだよ？」
「黙れ。見てみろ」
俺はユキとマミ姉を見て自分の目を疑った、ユキの唇とマミ姉の唇
が重なってた、キスをしてた

“ザザッ！”
振り返るとチカが走っていた、俺はユキ達に背を向けてチカを追った。
暫く走ったあと、チカは止まった、そこは周りが木に囲まれた道の真ん中だった
「はぁはぁ…、何で逃げるんだよ？」
「カイ、マミ姉とユキは何してた？」
チカは涙声だった
「それは…、キスしてた」
「アタシ、マミ姉達がそういう関係だったなんて知らなかった」
「言いづらかったんじゃないの？」
「何で！？何でアタシには言えないの！？」
振り向いたチカは泣いてた
「関係を壊したくなかったんじゃない」
「だから何で！？」
チカは気が動転してた、俺はチカの両肩に手を乗っけた
「分かってやれよ」
「分からない！」
怒って後ろを向いてしまった、俺はチカを後ろから抱いた
「別に良いじゃん、俺らも同じことすれば、±0だろ」
「えっ？」
振り向いたところに、キスをした、ってか俺何してるんだよ、確かに嬉しいけど、チカは迷惑だろ
「なっ」
「…ばか」
チカの顔が暗がりでも分かるくらいに、真っ赤になった
「ユキとマミ姉に秘密な」
「い、言えねぇよ！」
「ユキとマミ姉もこういう感じだったんだろ」
「そっかぁ…」

これで治まれば良いけど…、それにしても俺もやるようになったな、急にキスするとは…

「でも、まだ納得いかない」

「何で？」

「だって不意打ちだろ」

そう言ってチカは目を瞑って顔を近づけきた、唇に柔らかいものがあたった、俺も目を瞑った

「俺、チカの事、好きかも」

「アタシはカイの事大好き！」

チカが思いっきり飛び付いてきた、チカってこんなに積極的なんだ。

俺はこの時、チカを何があっても守り抜く決心がついた

白と黒の直感

今は家にいる、チカを送って帰ってきた、何で俺はキスをしちゃったんだろ、しかも好きだとも言っちゃったし、後悔はしてない、でも告白とかデートとか手を繋ぐとか、いろいろステップ飛ばしてるよな、でも…、恋愛成就！

「何にやついてるのぉ？」

「な、何でもないよ」

ユキは疑いの目で俺を見てた、俺は苦笑いをしてユキを見た。

そういえば、ユキもキスした後なんだよな、よく普通でいられるな、しょうがない少し探ってみるか

「チカには隠し事しないでくれよ」

「俺とマミのこと？」

「へっ？」

意外だった、なるべくぼかして言ったのに、全部お見通しだったらしい

「カイが走って行ったの見えたからねぇ、今頃マミがチカに話してる頃だよぉ」

そういえばあの時叫んだかも、それが聞こえて…、我ながら不覚也

「そうなんだ。良いの？隠してたのに」

「別に隠してた訳じゃないよぉ、言わなくてもいいかなぁ、ってぇ」

それでチカが苦しんだのに、まぁ俺らの事は秘密のままで良いだろ

「カイ達はどうなのぉ？」

おい！！いきなりかよ、不意打ちにも程かあるだろ、いかにも俺がチカの事好きなの知ってます的な発言は

「カイはチカの事好きなんだろぉ？」

ってバレバレかよ！ユキの鋭さに脱帽だよ、ヘラヘラして実は観察してたな、あなどれない

「まぁ、俺は好きだけど…」

「やっぱりぃ、あの調子だとチカもカイの事好きだと思うよぉ」
「そうだと良いよな」
ユキ恐るべし、ユキが気付いてるって事は当然…
「マミもそう言ってるんだから確かだよぉ」
やっぱり、ユキが気付いててマミ姉が気付かない訳ないもんな、俺は全く気付かなかったのに、ある意味恋は盲目だな
「応援してるよぉ」
「ありがとう」
でも俺らの方が一枚上手だったらしい、だってステップ3くらいまで来ちゃったもん
「ユキとマミ姉はいつから？」
「高校入ってすぐくらいかなぁ」
「キスは？」
「同じ時ぃ」
島から離れて二人きりになった途端これか、お互い何となく気付いてたけど、周りの目が気になったんだろうな、特にチカは離れなかったと思うし
「気付かなかった」
「鈍感だなぁ」
普通だろ、ってかユキとマミ姉の鋭さにビックリだよ。

昨日はユキのペースだった、肝心なところは言ってないから良いか。
いつものように海に行く途中、チカが周りに聞こえないように
「ゴメン全部バレた」
「俺も」
まだ顔が険しい、何かあったのかな
「キスの事も…」
「えっ！？」
「マミ姉のペースで、ポロッと」
恐るべし悪魔、後ろを向くとマミ姉とユキが笑ってた

「やるなぁ、カイ」
「全部知ってるよ」
何で気付かなかったんだよ、マミ姉の前では嘘は通用しない事に
「キスしたことも」
『うん』
「俺が好きって言った事も？」
『うん』
「チカ～」
「ゴメンゴメンゴメンゴメン！」
隠し事無しは良いんだけど…、何か悔しい、後ろからマミ姉が肩を叩いてきた
「何？」
「チカちゃんを頼んだよ」
スゲェ笑顔、しょうがない諦めるか
「当たり前だろ」
「カイ～、ホントにゴメン」
「良いよ別に、しかも、もう隠さなくてもだろ」
チカの肩に手を置いて俺の方に寄せた
「なっ？」
「少なくとも、俺は楽になった」
思いっきり笑って、チカを見た
「アタシも！」
チカも返してくれた、ってかユキとマミ姉が呆れてるし
「あれはどうなのぉ？」
「ある意味私のミスかもね」
勝った…、でも自分の気持ちも言えたし、秘密もなくな…ってないな、後であの事をチカに言わなきゃな
「そういえば今日夏祭りあるんだよね」
「何それ？」
「毎年神社でやってるお祭り」

「もうそんな季節なんだ、カイは行くだろ？」
「楽しそうだから行くよ」
「じゃあ、今日の夕方にユキ君の家に集合ね」
夏祭りか、何年くらい行ってないんだろ、久々のお祭りにテンション高くなってるし

赤とのお祭り

サーフィンを早めに切り上げて、家に帰って着替える事にした
「カイ、これあげる」
ユキが持ってきたのは、青の格子柄の浴衣だった
「良いの？高そうだけど…」
「良いよぉ、俺はこれがあるしぃ」
そういって着てる物をみしてきた、薄い灰色で袖と裾の方が徐々に白くなって末端は真っ白な甚平
「ならありがたく、貰っときます」
着てみて一つ気づいた、これってユキ用だからデカイ！
「でかくない？」
「裾は安全ピンで」
「袖は？」
「時間がないから無理」
裾は何とか合わしたけど、袖は長い、貰っといて文句を言うのは良くないな
「じゃあ、お返しで髪いじってやるよ」
「大丈夫なのぉ？」
「任せろ！」
「任した！」
俺はユキの髪と自分の髪を軽くいじった、案外得意なもので
「何か良い感じぃ」
「だろ、マミ姉とデートの時は任せろ」
「頼んだよ」
俺達が支度をし終えて、暫く話してると、下から聞き慣れた叫び声が…
「カイ！ユキ！」
うるさい、何でチカは飽きないでよくやるよな、迷惑だし

「あれどうにかしてよぉ」
「無理」
「即答かよぉ」
「早くしろ！」
せっかちだな、早く行かないとチカが暴れそうだから、下に降りてビックリした
『カワイイ…』
「チカちゃんがメイクしてくれたからね」
「チカメイク上手いな」
二人共メイクしてたし、チカはあげてた前髪を下ろして流して留めてる、は朝顔柄のピンクの浴衣が似合ってるし
マミ姉は長い髪を簪でまとめて、桜のちりめんの濃紺、かなり大人っぽい
「ユキ君も髪、カッコイイよ」
「カイがやってれたんだよぉ」
「凄いじゃねぇか、カイ…、って何その浴衣」
来た、何とか回避してたのに、触れて欲しくない所に
「ユキに貰ったから、ユキサイズで合わなかった」
「良いんじゃない、カワイイよ」
「うん、カイ君カワイイ」
「男にカワイイは、無いだろ…」凹むよ、確かにデザインは良いけど、大きすぎるだろ、凹んでる俺の腕にチカがしがみついてきた
「凹んでないで行くぞ」
「…行くか」
いつもと違うチカに、少しドキドキしてる、いつものボーイッシュなチカとは違ってマジカワイイ。
神社ではお祭りが始まってた、案外賑わってた
「カイ行こう！」
「行くか！」

チカに腕を引かれて、よろめきながらついていった
「ユキ、マミ姉！先に行ってるから」
二人は笑いながら手を振ってた、急にこれだからしょうがないか
「カイ、どれから行く？」
「行きたい所はある？」
「特に無いけど」
「じゃあ焼そば」
「いきなり？」
「腹減ったから、良いだろ？」
「行くか」
今は普通に手を繋いでるけど、始めて手を繋いだんだよな。
焼そばを買って、とりあえず裏の方で座って食べてた
「はべふ（たべる）？」
「いいから食べれば」
呆れてるし、でも腹減ってたんだからしょうがないだろ
「カワイイ」
「まふぁ…」
“ゴクンッ”
「またカワイイって言った」
「だって何かカワイイんだもん」
「チカには負けるよ」
「えっ？ホントに？」
何で話を回避するのにのろけなきゃいけないんだよ、我ながら馬鹿だな
「食い終ったから行こ」
「ねぇ、ホントにカワイイ？」
いつまで言ってんだよ、確かにカワイイけど真面目には言えないから。
うるさいから、チカの頭に手を乗せて、俺の額をチカの額にくっつけた

「ひっ」
「メチャクチャカワイイ」
チカが顔を真っ赤にしてるし、言っちゃ悪いけど、扱い易い奴
「ほら、行こう」
「…うん」
さっきみたいに手を繋いで歩いてた
「どっか行きたいところある？」
「金魚すくいがあるから勝負しない？」
「ホントに良いの？」
「な、何で？」
「俺に金魚すくいで勝負を仕掛けて、無事に帰った奴はいないからな」
「どんな金魚すくいだよ」
チカも馬鹿だな、金魚すくいの覇王と呼ばれたこの俺に勝負を仕掛けるとは、朝●龍に素手で喧嘩を仕掛けるようなもんだよ
「じゃあ先にチカから良いよ」
「分かった！行くよ～」
チカは慎重に小さい奴を見極めてすくっていった
「やった～！５匹だよ、５匹！アタシの勝ちだな」
「フフフ…、５匹程度で勝ったと思うな」
そういって俺は始めた、東京のと違って元気だな、でもまだ甘い
「ほい、ほい…、ほいほい……」
「お、お兄ちゃん、もう止めてくれよ」
はいＴＫＯ、毎度の事ながら金魚で入れ物がいっぱいになってる
「カイ…、凄すぎ」
「連続ＴＫＯ記録のレコードホルダーだぞ」
「金魚すくいってところがスケール小さいよな」
「うるさい！おっちゃん、一匹でいいから選ばしてよ」
「いいよ！もってけ」
この反応いつ見ても清々しい、勝者だけが味わえる美酒ってか

「じゃあチカ、罰ゲームだ」
「何だよ？」
「めんどくさいから、チカが選んで」
「何だよそれくらいかよ…、ならこの出目金」
「持ってけ、もう来んなよ」
「考えとく」
気持ち良かった、“もう来るな”は金魚すくいに行くと言われる言葉トップ３に入るよ
「楽しかった」
「おじさん、今頃泣いてるよ」
「いつもの事だよ」
「この出目金カワイイな」
ここで世間一般では
「お前の方がカワイイよ」
って言うのかもしれないけど、それだとつまんないから
「チカの１００倍はカワイイんじゃねぇの？」
フグみたいに膨らみだした、これはこれでカワイイんじゃないの
「アタシの方がカワイイって言えよ」
ふてくされたちゃった、しょうがない、人前ではあまり使いたくない手だけど…、耳元で
「チカはカワイイよ、だって俺が大好きな人だもん」
期待通りに顔を真っ赤にしてくれた、あんまりこういうのろけみたいな事したくないんだよな
「馬鹿…」
「何か食いたいものある？俺はたこ焼き食うけど」
「また食うの？」
「うるさいな、何も無いの？」
「たこ焼きでいいよ」
俺はたこ焼きを二つ買った、チカが誰も来なくて、丁度良いところを知ってるらしいからそこに行った。

そこは神社の裏の方にあって、池の前に岩がある、そこに二人で座った
「狭いね」
「そうか、密着して良いじゃん」
「変態」
“ボフッ！”
チカのボディブローのせいで、俺は岩から逆さまに落っこちた
「苦しいから…」
「だってカイが…」
「ゴメンゴメン。ほらたこ焼き、冷めないうちに食べちゃおう」
ここは静かでいい、お祭りの賑やかさが嘘みたいに静かだ、海が近いのもあって波の音だけが響いてる、潮風もきもちいいし最高の場所だ
「何でこんなところ知ってんの？」
「アタシの泣いてた場所」
ビックリした、自分が泣く所ってのは大体、人に知られたくない場所なのに
「俺なんかが来て良いの？」
「良いよ、だってもうここじゃ泣かないもん」
やっぱりじゃなきゃ俺なんかが来れる分けないもんな
「今度からはどこで泣くの？」
「カイの胸の中！」
満面の笑顔で言われると責任重大だな、でもそれだけ俺が頼られてるって事か
「なら任せろ」
「ありがと」
この時間、この場所、そしてチカ、全部が俺の背中を押してくれた気がした

青の過去

やっと俺はあの日の事を話す気になれた気がした、チカが俺の中で大きな存在になったんだ、話しても何も変わらない事は分かってる、でも話したら何かあるかもしれない、そんな気がした

「チカ、俺さぁ、5年前に幼馴染み、その時好きだった子が死んじゃったんだよね」

「えっ？」

―5年前、俺はまだ笑ってた、毎日が楽しかった、いつも3人でいた（一人はおまけ）

「カイちゃん、今日は何する？」

「未菜、もう5年生なんだから“ちゃん”は止めろよ」

「良いの、カイちゃんはカイちゃんで」

俺の事をカイちゃんと呼ぶ女の子が、石上未菜（イシガミミナ）俺が子供なりの初恋の相手。

その日は井上がいなかったから二人だけだった、邪魔がいないし、好きな子と二人きりだったからはしゃいでた

「ミナは何したい？」

「おままごと！」

「いつまでそんなことやってんだよ」

「野球！」「ボール来たら、目を瞑るくせにできるわけないだろ」

「う～」

いつもこんな感じで幸せな時間を過ごしてた

「じゃあカイちゃんの家に行こう！」

そういってミナは走って行った、この頃から親は家にいなかったから、うちで遊ぶのが多かった

「負けたら罰ゲームだよ！」

「分かった分かった」
しょうがないから追って行った、それが奈落の始まりだった。
ミナが十字路を渡ろうとした時だった
“キィッキィィィ！ドン！”
「ミナ！」
俺の前でミナが力なく人形のように宙を舞った、地面におちた瞬間
血で水溜まりができた、俺は目の前が真っ白になって恐怖で動けな
くなった。
ミナは即死だったらしい、葬式も通夜も行かなかった、当然ミナに
お線香もあげてない。
それから俺は虚無になった、笑う事や人との触れ合いを自然と絶っ
た―

「ミナちゃん、多分カイに来て欲しいと思う」
「分かってる。何度も家の前まで行ったんだよ、でも怖くて引き返
した」
暫く沈黙が続いた、チカに話すべきじゃなかったのかな
「だから、チカは絶対に手放さない、これはせめてものミナへの償
い」
「じゃあアタシは絶対にカイから離れない、これはミナちゃんの願
い」
ミナなら喜んでくれるよな、絶対に笑って過ごすから
「アタシがミナちゃんがいた時より、ずっと幸せな毎日をやるよ、
ミナちゃんの事を忘れろとは言わない、でもミナちゃんにしがみつ
くな、前だけを見て」
この言葉、分かってたようで逃げてた、ミナのいた時から進んでる
ようで、止まってる、でも今は動いてるよな、チカが動かしてくれ
たよな。

俺はチカをそっと抱きしめた
「チカ、ありがとう」
「何だよ急に？」
笑顔で
「気分！」
「変な奴」
「うるさい。もう時間だから帰ろう」
そういって手を差し出した、手を繋いでお祭りの真ん中を歩いて、
待ち合わせてた鳥居の下に行った、そこにはユキとマミ姉が立ってた
「二人共遅い」
「まぁ良いじゃん、二人共なんか楽しそうだしぃ」
「本当だ、何かあったの？」
「ちょっと動きだしただけ」
二人の頭の上にはクエスチョンマークが浮かんでた
「何言ってるのぉ？」
「ユキには関係ないだろ」
「チカまでそんなことぉ」
「まぁ、良いじゃない、早くしないと花火始まっちゃうよ」
「そうだぁ！早く行こぉ」
ユキがマミ姉の腕を引っ張って走って行った、俺とチカは後ろを追って行った

白の過去

ユキとマミ姉を追って、道から外れた森の中に入って行った、緩やかな坂道だけど、道がしっかりしてないし走ってるから疲れる
「着いたよぉ」
そこは森が拓けた場所で、風も通って気持ちいい所だった
“ドォーン！”
「始まったぁ」
みんなでその場に座って花火を見た、近くで上がってるらしく花火がデカイ
「何でユキはこんな所知ってるの？」
「知りたい？」
「いや、別に」
「何でだよぉ、たまには俺にも語らせろよぉ」
「なら教えて」

―あれは俺とマミが小学校6年生だからぁ、5年前の事かなぁ、今は髪が短いけどマミみたいに長かった時、今はまだマシだけどあの時の俺は泣き虫の甘ったれだったんだぁ、いつもマミに守られてたんだぁ、島のジャ●アンがいつも俺をからかってくるんだよなぁ、その日もそうだった
「マミ、髪切ってよぉ」
「良いよ、じゃあハサミ持って来るから少し待ってて」
髪切ってもらうためにいつもは髪をゴムでまとめてるけどゴムを腕に付けてたんだぁ、その時にジャイ●ンこと雄二だっかなぁ、そいつが来たんだぁ
「あれ？ユキちゃん何してるの？」

イヤミな感じでつっかかって来たんだぁ、ちなみに“ユキちゃん”は雄二がからかうときに使う手、頭悪いよなぁ
「髪切って貰うだよぉ」
「またアララギかよ、ユキちゃんはアララギがいないと泣いちゃうもんな」
あう度にからかって来るから慣れてたんだよねぇ
「うるさいなぁ、どっか行けよぉ」
「何だと？ユキのくせに生意気なんだよ」
そういって腕を掴んで倒そうとしたらしい、でもゴムを掴んでゴムが切れちゃったんだぁ、そのゴムはマミに始めて貰ったものだったからぁ、お宝みたいなものだったんだよねぇ
「何するんだよ」
「ユキが悪いんだろ」
「ふざけるな！」
そういって雄二の顔を殴って走って逃げたんだよなぁ、人を殴るのは始めてだったんだぁ。
走って走ってぇ、いつの間にか森に入ってぇ、気付いたら拓けた所にいたんだぁ
「ユキ君！」
「マミィ？何でいるのぉ？」
「ユキ君が雄二君と喧嘩してて、声かけようと思ったらユキ君が走って行っちゃったから、追って行ったらココに」
何となく見られたくないところを見られてぇ、何か恥ずかしかったんだよなぁ
「マミィ、髪切ってぇ」
「良いよ、どれくらい？」
「思いっきりぃ」
「思いっきりって、これくらい？」
そういって指で髪を挟んだんだぁ、今までが長っかったからぁ、肩辺りだったかなぁ、でもかなり切って欲しかったんだぁ

「ハサミ貸してぇ」
「はい」
“バサッ”
「ユキ君！？そんなに切っちゃ…」
「これで良いんだぁ」
そういって大雑把に切ってぇ、後はマミに任したんだぁ
「男の子みたい」
「俺は男だよぉ」
「でも良いの？本当にこんなに切っちゃって？」
「良いの良いのぉ」
髪の間を風が通り抜けるのが分かったんだぁ、ゴムが無いのもあったけど、男っぽくなりたかったんだぁ。
その時にマミに守られるんじゃなくてぇ、マミを守るってきめたんだぁ―

「その時に逃げて来たのがココぉ」
昔からユキとマミ姉は一緒にいたんだ、髪が長いユキも見てみたいかも。
花火も連続で打ち上げられてクライマックスに近づいてきた、そういえばいつの間にかチカと手を繋いでた。
夏休みも終わり間近、ユキとマミもいなくなる、後少ししかないけど、この四人でいれば無条件で夏休みを楽しめそうだ

青のミス

夏休みもあと三日、ユキとマミ姉が明日で帰るから今日で最後のみんなで波乗りだった
「なんか寂しいな、ユキはもういなくなるんだろ」
「しょうがないよぉ、冬休みにはまた戻るからぁ」
待つか、チカもいるし、毎日サーフィン出来るし、新しい学校もあるし…
「あぁ〜！！」
「な、何だよぉ？」
「転校の手続きしてない！東京に行ってフェリーで帰って来ると、学校に間に合わない」
そう遊びまくってて、住民票もこっちに移さなきゃいけないし、前の学校にも転校の事言わなきゃいけないし、次の学校にも…、最悪だ
「どうするのぉ？」
「わかんない、おとぉとおかぁに話してくる」

…結果、明日ユキ達と一緒に行き、帰りはこの島の漁師さんの船で帰って来る事になった、軽く走馬灯を見るところだった
「良かったなぁ、俺とマミは着いて行けないけど、スムーズにいくと良いなぁ」
「何で行けないの？まだ期間あるじゃん」
ユキの顔から血の気がひいていった
「俺が宿題やってるところ見たことあるぅ？」
「終わったんじゃないの？」
「俺がやるわけないだろぉ、マミもやってないらしいからぁ、徹夜で頑張るぅ！」
マミ姉がやってないのは以外だった、しょうがないから一人で行くか。

朝起きてユキの支度を手伝って、俺も支度をして家を出た、外にはマミ姉とチカがいた
「カイ、全部聞いたぞ、アタシも行くからな」
「何で？」
「お守りだ！」
嘘だ、絶対一人だと泣くからだ
「遊ばないぞ」
「え～」
遊ぶ気満々だったんだ、こっちには時間がないんだよ
「早く行かないと間に合わないよ」
「ホントだ！チカ行くぞ」
小走りで港に向かった。

港には船が着いてた、みんなで乗って俺はすぐに寝た、乗り物酔いが激しいから、船は仇みたいなものだ、マミ姉の次に怖い存在でもあるかな

「…ろ！」
“ボフッ！”
腹に何か落ちた、ってか苦しい、眠い
「起きろ！」
“バチン！”
「何すんだよ！？」
「早く降りるぞ！」
腕を引っ張られてフェリーを出た、これってデジャブ？確か、島に着いた時も同じような事が…
「カイ、遅すぎぃ」
「カイ君、自分で起きれるようになろうよ」
「すみません」

船って起きてると気持ち悪いけど、寝ると爆睡なんだよな
「俺達はカイ達と違う方向だからぁ、ココでお別れねぇ」
「学校頑張れよ」
「カイ君もね」
二人と別れた、何か寂しい、チカはこれを一人で乗り越えたんだよな、辛いな
「じゃあ行こ…、って泣いてる？」
「う、うるさい」
いつまでたっても泣き虫は変わらないんだな、しょうがないから手を引っ張って駅に向かった。

久々の東京は何も変わってなかった、乗り換えて俺が住んでた街まで行った
「懐かしい？」
「心地よくは無いけどね」
あの街に行くのは嫌だった、今気づくと空気も最悪に悪いし。

俺が住んでた街もほとんど変わってなかった、でも唯一変わっていたのが
「やっぱり家が無い」
「ココにあったんだよな？」
無言で頷いた、寂しさはなかったけど、虚しさはあった。

早く帰りたかったから、とりあえず役所に向かって、住所を変えてきた、その後学校にも行って転校の手続きをした、校門から出た時の事だった
「…シシキ君？」
最悪だ、さっさと帰りたかったのに、よりによってコイツに会うとは
「渡辺か、何？」
「帰って来たんだ」

「違う、転校するからそのために来た」
「えっ？」
驚いてる、そりゃそうだろうな、でも俺はココに未練もない
「何で？」
「親に捨てられたから」
「どこに転校するの？」
「この前の島」
「となりの女の子は？」
チカの顔を見た
「彼女？」
「何で“？”なんだよ！公認のカイの女だよ！」
「だって」
更にショックを受けてる、他人を傷付けるのは好きじゃないけど、こうでもしないと離れてくれないと思って
「こんなガサツな女のどこが良いの！？」
「今何て言った？」
「だから、こんな女のどこが良いの？」
コイツ、ここまで腐ってるとは思わなかった
「ふざけるな！テメェみたいな女に、何が分かる！行くぞチカ！」
俺は始めて女の子にこんな暴言を吐いた、チカの手を引いてその場を立ち去った。
あの女はその場に立ったまんまだった、他人の前でココまで感情的になったのは始めてだった
「良いのカイ」
「良いんだよ」
「あの時のカイ、怖かった」
「ゴメン」
チカが脅えてる、かなり強引だったから驚かしちゃったかな

青のケジメ

俺はある場所に向かってた、過去にお別れと報告をするために。
その途中、見慣れた奴がいた、あの時はうるさい奴だったけど、今は幼馴染みと思える
「井上」
「おうカイ、来てるなら連絡くれよ」
俺は井上に夏休みにあった事を全部話した、島に済むことも、チカの事も
「ウルマさん、カイをよろしくな」
「任せろ」
「何かミナに似てるな、この子」
「そうか？似てないだろ」
「で、何しにココに？」
「ミナと話に」
今、俺はミナの家の前にいる、今なら手を合わせることも出来るような気がした
「頑張れよ」
井上は帰って行った、コイツと会うのもこれで最後かもな

“ピンポーン”
「はい！」
中からミナのお母さんが出てきた、何も変わってない。
あの時の事がフラッシュバックのように頭を駆け抜けて行った、でも今ならその事実を受け止められる
「どうも久しぶりです」
「シシキ君？」
「すみませんでした！ミナの葬式も何も行かないで、自分一人が逃げてて！良ければお線香をあげたいんですが…」

ミナのお母さんが泣いてる、虫のいい話だってのは分かってる、遅いのも分かってるでも
「ありがとう、ミナも喜ぶわ、さぁどうぞ」
俺が通された部屋には、ミナ仏壇があった、お線香をあげて、手を合わした
「ミナ、遅くなってゴメンな、守れなくてゴメンな。だからミナの分まで俺は幸せになる、俺がミナと同じところ行ったら、最高の思い出話してやるから、少し待っててくれ」
胸に引っかかってた物が、無くなった気がした、楽になった
「カイ、もう良いの？」
「まだある」
「何？」
「ミナ、これ俺の彼女、ミナに言うのは筋違いだと思う、でもチカをミナみたいにはさせない、ミナとチカに誓うよ」
これで俺は一歩前に進めた気がした
「シシキ君、お茶飲んで、そちらのお嬢さん…」
あれ黙っちゃった、チカが何かしたのかな、それともチカを連れてくるのはまずかったかな
「ミナにそっくり」
『へっ？』
「顔とかじゃないわよ」
性格もな
「雰囲気が何となくだけど、ミナに似てる」
実の親が言うんだから確かなんだと思う、井上も同じような事言ってたし。

その後長々とミナの思い出話をして、帰った
「じゃあ帰るか」
「その前にお腹空いたから何か食べよ」
「そうだな、まだ約束の時間まであるし」

俺達は近くにあったファミレスに行った、そのファミレスは中高生の溜り場みたいなもので、何人か知り合いがいたけど、あえて触れがたい雰囲気を出して席に着いた
「何頼む？」
「アタシはね、ミックスグリルとポテトとリゾット」
呆れた、普通男の前では守りたくなる女を演じるだろ、少なくとも俺の中ではそうだけど
「じゃあミックスグリルとライスで」
「少食だな」
「チカが大食過ぎるんだよ」
こんな大食だとは知らなかったけど、チカらしいって言ったらチカらしい
「ユキとマミ姉は今頃、必死に宿題やってるんだろうな。チカはやったの？」
「無いもん」
気楽で良いよな、あの二人は徹夜覚悟なのに
「ユキとマミ姉がいなくなるのは、やっぱ悲しいよな」
「でもアタシは一人じゃないもん」
「学校の友達もいるだろ」
「あ！そっか！」
馬鹿だ、本物の馬鹿だ、今頃気付くな、でも一人だったのは確かだと思うな
「クラス何人？」
「アタシ入れて５人」
そんなものだろうな、逆に３０人です、って言われた方がビックリだよ
「どんな奴ら？」
「うるさいのに、ホモに、ガリベンに、ガキ」
濃い、何か物凄く濃いクラスだな、俺、ついていけるの？

青の新しい学校

今日から新しい学校か、楽しみだな、転校なんて始めてだし、チカとの学校生活、東京にいた時はブレザーだったけど、今度は学ラン、ユキのお下がり…

「デカッ！」

考えが甘かった、中学生だからピッタリだと思ったら、学ランまでデカイ

「カイ！降りてこい！」

チカだよ、上がってきて良いから黙って欲しいよ

「お待たせ」

「プッ！」

「吹くな！ユキのだからしょうがないだろ」

「分かった分かった。早く行くぞ」

たまに笑いを堪えきれなくなって笑い出す、俺は小さくないんだよ、ユキがデカイんだよ。

俺は学校に着いたら職員室に行った、なんか挨拶があるらしい、しかも担任も新任であたふたしてるし

「え～と、そのぉ…、風間詩織（カザマシオリ）２３歳です！」

大丈夫かよこの人で、しかも歳いらねぇし

「どうも、四色海」

「わ、私、先生になって、始めて赴任されて…」

「分かったから、緊張しなくて良いから、早く行かないと間に合わないよ」

応接室の時計は３５分を回ってた、先生は慌てて立ったら、そのまま床に頭突き

「大丈夫かよ？」

「はわわわ～」

女としてはカワイイけど、不安だな
教室の前まで着いた、着くまでに何度か迷ったけど、この先生のせいで
「本当にゴメンなさい！え～と、それじゃあ、え～と…」
「呼んだら入れば良いんでしょ？」
首が外れるんじゃないかくらいの勢いで頷いた、そ～っと教室のドアを開けて先生が入って行こうとした
「お！新しい先生だ！」
チカの声だ、学校くらい静かにしろよ
「ヤベェ！超カワイイ！」
知らない男の声だ。
先生は戻って来た、何してるんだか
「はわわわ～。どうしよう？」
「あぁ！じれったい」
俺は教室のドアを開けて先生を中に押し込んで、俺も後ろから入って行った
「東京から来た四色海です。よろしく」
「えっ？はいっ？」
先生がテンパってどうするんだよ、ってかどっちが教師だかわかりゃしねぇ
「黒板に名前書けば、喋らなくて良いだろ」
納得した感じで、黒板に名前を書き始めた、にしてもこのクラス、チカと男がうるさい
「フウマシオリ！フウちゃんだ！」
「ち！違う…」
「馬鹿大地！カザマシオリだよ！カ・ザ・マ」
先生がまた物凄い勢いで首を縦に振った
「俺の席どこ？」
先生が指を指した先はうるさい男の隣だった、前列が女子で後列が

男子。
言われた席に座ると隣にいたうるさい男が話かけてきた
「俺、田上大地（タガミダイチ）！よろしくな！」
「よろしく」
一応手を出されたから握手をしといた。
先生がまだ教卓の所でテンパってた
「え～と、じ、じこ…」
見かねて左側にいた髪の長いメガネをかけた女子が立ち上がった
「先生、自己紹介ですか？」
「うん！」
「だって、チカから左に行って、その後穂から左ね」
チカが勢いよく立ち上がって
「潤間千夏です！趣味特技はサーフィン！」
隣の髪を二つに別けて結んで、人形を抱えた女子が、チカに催促されて立ち上がった
「藍堂夢（ランドウユメ）。趣味、人形集め。特技、人形作り」
必要最低限しか喋らない子だな。
さっき自己紹介を提案した女子だ
「村島紗英（ムラシマサエ）です。趣味は読書、特技は暗記」
ピリピリしてんなぁ、コイツがガリベンか
男子に回ってきた、綺麗な顔に狐目の男だ
「どうも、犬柴穂（イヌシバミノル）です。趣味はティータイム、特技は紅茶の銘柄を当てることです。カイ君、よろしく」
ナルシストっぽいな、しかも趣味って、微妙にずれてない。
ついにコイツか、さっきからうるさくてしょうがない、坊主を伸ばしてオシャレにした感じの髪型、悪く言うとマリモ
「田上大地（タガミダイチ）！趣味、特技はＭＴＢ。フウちゃん、よろしくね！」
フウちゃんは多分、先生の事だろ、それにＭＴＢか、少しは話が合いそうだな
「カイの番だぞ」

「俺も？」
「当たり前だろ」
みんな不思議そいな顔で見てる、俺らの事知らないからな
「四色海。趣味はサーフィン、特技はフリークライミングと料理です」
『料理！？』
男が料理しちゃいけないのかよ、そりゃ料理は女がするものっていう固定概念があるけど、まぁいっか
「じゃ、じゃあ、今度は私が、風間詩織２３歳です」
だから何で歳を言うんだよコイツは、そんなに自慢したいのかよ
「趣味は漫画、特技は絡まった糸をほどく事です」
ネクラ、しかもかなりインドア、で一つ思った
「先生、質問です」
「な！何！？」
そんなに驚くなよ、転入生が質問しちゃ悪いかよ
「先生にこんな濃いクラスをまとめられるの？」
「はっ！！」
いやいや、あからさまにハッとするなよ
「カイ、変な事聞くなよ」
「だってそう思わない、チカ？」
「確かに」
「が、頑張ります！」
不安だけど、こうやって、俺の新しい学校生活が始まった、にしも先生を始め色物クラスだな

青とクラス

朝からチカの叫び声を聞いて登校した、教室に入ると全員いた
「おはようカイ！」
「おはよダイチ」
「ってか、チカと一緒！？」
そういえば言ってなかったな、めんどくさいし気付かれるまで、言わないでおこ
「別に良いだろ、カイと一緒に登校するくらい」
「いやでも！」
「ダイチ、うるさい」
ユメちゃんか、みんなそう呼んでるから俺もそう呼んでる、昨日も間の休みに人形作ってたな
「ユメ、馬鹿どもは気にしない方が良いよ」
ユメのお守り役のサエ、いつも勉強してるらしい、ちなみにサエが委員長
「サエは何してるの？」
「カイには分からないよ」
何だこんなものか
「ちょっと貸して」
「はい」
案外簡単だったから、ササッと解けた
「あってるだろ？」
「すごい、何で解るの？」
「さぁね」
そういって席に座った、そういえばさっきから窓際で一人で外を眺めながら紅茶を飲んでる奴が
「ミッチー、おはよ」
ミッチーは雰囲気が及川光●に似てるし、ミノルだからミッチー

「あぁカイ君、おはよう。今日も綺麗な顔をしてるね、流石、僕が目を付けた男性だ」
コイツはホモです。
そんな事をしてる間に、いつの間にか先生が入って来てた
「あ、あの〜、座ってください…」
「フウちゃんおはよう！」
ダイチが挨拶をした、フウちゃんとはダイチが最初にかましたミスからできたあだ名、みんなフウちゃんって呼んでる
「おはよう、でも座ってほしいな…」
まとまりが無い、何となくこうなるとは思ってたけど
「ダイチ、終わってから騒げ。チカ、早く座れ。ミッチー、お茶は後にしろ」
『はい』
ってか転入生が何でクラスを仕切ってんだよ、普通委員長のサエがするべきだろ、サエはユメちゃんと話てるし
「ありがとう、カイ君」
生徒を下の名前で呼ぶ先生も珍しいよな。

朝のＨＲが終わって授業が始まった、授業はフルスロットルで寝る派だから、転入して最初の授業から爆睡
「シシキ起きろ！」
“ゴツ！”
「痛ぁ！！」
歴史の本の角で思いっきり叩かれた、あの痛さは尋常じゃない、ってかサエ以外は大爆笑だし
「カイ、大丈夫か？」
「チカのパンチよりはマシだよ」
「なっ、アタシがせっかく心配してやってるのに」
俺達の会話にみんなクエスチョンマークが浮かんでる、サエは授業中断するなと目で訴えてきたし

「シシキ、鉄砲は何処の国の人によって、日本に伝来された？」
そんな問題かよ、常識中の常識だろ
「ポルトガルだろ」
「せ、正解だ」
何ビックリしてるんだよ、俺が鉄砲伝来を知ってちゃいけないのかよ。

十分休みの時だった、急にユメちゃんが大声ん出した
「あぁ！」
『何！？』
ダイチとチカは黙ってるし、ミッチーはお茶を被ってる、サエはシャー芯が折れてる、俺は椅子で飛び跳ねた、ユメちゃんはいつも声が小さいから、こんな声を出すことはないと思う
「チカ、カイ、手を繋いでるの、見た」
『えぇ！？』
何だユメちゃんに見られてたんだ、別に良いんだけど
「ユメ、ホントか？」
「ユメ、嘘、言わない」
「どういう事だ！二人共説明しろ！」
ダイチが頭を抱えて変な動きをし始めた、この動きだけでＭ１に優勝できそうだな
「だって、チカ」
「何て言えば良いんだよ」
「まぁ普通に」
チカの隣行って、肩を抱き寄せた
「それは、俺達付き合ってるから、な」
「まぁね、でも人前でこれはやめろ」
チカが離れて行った
「嘘だ！チカに彼氏が！しかもこんなイケメンの！」
「ダイチ、少し落ち着け」

「カイ君、僕という存在がありながら」
「ミッチー、誤解されるような事言うな」
「勉強に集中できない」
「サエには迷惑かけないし」
「不潔、考えられない」
「ユメちゃん、子供にはまだ分からないな」
みんなの驚きと、冷ややかな目が注がれてるし、まぁ関係ないし、
誰が何と言おうがチカを好きな事は変わらないし
「あの〜、もう授業が始まってるんだけど…」
「フウちゃん！国語の先生なんだ、よろしくね！」
いつの間にかフウちゃんがいた、それにしても陰が薄いな、もう少
し堂々と出来ないのかね

青の友情

新しい学校生活は慣れた、東京にいた時に比べてクラスは楽しい、みんな良い奴だし。
いつもと同じように学校に登校して普通に授業を受けてた
「次はフウちゃんの国語か」
「国語！？」
俺の独り言にダイチが異常に反応した
「国語好きなの？」
「えっ？あぁ、いろんな意味でね」
あたふたしてるけど、何かあるのかな
「みんな座って…」
フウちゃんも何となく慣れてきたらしい、あがらなくなったし、まとまりが出てきた。

授業はスムーズに終わった、昼休みだけど、いつもはチカと弁当を食べてるんだけど、今日はダイチに誘われたからダイチと食べる事にした
「チカ、今日はダイチと飯を食うから」
「分かった」
「悪いな」
連れて行かれるがまま屋上に行った、何でか知らないけど、ダイチは屋上の扉の鍵を持ってるらしい
「悪いな、急に誘っちゃって」
「別に良いよ」
何かいつもと違ってモジモジしてる、もしかしてミッチー系列！？
「あのさぁ、相談があるんだけど」
「何？」
相談という言い回しの告白？と、勝手な想像を巡らしてみたりする

「好きな人がいるんだけど」
「チカ以外なら応援するよ」
「違うから」
「じゃあ、サエ？カワイイけど勉強一筋だぞ。それともロリコンでユメちゃん？」
ダイチの顔が一気に真っ赤になった、考えただけでそこまで真っ赤になるって事は、かなり惚れてるな
「…フウちゃん」
あぁ、フウちゃんか、カワイイし、オットリしてて守りたいタイプだな、…えっ？フウちゃん！？
「フウちゃんって、あのフウちゃん？」
「そうだよ」
「…えぇ！？」
コイツ先生に恋しやがった、年上にも程があるだろ、８つも上だぞ
「一目惚れだった」
「マジで言ってんの！？先生だぞ、同じ土俵にすら立ってないぞ！」
ダイチの顔は真っ赤だったけど、真剣さが伝わって来た
「恋に歳は関係ない」
うわっ、言っちゃった、歳が離れてる恋に使う言い訳
「マジなの？」
「当たり前だろ」
「勝率は限りなく０に近いけど？」
「うん」
誰が何と言ってもダイチはこの恋を諦めないだろうな
「なら応援するよ」
「ホントに！？」
「チカ以外なら応援するって言っただろ」
ダイチが俺の腕をブンブン振り回してきた
「カイありがとう！」
「別にそんなに喜ばなくても良いだろ」

「だって、やっと相談できる相手ができたんだもん」
相談できる相手か、俺はユキか、確かに最初は嬉しかったな
「でも、他にも友達いるじゃん」
「他じゃ、ダメだよ」
「何で？」
「だって、ミッチーはホモだから話にならないし、女子には話せないだろ。俺、まともな男友達が欲しかったから」
ミッチーが可哀想だけど、なんかそれって寂しいな、昔の俺ならそれで良いと思ったけど、今ならその気持ち分かる気がする
「じゃあ、男同士の約束だ。俺はダイチの恋を、全面バックアップするよ」
俺はダイチの前に拳を出した、不器用だけどこれしかなかった
「約束だ！」
俺とダイチは拳を合わせた。
男同士の友情か、ユキとは最初はそうだったけど、今は兄弟、だから今の俺にはダイチがそれになるんだな。
でもやっぱり先生への恋はキツイよな、…これも青春か

青は先生

2学期が始まってからかなりたったな、もうすぐ中間テストだし、昼休みチカは意外にも勉強してる、サエはユメちゃんの先生、ミッチーは沈没、ダイチは勉強する気になれないらしい、俺は爆睡

「そこは、因数分解を…」

みたいな感じで、放課後、俺が理系の先生でサエが文系の先生になって補習

「やっと、終わりましたね」

ミッチーは意外にも勉強が嫌いらしい

「ミッチー頑張れよ、頭が悪いと美しくないぞ」

「カイ君、お心遣いありがとう、でも人には向き不向きが…」

「勉強に言い訳しても変わらないぞ」

ミッチーは納得したっぽいけど凹んでる

「カイ、少し分からない所があるから、勉強手伝って」

サエが他人に勉強聞く何て、有り得るんだ

「良いよ」

断る理由もないし、頼られてるんだから答えるのが友達ってもんだろ。

俺はチカをユメちゃんと帰らせて、サエがいる図書室に行った

「悪い、チカを説得するのに時間がかかった」

「気にしてない。で、ここなんだけど…」

高校一年くらいの数学だった、これくらいなら簡単だな

「…この方程式を解けば答えがでるだろ」

「ホントだ、ありがとう」

別に良いんだけど、どうしても気になる事が一つ

「何でこんな問題やるの？」

「良い高校に行くため」

「なら受験勉強すれば良いじゃん」
「知識が多いに越したことはないでしょ」
確かに、でも遊ぶのを我慢してまでやるものなのかな、変な奴だな
「カイは何で勉強できるの？」
「毎年一学期の一ヶ月の間に全部頭に入れてるから」
「何で？」
「寝るため」
サエが腹を抱えて笑ってる、そういえばサエが笑ってるところ、始めて見たかも
「なんだ、サエ笑えばカワイイじゃん」
「えっ？」
サエの顔が、一気に真っ赤になった、思った事口に出したのがヤバかったのかな
「ホントに？」
「うん、無表情より良いよ、笑ってればカワイイよ」
「カイって優しいね、チカが羨ましいよ」
羨ましい？どういう意味？世間一般的に考えてか、ってか優しいって始めて言われたかも
「ありがとう」
「何でカイが感謝するの？」
「だって優しいって言われたから」
「そんだけ？」
そっか一般ピープルからしたらそれくらい当たり前か、でも俺にとっては大きな事なんだよな、無愛想だの冷たいだの言われて来たからな
「始めて優しいって言われたんだもん、前の俺からは考えられない事だよ」
「前の俺？」
「前の俺だったら学校も遅刻してきたし、補習なんてしないし、笑わないし、話もしないかったよ」

サエが唖然としてる、想像もつかないのかな、でも俺からしたら今の方がビックリだけどね、やっぱり変われたんだ
「どうして変わったの？」
「チカとユキとマミ姉のお陰」
「ユキさんと知り合いなの！？」
ユキの言葉に反応したけど、何かあるのかな
「知り合いってか、義理の兄弟」
「兄弟！？」
そこまで驚く…、事だな、義兄弟だもんな、東京でも聞いた事ないし
「まあね」
「そうなんだ…」
「何かあるの？」
「え、えっと…」
ユキ、何かしでかしたな、アイツの事だから傷付けるような事はしてないと思うけど
「嫌なら言わなくても良い…」
「初恋の人なの」
は、初恋！？ユキに？確かにカッコイイけど、ユキにはマミ姉がいるし
「でも…」
「ユキさんにはマミさんがいるってのは知ってる」
「儚い恋か、辛いな…」
サエが可哀想に思えてきた、ダイチといいサエといい、青春は人それぞれか
「いつもそう、私が好きになる人は、私に見向きもしない人ばかり」
「だから勉強を？」
「何で分かったの！？」
「だってサエみたいに叶わない恋でもするような女の子が、黙々と勉強する訳ないだろ、普通は恋を探すはずだよ、でも逃げるためなら納得がいく」

「当たり。でもまた叶わない恋をしちゃったんだよね」
やっぱり根は変わらないのか、サエの場合は苦い青春か
「ミッチーとか？」
「いつか分かるよ」
サエはそのまま帰っちゃった、サエの恋も叶う時が来ると良いな、
サエは女の子の辛い部分を知ってるから強くなるよ

赤の不安

テスト前日、補習はしないで家でお勉強、でもダイチはフウちゃん目当てで補習を受けに行ってる、英語の補習だけいつも抜けてたし、みんなも何となく気付いてるだろ、フウちゃんも頼ってもらって喜んでるし、一石二鳥だな。
今日はチカとマンツーマンで勉強に手伝ってる、中3の二学期は大事だからみんな必死だよな
「分かった？」
「頭良いな」
「感心してないで、分かったの？」
「当たり前だろ」
頑張ってないのは、俺とミッチーだけだな、ミッチーは半ば諦めなモード。
勉強も終わって、チカと散歩がてらに夕日を見に行った、久しぶりだし、二人になることがそんなに無かったから、テンションが無駄に上がってる
「久しぶりだな」
「カイが先生やってて暇が無かったしな」
「ごめんなさい」
「別に良いって」
着いた頃に調度日が沈んでた、海にはいつも通りにレッドカーペットが出来てた
「ギリギリセーフ。やっぱり綺麗だな」
「最高に綺麗」
ココに来ると、二人だけの空間みたいな感じで、色んな意味で最高な時間
「一つ聞きたい事があるんだけど」
「何？」

チカが何時になく真剣な顔をしてるし
「サエと何してたの？」
「勉強教えてただけだよ」
「ホントに？」
「チカには嘘付かない」
チカはまだ疑ってるっぽいけど、チカに嘘付かないのは本当の事だし
「でもサエが他人を誘うなんて、始めてなんだぞ」
「勉強教わる相手がいなかったんだろ」
「そうだけど…」
何で信じてくれないのかな
「頼む！信じてくれよ」
チカの前で手を合わせて懇願した、チカだけには信じて欲しいのに
「でも…」
じれったいし、俺もだんだん悲しくなってきて、目頭が熱くなってきたから、見られないように抱きしめた
「頼むよ、信じてくれよ、俺はチカだけには信じて欲しいんだ」
涙声だし、我ながら脆いと思うけど、辛かった
「カイ…」
「チカには嘘付かないし、嘘付けないんだよ」
「信じるよ。ゴメン」
その後チカに見せたく無かったから、無言で泣き続けた、情けないな。

二人で手を繋いで帰ってる途中の事だった、前から人形を抱いた子供…、じゃなくて、ユメちゃんが歩いてきた
「ユメちゃん、何してんの？」
「そっちこそ」
「デートだよ」
思いっきり笑顔を作って、自慢してやったけど、ユメちゃんには通じないな

「ゴルゴネス、どう思う？」
「…ゴルゴネス？」
「この子」
人形の名前か、かなりアグレッシブな名前だな、モンスターみたいな名前だし、カワイイ亀の人形なのに
「それ、ユメちゃんが作ったの」
ユメちゃんは無言で首を縦に振った
「凄いな！見せてよ」
「ゴルゴネス、良い？」
“良いですよ”
ユメちゃんの一人二役、中身もまだ子供だな
「はい、大事に、扱ってあげて」
「ありがと。ゴルゴネス始めまして、ユメちゃんのお友達のカイ」
“ヨロシク”
楽しいなこれ、にしてもこの人形、メチャメチャキレイに出来てるし
「で、ユメちゃん何してんの？」
ゴルゴネスを返しながら、ユメちゃんに聞いた
「散歩」
「変質者に襲われるよ」
「そんなの、いない」
「俺とかさ！」
その瞬間黙ってたチカのヘッドロックが入った
「馬鹿な事してんじゃねぇよ」
必死にチカの腕を叩いた、コイツの力は異常だよ
「あぁ、死ぬ」
「ゴメンな、ユメちゃん」
「お似合い」
ユメちゃんは呆れて発した言葉だけど、チカが顔を真っ赤にしてる、俺も顔が熱い
「後は、二人で」

ユメちゃんは俺達の横を通って行った、俺とチカは立ったまんま動けなかった

赤の才能

中間テストも終わってみんな一喜一憂してる、っていうよりも、ミッチー以外は晴れ晴れしてる、ミッチーは玉砕
「だから教えてやるって言ったのに」
「いや、僕の美学が…」
「でもその美学とやらは、俺に頼った方が正解だったんじゃないの？」
「クヨクヨしててもしょうがない！期末テストで頑張れば…」
先を見て粉砕、期末は更に力入れて教えてやるか。

テストがやっと帰ってきた、大体満点だった、最後はどちらかと言えば苦手の英語…、ってかフウちゃんのテスト難し過ぎ！高校レベルの問題だし
「サエ何点？」
「９３。カイは？」
「８５だからサエが一番か」
「いや、一番は私じゃないよ」
そういってサエが向いた先には…、チカ？他の教科は平均くらいだし、第一ダイチと一緒に補習サボってたから、てっきり出来ないものかと
「チカ、いくつ？」
「１００」
「１００点！？スゲェ！何でそんなに取れんの！？」「チカはバウリンガルだから」
バウリンガル？２カ国語喋れる人か、意外だなチカがそんなにすごいなんて
「悔しい！絶対に１００点取らせないつもりだったのに」
フウちゃん、それは違うだろ、テストは先生と生徒の勝負じゃない

から
「フウちゃん！俺５７点だよ！フウちゃんのお陰だよ、ありがとう」
ダイチがフウちゃんの手を持って腕を振り回してる、ミッチーは０点、ユメちゃんは２０点、二人共居残りらしい、可哀想に
「フウちゃん、次からは楽にしてよ、こんなの中学生には無理だよ」
「カイ君、世の中おかしな事もあるものよ、授業が全てじゃないの」
この先生ずれてるだろ、授業が全てだよ、しかも勝ち誇ったこの顔、チカがいなかったら完敗してるところだった。

テストは１番がサエ（英語以外全て満点）、二２俺（英語以外全て満点）、３番ユメちゃん（英語以外全て３番目）、４番チカ（理系でユメちゃんに離されてる）、５番ダイチ（ミッチーのお陰）、ビリはミッチー（断トツビリ）、何となく予想のつく順位だけど、ミッチーの馬鹿さには脱帽だよ。
放課後はチカと一緒に帰って、その後散歩しながら話をしてた
「何で英語喋れるの？」
「元々それなりにできたンだけど、去年の夏にアメリカ人サーファーがジョニーに会いに一ヶ月うちに宿泊してて、その時に教えてもらった」
「カッコイイな」
俺もそういう機会があったら喋れるようになったかな、でもいらないもんな、英語なんて
「カイは何でそんなに勉強できるの？」
「寝るために一学期に全部頭に叩き込んだ」
「じゃあ何で高校レベルまで知ってるの？」
「勢い余って」
チカは呆れてる、っていうか考えられないみたいな感じの顔をしてる、自分でもビックリだよ、いつの間にか高校の勉強まで
「カイは高校どこ行くの？」
そういえば決めてなかった、行きたい所もないし、高校も行くきも

そこまでなかったし
「ユキとかと同じ所でいいや」
「実はアタシもそこなんだよね」
何となく想像はついたけど、ホントに行くとは
「頭良い学校なの？」
「中堅だよ。カイならもっと良い所行けるだろ」
「チカが行く。それだけの理由で良いだろ」
「サエとは対象的だな」
「何で？」
「サエは学校で人生が決まるって考えだから」
俺的にはその考えも間違っちゃいないと思うけど、悲しいよな、学校を将来への糧としか考えられないなんて、“誰かがいる”それだけでも立派な理由だと思うよ
「チカ」
「何？」
チカが振り向いた時に、触れる程度のキスをした、これだけでもチカの顔は真っ赤になってるし
「何すんだよ！？」
「したかったから。最近してないじゃん」
動かないチカの手を引っ張って、歩き続けた。

あぁ、ヤベェ、どんどんチカにハマっていく俺がいる、会えない時間の方が少ないくらいなのに、会えない時間が苦しい

青とスポーツ大会

この学校にはスポーツ大会ってのがあるらしい、学年で紅白に別れて、得点を競うものらしい
「じゃあ、あみだで決めます！適当に書いて」
フウちゃん、緩すぎるよ、そんでヤル気なさすぎ。
適当にあみだをして決まった、俺は白組、メンバーはウメちゃんにミッチー、負け決定じゃん！
「意義あり！」
「はい、カイ君どうぞ」
「偏り過ぎだと思います！」
必死に訴えたけど、フウちゃんは聞く耳もたず、って感じ
「カイ、何とかなるだろ」
チカが俺の肩に手を乗せてきた
「無理だ！ガキんちょに没落貴族だぞ」
「…ガキ」
「…没落貴族」
二人共運動は出来ない方だから、イタイ、それに比べて、向こうはチカは運動神経が良いし、ダイチは足腰強いし、サエは体力があるほうだし…、負けたな
「フウちゃん、競技は何があるの？」
最後の頼みの綱だった、向こうが苦手なのばっかりくれば
「バスケ、テニス、ビーチバレー」「カイ君、僕がテニスをやるよ」
ミッチーの顔がいつになく自信に溢れてる
「大丈夫なの？」
「テニスなら負ける気がしないよ」
「ならテニスは任した」
「じゃあ、バレーは俺とユメちゃんで」
しょうがない、負ける試合でも全力を尽す、それが男だろ。

大会当日、最初の競技はバスケ、３ｏｎ３、にしても、サエが上手すぎる！俺以外に回ったら速攻とられる
「５２対４９で紅の勝ち」
負けた、見えきってた事だけど
「はぁ、はぁ、死ぬ」
「カイ頑張ったな、ほとんど一人でやってたもんな」
「負けは負けだ、次はミッチーのテニスだからな、今度は勝てる」

ミッチーのテニスだけど…、メチャメチャ上手い、けどダイチも負けず劣らず上手い、チカ曰く二人はテニスのライバルらしい、にしても五分の試合だな、ミッチーの顔も生き生きしてるし
「ミッチーカッコイイな」
「うちの学校部活ないからな、あれば活躍できたのに」
ミッチーの意外な才能発見か、やっと勝負が決まったらしい
「犬柴の勝ち」
あれ、勝っちゃった
「ミッチー！やったな！」
「僕にかかればこれくらい、ティータイム前だよ」
何かずれてるよな、まぁいいか、勝てたんだし。

最後はバレーか、相手はサエとチカ、ユメちゃんと二人で、作戦としては俺がとって、ユメちゃんがトス、で、俺がアタック…、これが付け焼き刃だけど、決まる決まる
「ユメちゃん、これ勝てるかもな」
「勝てる？勝つ！」
ユメちゃん強気発言、もしかしたら、もしかするかも、でも、チカとサエも強い、付け焼き刃のペアじゃキツイくらいだよ
「二人強すぎ」
『このビーチバレークイーンズに喧嘩を売ったのが間違いだったな』

ハモってるし、ってかやっと決着着いたよ
「紅の勝ち」
「負けたー！」
クソォ、惜しかったな、勝てると思ったのに。
無駄に動き過ぎて木陰でのびてると、女の子3人衆が寄ってきた
「大丈夫か？」
「何となく」
「カイ、お疲れ」
「ユメちゃんもお疲れ」
「私達と接戦なんて、やるじゃない」
それだ、この二人の異常な強さ、どこからくるんだよ
「何で二人共そんなに上手いの？」
「この島でアタシとサエにビーチバレーで勝ったペアはいないからね」
ずるいよな、１００％勝てるわけ無いじゃん
「って事は、ユメちゃん！俺等大健闘じゃん！」
ユメちゃんがエッヘンって感じで、首を縦に振った
「もしかして、ユメちゃんとの方が相性良かったりして」
「何、馬鹿な事言ってんだよ！」
“ゴツッ！”
チカの拳が俺の顔面に、あれ？だんだん意識が…。

ココどこだ？白いカーテンに包まれてて、俺はベッドの上に寝てる、しかも何でチカがベッドの隣で泣いてるんだろ
「チカ、どうした？」
「か、カイ…ゴメン」
かなり泣いてるし、ってか俺が謝られる筋合いは…、あるな、チカが殴ったやつか
「別に大丈夫だから、気にするな」
「でも…」

俺が泣かしたのか、情けないな、こんな事でチカを泣かせるなんて
「あれは疲れてたし、熱中症とかでフラフラで、俺が倒れそうになった時にチカが殴っただけだよ」
嘘だけど
「ホントに？」
「ホント」
我ながら最悪の嘘だな、でも、これはセーフティー範囲だろ、チカを慰めるためだから
「で、でもやっ、ぱり…」
また泣き出したよ、やっと治まったと思ったのに。
いつまでたっても、泣き止みそうに無かったから、チカの頭を俺の胸に抱き寄せた
「もう泣くなよ、俺はチカの泣き顔はみたくない、笑顔だけで良いんだ、それにチカに泣かれると、俺も苦しい」
その後暫くの間、チカは俺の胸で泣き続けた

赤が沈む

今日は休日、って事で朝からチカとサーフィン漬けけ、久しぶりに朝からサーフィンをした、いつも学校で午後からサーフィンしてたから、波もそこまで無かったから、体が鈍らないようにするくらいだったけど、今日は本気モードです

「今日は良い波来てるね」

「お先！」

チカがいきなり走って海に出た、長い間まともにやって無かったからしょうがないよな、でも

「少しはストレッチしないと怪我するぞ！」

「大丈夫！そんな馬鹿しないから」

行っちゃった、まぁいいや、チカなら怪我しないだろうし。

俺は軽くストレッチした後、海に出た、久しぶりさだし、今日は良い波があったからいつになくハイテンションだった

「カイ、上手くなったな」

「当たり前だろ、日に日に進化する男だからな」

チカが呆れて顔をしてる

「でも、まだまだだな」

俺は2時間ちょっとしてから、海をでた、でもチカは海に残ってる、ヤル気あるよな

「ほどほどにしろよ」

「大丈夫」

チカが波に乗った時だった、足元をすくわれてボードから落ちた、だから休めって言ったのに

「もう戻って…」

チカがもがいてる、まさかな

「ふざけてないで、早くあがれ！」

反応がない、嘘だろ、考える前に体が動いてた、無心で走って、無心で泳いだ、無心ってよりも考える余裕が無かった。
泳いでて気づいた、だんだん力が無くなってきて、そのうちもがく力も無くなったのか、沈んでいった、多分海の中だから気付かなかったけど、泣いてたと思う。
ついた頃にはボードだけが水中に引っ張られる感じに浮いてた、俺は潜って水中を見ると、チカがコードのせいで逆さまになってた、水面にあがってチカをボードに乗せた
「チカ！チカ！！」
反応がない、息もしてない、死なないでくれよ、チカに死なれたら…、ヤダ、考えたくもない、考えられない。浜に着いてもチカは息をしてない、息してくれよ、頼む、その時頭の中に一つの言葉が浮かんだ
「…ジンコウコキュウ」
否応も無く、気付いたら行動に移してた
「チカ！頼む！……、息してくれよ！……、チカ！」
反応が無い、死んだのか？チカが死んじゃったのかよ？頼むよ、俺ならどうなっても良いから、チカだけは持ってかないでくれよ
「チカァ！！」
「……ゲホッ！ゴホッ！ハァハァ…」
息した
「チカ、分かるか？」
チカが虚な目でコッチを見てる、生きてる、少なくとも生きてる
「か…、カイ？」
「良かった！生きてる」
チカを思いっきり抱きしめた、嬉しかった
「カイ…、痛！」
「どうした？」
「足が…」
チカの足を見ると足首が腫れてた、多分ボードから落ちた時に足首

を捻ったんだと思う
「大丈夫…、じゃないよな。乗れよ」
背中を向けた
「な、何？」
「おぶってやるから医者まで案内しろ」
「大丈夫だよ、立て…、痛」
「無理するな、ほら早く」
渋々背中に乗ってきた。
チカに案内されるがまま医者に行った、中は静かだった
「誰かいないんですか！」
奥から子供が出てきた…、って子供じゃなくてユメちゃん？
「カイ、チカ？」
「ユメちゃん、何でココに？」
「ココ、私の家」
「まぁ、いいや、医者呼んで」
ユメちゃんが奥に入って行った、俺はチカをベンチに下ろして隣に座った
「まだ痛い？」
「少しな」
奥から白衣をきたボサボサのおっさんが出てきた
「どうした？」
「チカの足見てくれよ」
医者はチカの足を見て診察室に連れて行った、俺はチカが出てくるのをベンチに座って待ってた
「チカ、どうしたの？」
ユメちゃんか、ユメちゃんには一通りの事を説明した
「キス、どうだった？」
「キスじゃなくて人工呼吸」
「で、どうだった？」
「子供には分からないよ」

ユメちゃんが膨れ始めた
「子供じゃない」
「ならいつか分かるよ」
チカが足に包帯を巻いて出てきた
「大丈夫か？」
「大丈夫だよ、軽い捻挫だから一日安静にしてれば良くなる」
医者に言われると説得力があるな
「チカ、帰ろう」
「うん、でも…」
「何？」
「松葉杖がないから、頼んだよ君」
松葉杖がない？頼んだよ君？もしかしてまたおぶるのかよ、しかもここからチカの家までかなりあるぞ
「カイ、男の、見せ処」
「しょうがないな、行くぞチカ」
チカを乗せて医者を出た、女の子って軽いな、しかもいつも気にしてなかったけど、胸って案外あるもんだな
「何か変な事考えてるだろ」
「か、考えてねぇよ」
「耳真っ赤だけど」
確かに顔が熱い
「Cだよ」
「馬鹿が！落とすぞ」
チカが後ろでキャイキャイ騒いでるし、鼻血が出そうなのを必死に抑えてる俺がいた
「そういえばボードはどうするんだよ」
「後で俺が取りに行く」
「ありがとう」
後ろでチカが泣いてるのが分かった、怖かっただろうし、辛かったんだろうな

アタシが休んでれば、こんな事にならなかったよな」
「生きてるんだから良いだろ、後の祭り」
「…ありがと」
最近、チカを泣かしてばっかだな、泣かさないって決めたのに、俺って小さいな、好きな人の笑顔も守れないなんて。

チカを守れるようになりたい、チカを泣かせたくない、チカの笑顔を作りたい、チカの側にいたい、それが俺の願い

赤は絶対安静

朝、学校の支度をしてると、チカの家から電話がかかってきた
「もしもし」
「シシキ君？」
チカのお母さんの声だ、何かあったのかな
「そうですけど、チカに何かあったんですか？」
「チカが学校行くって言うのよ」
学校？行けるわけないじゃん、絶対安静なのに、俺も一日休めって言ったのに
「分かりました、今からなだめに行きます」
「ごめんね、シシキ君の言う事なら聞くから」
チカも反抗期か？でも、親まで俺を頼ってくれるんだ、応えない訳にはいかないだろ。

チカの家に着くと、中に入った、よく行くから最近は普通に入って行ってる、親も俺とチカの関係は気付いてると思うし
「チカは今部屋に？」
「うん、行ってあげて」
親はしたに残って俺だけチカの部屋に行った、自分の娘を男と二人きりにさせるのも変だよな。
扉を開けるとチカは怒ってた
「カイが何と言おうが、アタシは学校行くからな」「無理だろ、絶対安静の意味分かるだろ」
「でも…」
チカが膨れ始めた、チカに近寄って子供をあやすような感じで話した
「悪化するからやめとけ、一日だけ我慢しろ、な」
「ヤダ、学校行きたい」
ガキか、コイツは、しかもここまで学校行きたい中学生もいないぞ

「あんまり駄だこねると、喋れないようにするぞ」
「どうやっ…」
うるさいから、俺の唇でチカの唇を塞いだ、技ありってか、顔を真っ赤にして黙った、作戦成功
「ほら、黙った。メールしてやるから家にいろ」
無言でチカが頷いた、チカの頭をクシャクシャにして家を出た。

一時間目体育、終わって携帯を見た
“新着メール１０件”
「うわっ！」
迷惑メールばりに、チカからメールが来てた
“今何の授業？”
“ねぇ、メール返せよ”
“早く返信しろ”
などなど、俺はすぐにメールを返した
“ゴメン、ゴメン。体育で返せなかった”
そう送って、制服に着替えて机に伏した。

あぁ、グラグラする
「カイ、起きろ、移動教室だぞ」
ダイチか、今は3時間目、丸々一時間寝てたのか、ふと携帯が気になった
“新着メール２０件
着信１４件”
「えぇ！？」
思わず叫んじゃった、ダイチが隣で跳ねたのが何となく分かった
「何だよカイ？」
「何でもない、先に行ってて」
ダイチを先に行かして、チカに電話した、これ以上こられたら迷惑だし

「チカ悪い！爆睡してた」
「も、もうやだぁ、今から学校行く！」
うわぁ、泣いてるよ、しかも号泣、これ以上ほっといたらホントに学校くるかもな
「分かった、今から行くから待ってろ」
「ほ、ホントに？」
「あぁ、だから大人しく待ってろ」
「わがっだ」
ガキが親に怒られて泣いてるみたいだな。
俺はとりあえず職員室に行って、フウちゃんに断っといた
「フウちゃん、調子悪いから帰る」
「大丈夫！？」
そこまで慌てる事じゃないだろ、でも教師生活初めての早退だから驚くのかな
「熱っぽいから、長引かないように早退するだけだから」
「気を付けてね」
「分かった、バイバイ」
そういって走って職員室を出た、熱出してる設定なのに、全力疾走で。

チカの家に着いた時は息もあがってた、この時期、民衆もやってないからチカの親はこの時間帯は、チカのお父さんが漁から帰ってくる時間だから、母親は手伝いでいなくなるらしい、だから家にはチカだけだった
「大丈夫か？」
扉を開けて部屋に入ると、クシャクシャな顔になって泣いてるチカがいた
「カァ～イィ～！」
入るや否や、チカが飛び付いてきた、足は大丈夫なのかな
「うわ、何だよチカ」

「カイの嘘つき、メール返してくれないじゃん」
「悪かった、今日はココにずっといるから」
「ホント？」
「ホントだ」
チカのクシャクシャになった顔を、ティッシュで拭いた、流石にひどかった、でもここまでチカがもろいとは思わなかった
「これくらいで泣くなよ」
「だって、不安でしょうがないんだもん」
何か傷心したチカって、女の子って感じで、悪くないな
「ガキじゃないんだから、一人で留守番くらいしろよ」
「カイに会えないのが不安なんだよ！」
ドキッとした、チカにあんまりこんな事を言われた事が無かったから、何か嬉しいな
「でも、今日だけは安静にしてろよ」
「カイが側にいれば、何時まででも安静にしてるよ」
チカが肩に頭を乗せてきた、しかもいつの間にか泣き止んでるし、喜怒哀楽の起伏が激しいな
「何か、良いように使われてるな」
「そんな事無いよ」
チカが楽しそうだしいいか、俺も満更でもないし
「カイ、コッチ見て」
「何…！」
チカの方を見ると、唇に何かが当たった、チカの唇？一瞬だったけど、始めてチカからキスをしてきた
「たまにはアタシからやらないとな」
顔を真っ赤にしながらそっぽを向いてる、いつもコッチからだったから、新鮮でいいや
「……」
「な、何か言えよ」
「ん？あ、あぁ、え～と、そのぉ、何だ」

何テンパってんだよ、始めてじゃないだろ、今までにも何回キスした事あるだろ、なのに何で言葉が出てこない
「何だよ」
「あまりに、急だったから」
「いつもカイがやってる事だろ」
確かに、俺って案外心臓に悪いな、心臓がうるさくて頭が痛い、顔も熱いし
「急には良くないな」
「でもアタシは好きだよ、キスの後のドキドキ」
「俺も」
好きな人にキスされるのって、自分からするのとはまた違った味って事を始めて知った

青と夢現

昼休み、教室の端でチカと二人でいつものように弁当を食ってる、最近は単調でなんとなくつまんないな、変わったところを強いてあげるとしたら、ダイチが頻繁にフウちゃんの所に行くくらいだな

「今日もダイチいないな」

「勉強熱心だな」

「アタシの勘からいくと、フウちゃんに惚れてるねあれは」

女の勘ってやつか、チカもなかなかだな、ダイチのためにも確信まで言わないつもりだけど。

いつも通りにチカと飯を食って、ミッチーは紅茶飲みながらたそがれて、ユメちゃんは人形作って、サエは勉強して、いつも通りに終わるはずだった、でも新キャラ登場

「ユメ！」

誰だこのガキ、子供みたいな無邪気な笑顔、チカより長い髪の毛、母性本能をＭＡＸくすぐるタイプだな

「現ちゃん」

ゲンちゃん？兄弟、ではなさそうだな

「チカ、あのガキ誰？」

「ゲンちゃん、ユメちゃんの一個下の幼馴染み」

そういう事、ユメちゃんがガキっぽいからお似合いだな

「ユメ、今暇？」

「いや、人形…」

「暇だね！ちょっと来て」

手を引っ張って無理矢理連れてっちゃった、二人ともちっちゃいな、何かカワイイな、これは子供を見る目であって、女の子としてではないから

「ユメちゃんの彼氏なの？」

「違うんじゃない、いつも強引にゲンちゃんがユメちゃんを連れ回

してるだけだよ」
ってかゲンだよな…
「サエ、ゲンって子の名前書ける？」
「書けるけど」
「黒板に書いて」
サエが目で勉強を邪魔するなと訴えて来たけど、気になったら自己チューな俺なので
「はい」
“百合野現”
「ユリノゲン？」
「そう」
「ビンゴ！」
この二人やっぱりお似合い！二人で一対か
「何が？」
「気付かないの？」
「うん」
「サエは分かるだろ」
またかよ、って目で見てきた
「馬鹿にしないで」「悪いけど、今度はユメちゃんの名前、黒板に書いて」
かなり怒ってる、勉強くらいいつでも出来るだろうに
「書いたよ、後は自分でやって」
「ありがとね」
やっぱり、名前を並べると、楽しい名前だな
「まだ分からない」
「…あぁ！ユメウツツ！」
そう、夢現、対象的な言葉だけど、一つの熟語、ユメちゃんとゲンの性格もそんな感じ
「サエ、何でこうなったか知ってる？」
「あぁ、もう！」

キレた、でもこっち来た、ピリピリしてるね、案外この状況を楽しんでたりする俺
「勉強は良いの？」
「集中できないし」
確かに、まぁいいや、ユメちゃん事情に詳しいサエなら、いろいろ知ってるだろ
「ユメちゃんとゲンの名前、何か意味あるの？」
「あるよ。もともと親同士が友達で、先にユメが産まれて、その後にゲンが産まれたの、それでお前の所が夢ならこっちは現だ、みたいな感じ、でもウツツ君ってキモイでしょ」
確かに、ウツツって友達になりたくないな
「だから現」
「ゲンって可哀想だな」
「そう？」
「ユメちゃんありきのゲンだろ、何か親の遊びに一生かけて付き合わされてるみたいじゃん」
二人とも頷いてる、よくまともに育ったよな、それをコンプレックスとも思ってないみたいだし。

チカを家に送って、気分で散歩をして帰る途中だった、前の方に子供…、じゃなくてユメちゃんとゲンか、何か話てる、ってかあれ？ユメちゃんが走ってどっか行っちゃった、ゲンは動かない。
近寄って、ゲンに話かけた
「どうした？」
「誰？」
涙目の上目使い、大概はこれで惚れるだろうな、これが自然体なんだから凄いよな
「ユメちゃんの友達、お前は幼馴染みのゲンだよな」
「そうだよ」
「どうしたの？」

「告白した」
告白か、ユメちゃんの事好きだったんだ、でもユメちゃんが逃げたって事は…
「フラレたの？」
「無言で逃げちゃった」
「どうするの？」
「待つよ」
ガキっぽく見えても、中身はしっかりしてるな、問題はユメちゃんか
「ユメちゃんと話してきていい？」
「何で僕に了承をとるの？」
「だって、ゲンの好きな人だ、迂濶に手を出せないだろ」
「わかんないけど、お願いします」
「どこにいるか分かるか？」
「多分公園」
俺はゲンを置いて公園に向かった、ゲンの初恋、叶えないとな。

公園で、ユメちゃんはベンチに座って、人形と話してた
「ユメちゃん、ちょっといい？」
「カイ、どうしたの？」
ユメちゃんはいつもと変わらない、冷静というか受け止められないというか
「ゲンから聞いたよ」
「で、何？」
「ユメちゃんはどうなの？」
下を向いて考えてる、こんな事は始めてだろうからな
“ユメちゃんは嬉しいんですよ”
ゴルゴネスか、これなら話してくれるだろ
「じゃあ何で、ユメちゃんは逃げたの？」
“ビックリして、訳が分からなくなって逃げちゃったんですって”
やっぱり

「ユメちゃんはゲンの事好きなの？」
“す、好きだと思います”
「付き合うつもりは？」
“あるらしいんですけど、逃げちゃったし、どう応えたら良いか分からないんですって”
「分かった、じゃあ本人同士で話してもらうか」
「えっ？」
「ゲン！出てこいよ！」
“ガサガサ！”
植え込みの中からゲンが出てきた、隠れるのが下手くそだな
「何で分かったの？」
「ずっと着いてきてたから」
「ゲンちゃん…」
「じゃあ俺帰るから」
俺はその場から離れた、後は二人とゴルゴネスがどうにかしてくれるだろ、俺もそこまで干渉するつもりもないし、邪魔だろ。

夜、ユキがいなくなって寂しい部屋で音楽を聞いてるとおかぁが入ってきた
「カイ、友達が来てるよ」
「下にいる？」
「うん」
下に降りるとゲンがいた、心なしか最高の笑顔をしてる、野次馬魂が結果を教えろとうるさい
「何？」
「カイさん、ありがとう！ユメ、付き合ってくれるって」
「良かったじゃん、ユメちゃんを泣かせるなよ」
ゲンの顔が曇ってきた、何か悪い事でも言っちゃったかな
「その事なんだけどぉ…」
「どうした？」

「僕、こんな小さいし、ユメを守るってより、守られる事の方が多いいんだよね」
それは悩むな、でも、コイツ何か履き違えてるな
「ゲン、力だけが守る事じゃないぞ、相手の笑顔を守る事が一番大事だからな、分かったか？」
「うん！頑張る」
柄にもなく、他人に自分の思想を押し付けてるし、少なくとも俺はそれが守る事だと思ってるけど
「頑張れよ、一応応援してるよ」
「カイさんとチカさんよりも絶対に幸せになるから」
「それは無理だ」
笑って帰って行った、ユメちゃんもガキじゃなくなったのか、明日はからかってやろ

青と動物

最近ユメちゃんの恋で何となくクラスが騒がしくなった、その理由は頻繁にゲンがうちのクラスに来るからだ、昼休みはとりあえず扉を思いっきり開けて
「ユメ！一緒にご飯食べよ！」
ユメちゃんのその時の笑顔がチカが俺に見せる笑顔に似てる、ユメちゃんも恋してるんだな
「ミッチー、あれどう思う？」
「若き乙女と少年の恋、見てて美しいじゃないですか」
ミッチーはいつもたそがれてるけど、何見てるんだろ
「ミッチーはいつも何見てんの？」
「知りたいですか？」
「別に」
飲んでた紅茶を噴いてる、ベタなリアクションありがとう
「聞いて下さいよ」
「分かった分かった、で、何で？」
ミッチーの顔が変わった、爽やかなのが何か悔しい
「鳥を見てるんです」
「鳥？」
「はい、後はたまに森から出てくる動物とかも」
やっぱり不思議なやつ、紅茶のお供になるようなものか、海とかなら納得出来るけど、でも今のミッチーの目、カッコイイな
「動物好きなの？」
「好き？そんな優しいものじゃありません、動物達は僕の全てです」
「女の子寄って来ないよ」
「興味ありませんから」
何か一概にホモとも言えないかもな、俺も動物は好きだけど、全てとは言えないよ

「何か飼ってるの？」
「カイ、ミッチーの動物好きは果てしないぞ、家が動物園だからな」
「マジで？」
「見てみます？」
うわぁ、気になる、ムツゴ●ウさんみたいな感じなのかな
「行く、いざムツ●ロウハウスへ」
「あんな老いぼれと一緒にしないでください！」
十分ミッチーも変な奴だけどな、でもチカが動物園って言うくらいの家って、デカイのかな、それとも普通の一軒家で動物が占拠してる状態とか。

ミッチーの家は前者だった、無茶苦茶デカイ、大豪邸、英語でいうとマンション、しかも外からでも分かる動物達
「スゴ」
「入ってください」
「入ってくださいって、門の前犬だらけだぞ」
ミッチーが来た途端に犬が集まってきた、ざっと5・6匹はいるな、門を開けたら全部出てきそう
「大丈夫なの？開けて」
「大丈夫です」
門開けた途端案の定、総突進、と思いきやミッチーの周りに群がってるし、相当なついてるな
「行きましょう」
「あ、うん」
にしても高そうな犬ばっか、毛並も綺麗だし、健康そうだし
「この犬達、元気だな」
「僕が世話してますから」
「トリミングとかも？」
「はい、健康管理も容姿とかも全て僕が」
スゲェ、普通ここまでやる飼い主もいないよな、相当好きなんだろ

うな
「何で自分でやってるの？こんだけ金持ちなら、トリマーとかにやってもらえば良いじゃん」
「それじゃあ、意味が無いんです」
話ながら歩いてたから分からなかったけど、家まで長い、随分歩いてるぞ
「何で？」
「あ、ここです、どうぞ」
家の玄関もデカイ、尚更気になる、ミッチーなら任せそうなきもするけどな
「おじゃまします」
「上がって突き当たりが僕の部屋です、すぐ分かりますからそこで待ってて下さい」
上がって突き当たりか
“穂”
札がかかってる、確かに分かりやすい、中に入ってビックリした、デッカイインコがいる、喋らないけど、人なつっこくてカワイイ
「それは、僕のお気に入りです」
「いつの間に！名前は何ていうの？」
「ニルギリです」
ミッチーらしいな、紅茶と動物を愛するお坊っちゃんか
「さっきの話だけど、何で自分でやる必要があるの？」
「自分の子供みたいなものですから、他人に渡せないみたいな意地があるんですよ」
ミッチーもこんな感じだけど、男っぽい所があるんだよな
「将来はその関係の仕事をやるの？」
「当然です」
ミッチーとそんな話をしてると、一人の少し年上の女の子が入ってきた
「穂さん、お菓子持ってきました」

カワイイな、おしとやかな感じ、この子が入ってきた途端、ミッチーがおどおどし始めた
「ミッチー、兄弟？この子」
「ち、違います、お手伝いさんの娘さんです」
ふ～ん、何となく読めてきた、ミッチーも男って事か
「名前何ていうの？」
「小乃美（コノミ）です」
「コノミさんはそんな事しなくても良いですよ」
「いや、でも…」
二人とも鈍感と、人の事言えた口じゃないけど、でも取り持ってやらない訳にはいかないだろ
「コノミちゃん、一緒に話そうよ」
『いや、でも』
この二人ホントに楽しい、知ってか知らずか、初な恋しすぎ
「俺がいて欲しいから、良いでしょ？」
「でも穂さんが」
「穂さん？カタイカタイ、ミッチーで良いじゃん、二人は友達なんだろ？」
「友達なんて！」
そんなにビックリする事か、ミッチーならそんなんで怒るとは思えないし
「良いよな、ミッチー？」
「僕は大歓迎です」
「ホントに良いんですか！？」
本当はコノミちゃんだってミッチーと仲良くしたいはずだ、でもミッチーの立場のせいで普通に接する事ができなかったんだろうな
「良いですよ」
「それと、友達なんだからもっと砕けて話そうよ。コノミちゃんの親が何やっててもコノミちゃんとミッチーには関係ないだろ」
「そうですね、コノミさん、普通に接して下さい」

二人とも顔真っ赤、こういう恋も見てて楽しいな。

その後3人で普通の会話をした、コノミちゃんもミッチーと普通に話せるようになったし、ミッチーも生き生きしてるし

「俺帰るから」

「もう帰っちゃうんですか」

「だって邪魔だろ、二人の方が良さそうだし」

そういって部屋を出た、ミッチーとコノミちゃんが玄関まで送ってくれた

「ミッチーまた明日」

「はい」

家を出るとコノミちゃんが走って来た

「どうした？」

「ありがとうございます！」

「何が？」

「ミッチーと話せて、私嬉しかった」

「積極的に行けよ、ミッチーは鈍感だから」

「はい！」

元気だな、この二人なら楽しくやってくれるだろ、ミッチーも優しいし、コノミちゃんは元気だし。

ミッチーって、そこらへんの奴より男らしいかもな

青と勉強会

時間が流れるの早いな、東京にいる時は一秒すら遅く感じたのに、ココは一週間すら早く感じるよ、もう期末テストじゃん、今日からまた先生の日々だよ、これはこれで楽しくて良いんだけど
「今日はこれにて終了」
みんな頑張ってんな、ミッチーは前とは段違いに頭が良くなってるし
「ミッチー、いつの間にできるようになったの？」
「コノミさんの家庭教師のお陰です」
「コノミちゃんっていくつなの？」
学校も行ってない感じだし、若干俺らよりも年上に感じられるし
「１６歳です」
「学校は？」
「家の事情で行けないそうです」
あんな元気だけど可哀想だな、住み込みで親が仕事して母子家庭らしい
「カイ、今日空いてる？」
「空いてるけど」
「勉強付き合ってよ」
「分かった」
サエにはあれからたまに勉強を教えてる、サエにはもう教える事がないくらいだけど、で、チカを帰らせるのが一苦労なんだよな
「チカ、悪いけど先に帰ってて」
「また？サエに優し過ぎない？」
いつもこれだ、ただサエに勉強教えるだけなのに、何か勘違いしてんだよな
「そうじゃなくて…、な、別に来ても良いけどもたなかっただろ」
前に一回、サエに教える時にチカが来たけど、３０分もいられなかった、だから誘っても来ないんだよな

「勉強だけだからな！」
「分かってるって」
何とかチカを帰して図書室に向かった、毎度の事ながら、これで半分くらいエネルギー使うからな
「悪い悪い、待った？」
「全然」
何かカップルの待ち合わせの一コマみたいだな
「今日は何？」
「化学。ココなんだけど」
「これね、これは…」
あらかた説明し終わった、サエに勉強は必要なのかな、俺が言った事も把握してるっぽいし、サエなら一人でもできそうなんだけどな
「カイ、いつもありがとう」
「別にいいよ、暇だし」
チカを無理矢理帰すのが一苦労なだけだから
「カイは何であんな高校行くの？」
「チカがいるし、ユキもマミ姉もいるから」
「そんな理由で？」
サエからしたらそんな問題かもな
「理由なんてそんくらいで十分だろ」
サエは理解できないっていうか、呆れてるみたいな顔をしてる
「もったいないよ、カイならもっと良い学校に行けるよ」
「そんなに高校って大事か？」
「大事だよ」
何か必死だな、サエは学歴が全てって感じだからな
「何で？」
「だって偏差値が高い学校に行った方が、将来につながるでしょ」
「別に高校行かなくても成功してる人はいるし、どんだけ良い大学行っても、就職できない奴もいる、一概に良い学校行けば良いって

もんじゃないんじゃないでしょ」
サエの言ってる事も一理ある、でも俺はサエの考えで高校は決められない
「カイは何でそんなに自信がもてるの？」
「自信？何で？」だんだんサエが不安そうな顔になっていく
「だって将来の事考えた事ないんでしょ？」
「無いね」
「私は怖い、自分に自信がないからかもしれないけど、将来ダメな大人になりたくない」
「俺は高校を一時の恋で決めて、将来の事なんかこれっぽっちも考えてないから？」
サエは無言で頷いた、確かにそうかも知れないけど、俺は今を大切にしたい、ヘタレ発言かもしれないけど、将来の事を考えて今のチカを手放したくない
「俺は俺の考えをサエに押し付ける気はない。でも、サエの考えを鵜呑みにする事も出来ない、分かるだろ？」
またサエが無言で頷いた
「お互いがお互いの道を信じる、それで良いだろ？」
「最後に聞かして、チカのタメに死ねる？」
何で急にサエはそんな事聞くんだろ、変な奴
「死なない。チカを一人にしない、でもチカを死なせない」
「それ、答えになってない」「でも誰かのタメに死ぬのが＝その人の幸せになるとは思わない、少なくとも俺は嫌だ」
「でも、もし…」
「腕が千切れようが、足がなくなろうが、俺はチカのタメに生きるよ」
実際こんな事は無いと思うけど、俺はそれくらいの覚悟はある、ミナみたいにはさせない
「チカが羨ましい」
「何で？」

サエの顔が変わった
「だって、私にもその愛が欲しい」
「どういう意味？」
何言ってんの、全然理解できない、でも良くない気がする
「鈍感、私、カイの事が好きなんだよ」
「え…」
「私、カイの事、大好き、チカから奪いたいくらいに」
サエが、叶わない恋って、俺に？チカから奪いたい？チカは友達だろ？
「俺にはチカがいる、だからサエには悪いけど、俺はチカしか見えない」
「チカの次でも良い、カイの側にいたいの」
「無理だ、サエは友達、それ以上でもそれ以下でもない」
「でも！カイが好…」
「サエ！」サエが話てる横から怒鳴っちゃったよ、でも、サエとの関係を壊したくなかった
「分かってくれよ、チカを裏切れない」
「何でチカより先に、カイと出会えなかったんだろう」
サエがぽろぽろ泣き始めた、でも、俺がここでサエを受け入れたら、全てを裏切る事になる
「最初にサエに会ったら、サエとこうして話してすらいないよ」
「全部チカのお陰って事？」
「そう」
笑顔で泣いてる、胸が痛む、苦しい、でも、今甘えたら一生後悔する、だからサエを泣かせるしかない、最悪だな俺
「チカに負けたんだ、チカのどこに私は負けたの？」
「分からないんだ、不思議な奴だよ、女らしくないし、口は悪いし、でもチカじゃなきゃ駄目なんだ」
サエが呆れてる、告白した相手に自分の彼女の自慢されたらな
「じゃあチカには絶対負けない」

「だから、サエとは…」
サエが思いっきり笑った、サエのこんな笑顔を始めてみた
「カイより、もっと良い男を見つけて、最高の恋をするから」
やっぱりサエは強いや
「応援してるよ」
サエの笑顔、悲しいはずなのに、笑ってる、強いな、空元気かどうかは分からないけど、俺はサエが最高の恋をできるように願うだけ。

チカにこの事は言えなかった、サエとチカのタメにも、無知なのは可哀想だけど、知らない方が良いこともあるよな

青の計画

「おはよう」
「ん？おはよ」
サエから挨拶してきた、しかも笑って、俺が言うのもなんだけど、ふっきれたのかな、昨日の事は俺とサエの秘密、ってか誰にも言えないよな、サエのタメにも、俺のタメにも
「サエが、笑ってる」
ユメちゃん鋭い、いつも一緒にいるから変化に気付くのは当たり前かな
「そう？」
「うん」
サエあからさま過ぎるよ
「みんなそろそろ座って」
フウちゃん、いつもの事ながら影薄すぎ
「フウちゃんおはよ！」
最近ダイチとフウちゃんの話す時間が長くなったような気がする、休み時間は教室にいないし、廊下で会ったら永遠と話してるし、二人の話題が出るのも少なくない。

今日の昼休みはダイチの話題で盛り上がった、主に俺とチカを中心に
「ダイチってフウちゃんの事好きなんだろ？」
「何で俺に聞くの？」
「悩みとか相談とかは、全部カイに話してるじゃん」
「想像にお任せします」
こういう時はポーカーフェイスで、バレてるから良いんだけど、俺の口から言うのは良くないな
「サエはどう思う？」
「あれは完全に恋してるよ」

サエもこういう話しに参加するようになってきた
「やっぱりサエもそう思うよな」
「恋を否定する方が無理があるよ」
俺もそう思う
「叶わぬ、儚い恋」
ユメちゃん、ダイチが可哀想過ぎるし、知らなかったとはいえ、サエの前でそれは
「ユメ、叶わない恋もいいもんだよ」
「サエ、変な事言うね」
サエが笑った、引きずってなくて良かった、しかも前より笑ってるし
「僕には理解できないですね」
ミッチーもこういう話しに興味があるんだ、たそがれ貴族でも恋はするもんな
「何で？コノミちゃんも十分無理な恋してたじゃん」
「か、カイさん！その話しは」
「ミッチー、コノミちゃんとそんな仲だったんだ」
あ、軽くミスった、まぁ良いか、ミッチーには口止されてないし、と屁理屈を言ってみたりする
「まぁ、その話はおいといて。相手は担任ですよ」
「でも８つ上ってのもありだろ」
「カイさんは分かってません、僕達は教師からしたら“お客さん”ですよ」
「お店でナンパして結婚って人もいるじゃん」
「でも…」
俺の勝ち
「でも、ダイチも自分の置かれてる状況を分かってると思うよ、でも好きなんだからしょうがないだろ、気持ちを抑えるなら砕けた方がマシだと思ったんだと思うよ」
「砕けるつもりは無いけどね」
声の主を探すと、そこにはダイチが立ってた

「ダイチ、いたんなら言えよ」
「いや、言えないだろ」
「どこから聞いてた」
「ミッチーとカイのお話から」
なんかダイチに遠慮しちゃうな、悪い事したよな、人を話の種にして
「大丈夫だよ、気にしてないから」
「じゃあ心おきなく事情聴取といくか、なぁチカ」
「当然」
ダイチがしまったって感じの顔をしてる、俺らに許したのが運の尽きだったな
「フウちゃんとはどこまで行った？」
「どこまでって、一緒に帰ってるくらいだよ」
案外大胆なこと、フウちゃんの事だから良い生徒って思ってるだけだと思うけど
「メアドは？」
「勉強の相談って名目で、ゲットした」
「やるじゃん」
「じゃあ、家への潜入は？」
「カイ、潜入って…」
流石にダイチでもここまで行ってないだろ、ってか無理だろ
「あえて休みの時に分からないところがあるって言って、潜入成功！」
『えぇぇ！』
一同目が点、ダイチ、凄すぎるよ、俺でもそこまで積極的にいく自信は無いよ、それにフウちゃんもおかしいと思えよ
「じゃあ、コクった？」
「いいや。流石にフウちゃんも教師だよ、聞いたら生徒との恋愛はご法度だって」
どうやって聞き出したんだよ、ある意味テクニシャンだな、普通の女の子に恋してたら付き合えたのに

「じゃあどうするの？」
「卒業したら告白する」
「よっしゃ！みんなで全面バックアップしようよ！」
各々反応は違うけど、みんな乗り気だよ、こんだけのメンバーが揃えば百人力だな、でもこの調子でいくとダイチに手助けはいらなそうだな
「じゃあ来るクリスマスからだ」
「もうそんな時期か」
ダイチ、恋するヒューマンならこれくらい考えてくれよ、でも、もうそんな時期か
「クリスマスはミッチーの家で盛大にパーティーね」
「良いですよ」
ミッチーの家でパーティーって、軽くミスったな、いくらなんでもデカ過ぎるな
「だからフウちゃんを誘うのはミッチー&サエ」
「何で私が入ってるのよ？」
「ミッチーだけじゃ不安だから」
一同納得、俺が言っときながらミッチー、可哀想だな
「ユメちゃんは飾り付け、これはチカとコノミちゃんとゲンに手伝って貰え」
「ゲンちゃん、呼ぶの？」
「コノミさんは関係ないです」
「クリスマスはダイチだけのものじゃないだろ」
家がデカイし、人数が少ないよりかは多い方が楽しいだろ、そんで最後のシメで
「で、ダイチだけど」
「俺もやるの？」
「当たり前だろ。ダイチはクリスマスケーキ作り」
「俺出来ないよ」
そんなの分かってるし、出来る方が凄いって

「俺が教えてやるから作れ」
「しょうがないな」
「あと俺の料理補助」
「カイさん、料理はこちらで用意しますから」
「ありがたいけどさ、やっぱり手作り感が必要でしょ」
「カイさんがそこまで言うなら頼みます」
クリスマスの予定が出来たことだし
「じゃあ、期末テスト頑張って」
サエ以外地に落ちた、期末テストを頑張んないとクリスマスは楽しめないし、あくまでも受験生だからな。
チカのプレゼントどうするかな

青と買い物

期末テストは一部の例外を除いては点数が上がってる、一部の例外は俺とサエ、理由は言うまでもないだろ。
俺はダイチから有力情報を手に入れた、１２月２５日はチカの誕生日という事を、クリスマスプレゼントは決まったけど、誕生日プレゼントが決まらない
「カイ、何悩んでるの？」
ダイチか、そういえば今度一緒にプレゼント買いに行くんだった
「誕生日プレゼントの事」
「クリスマスのと一緒で良いんじゃない」
「良くないし、チカが良いって言っても、俺が良くない」
まぁ、良いや、むこうに行ってから決めるか。

下校途中、ミッション１・チカの指のサイズを聞き出せ、これは普通に図る紙みたいなやつと俺の頭を使えば簡単な事だ
「チカ、俺らの相性みてみない？」
「相性って？」
「男の小指と女の薬指、サイズが近ければ近いほど、相性がいいんだって」
実際のところは分かんないけど
「へぇ～、じゃあはい」
よし、怪しまれずに指のサイズ入手！
「おっ！俺と変わんね、相性抜群だな俺達」
「当たり前だろ」
チカは本当の理由を知らないままクリスマスを迎える事になりそうだな、そう、クリスマスプレゼントはペアリング、ベタだけどこれしか思い浮かばなかった、問題は誕生日の方だよ、明日東京に行くし、その時に考えるか。

プレゼント購入当日、ダイチの付添いという名目で東京へ、珍しい事にチカがすんなり分かってくれた
「フウちゃんはどんなので喜ぶと思う？」
「俺に聞くな、ダイチがこれだって思った物で良いんだよ、臭いかもしれないけど、プレゼントは心だろ」
ダイチがニタニタしてる、俺だってこんな臭い事言いたくないんだよ
「確かに臭いけど、ごもっともだよ」
クリスマスをこんなに意気込んでるなんて始めてだよ、他人にこんなにアドバイスするのも始めてだし、何をプレゼントを悩むのも始めて、クリスマスなんて有っても無くても同じようなものだと思ってたけど、クリスマスってうまく言えないけど最高のイベントだよ。

東京はクリスマスという事を除いては、何一つ変わらなかった、人は忙しいし、街は落ち着かない
「スゲェな、始めて来たけど目が回りそうだよ」
「呑まれるなよ、マイペースに周りを気にするな、疲れるだけだぞ」
時既に遅し、完璧呑まれてるよ、まぁ良いか、ダイチに難しい事言っても無理か
「とりあえず、あのアクセサリーショップ行こう」
近くにあったお店に行く事にした、待ち合わせの時間まで少し時間があったからとりあえず東京に慣れてもらう事にした
「どう？イメージ浮かんだ？」
「何となくね。フウちゃんっていつも髪留めてるだろ」
あんまり注意して見てなかったから見逃してたけど、言われてみるとしてたな
「よく見てるな」
「まぁね。で、髪留めあたりを買おうかな、なんて」
「良いんじゃない、いつでも使えるものだし」
案外まともに考えてるじゃん

「じゃあ次行くか、他に人がいるからソイツが来たら本格的に買うから」
「分かった」

いろいろダイチに東京を案内しながら、俺もチカへのプレゼントのイメージを固めていった、ダイチも空気に慣れてきたらしいし
「にしても、東京の空気、マズイな」
「そんなの今に始まった話じゃないよ」
自然に囲まれて、良い空気の中にいたら、東京に来て息苦しいのは誰でも同じだよ、俺も空気の悪さを感じてたし
「もう時間だから、待ち合わせ場所に行くから」
「うん、誰が来るの？」
「多分知ってるよ」
俺は、待ち合わせをしてる喫茶店みたいな所に行った、薄暗くてモダンな感じのお洒落な内装だ、待ち人の指定でココになった
「アイツもお洒落な所知ってるな」
「男？女？」
「男だよ」
待ち合わせ時間まで時間があるから、ポテトとかをつまみながら、話をして時間を潰した。

ってか、時間過ぎてるし

白との再開

遅い、アイツは何してんだよ、時間くらい守れよ、色んなところが緩いけど、時間までルーズだとは、そんな事を考えてると店のドアが思いっきり開いた、そこにいたのは息を切らした白い短髪のデカイ男だった

「遅過ぎる！もう少し早く来い、マミ姉に嫌われるぞ」

「ゴメン、マミを納得させるのに時間がかかってさぁ」

「…ユキさん？」

待ち人とはユキの事、ユキもマミ姉に送り物をするらしく、一緒に買いに行く事になった

「ダイチもいるんだぁ」

「どうも久しぶりです」

そっかダイチにとっては先輩だもんな、なんかユキが先輩って楽しいな

「何でダイチがいるのぉ？」

「先生に恋して、その恋を掴むため」

ユキのヘラヘラ顔、久しぶりだけどいつも見ていたみたいだ

「ダイチもギャンブラーだねぇ」

「いやいや」

この二人のやり取りは、何か新鮮だな、チカは人一倍ユキに口が悪かったから、周りに先輩扱いする人がいなかったもんな

「ユキはまだ飯食ってないだろ」

「食べてないよぉ」

「俺とダイチも食べてないから食べてから行こう」

「分かったぁ」

ダイチはオムライス、ユキはミートソース、俺はピザを頼んだ、ユキの学校での話と俺らの話で盛り上がった、ユキの周りに女の子が集まってマミ姉の目が怖いとか、マミ姉は告白をしょっちゅうされ

てるとか
「二人とも凄いですね」
「疲れるだけだよぉ」
女の子から逃げるのと、マミ姉の悪魔と闘うのがだろ
「ダイチはフウちゃんがいるもんな」
「フウちゃん一直線！みたいな」
「そんなにカワイイのぉ、その先生はぁ？」
「おっとり系、男からしたら守りたいタイプかな」
「マミとは正反対だなぁ」
確かに、マミ姉が守るって感じだもんな、ってかユキは尻にひかれるタイプだし
「てかさぁ、カイ、髪伸びたよなぁ」
「そうかもな、あんまり切ってないし」
めんどくさいから、たまに気になった所を切るくらいだったからかなり伸びたな
「ユキも、雰囲気変わったよ」
「分かったぁ？いつもと変えてみたんだぁ」
「二人とも少ししか一緒にいなかったのに、お互いの事よく分かってるよね」
『兄弟だもん』
短い期間だろうが、血が繋がって無かろうが、兄弟だからな、ユキとは信頼関係ってやつ
「二人ともホントに面白い」
「どこが？」
「雰囲気」
「そうかぁ？」
嬉しかった、兄弟なんていなかったし、他人に認められる事でホントの兄弟になれたような気がした
「もうそろそろ行くか」
案外時間が過ぎるのが早かった、男だけで話すのが久しぶりだった

からかもしれない。
店を出て煩い街を、アクセサリーを探して歩き始めた、今になって気付いたけど寒っ！もう冬だよ、クリスマス前だもんな、上着が必須の季節だな
「どこかあるぅ？」
「とりあえず俺が行きたい所があるんだけど」
ダイチが先に動きだした、やっぱり一番マジなのはダイチだよな、俺とユキは出来てるからな
「ココ？」
「うん」
ユキが来る前に回ったうちの一つだった、アジアンっぽい所で、アクセサリー全般を取り扱ってるお店だ
「決めてあるの？」
「これとかどう思う」
「ダイチにしては良い趣味してるねぇ」
確かに、ダイチにしては良い物選んでる、ココまで先生にマジで恋してるなんてドラマみたいだよな
「じゃあこれに決めた」
即決、悩んでたらキリがないし、なんかダイチっぽくて良いよ。
店を出て俺が見つけた良い店に行った、ダイチのためだけに来たんじゃないしな
「俺はココ」
「高そうだなぁ」
「そうでも無いよ」
高そうに見えて、案外お手頃なお店、しかも俺の好みときた、探してもこんな店は見付かんないよ、この店の1万円のリングが気になってた、中学生にはイタイ値段だけど、捨てられた時のお金を使って良いって言われたから、少しは高めの物も買える、おとぉとおかぁに感謝だな

「じゃあこれにしよ」
「高いなぁ」
「あん時の金があるから」
ユキ納得
「ユキも使う？」
「いいよぉ、バイトしてるしぃ」
初耳だった、ユキがバイトしてるなんて、めんどくさいから掘り下げないようにしたけど。
俺の用事も半分済まして、ユキの目的地に向かった
「どこらへんにあるの？」
「そこの角曲がった所ぉ」
裏路地っぽい所に入って行った、そこに小さいけど存在感がある店だった
「ユキのオススメ？」
「友達に教えて貰ったんだぁ」
高校の情報網恐るべしって所だな、店は薄暗くてロックな感じの店だった、こういう雰囲気は嫌いじゃないよ、アクセサリーも独特な物ばっかりでそこがまた俺を惹き付ける
「ココ、俺のツボだ」
「だろぉ、絶対カイも気に入ってくれると思ったんだぁ」
流石ユキ、分かってるじゃん、誕生日プレゼントの方を買うのはココに決定だな、でも何買えば良いのかな
「ユキはどれ買うの？」
「これぇ」
指輪に模様が彫ってあって、模様が白と黒に塗られてる
「スゲェ、ユキとマミ姉にぴったりじゃん」
「だろぉ」
ユキも指輪か、色んな物があるし何か良いのが見つかるだろ…、ってあった
「コレ良い」

「ブレスレット？」
「チカに似合うと思う」
「チカ、喜ぶよぉ」
決めた、コレにしよ、プレゼントは衝動でしょ、チェーンをにいろいろ付いてる、赤いハートが可愛いくて良いじゃん、少しはチカも可愛い物付けないとな。
みんなプレゼントを買い終って日も暮れかけてきた、帰んないとな
「ユキ、帰るから」
「うん、お正月には帰るからぁ」
「分かった。マミ姉によろしくね」
「チカにもなぁ」
ユキと別れていつもの港に向かった、島の漁師さんが迎えに来てくれてた。

チカが喜んでくれれば良いんだけどな

赤の好き

期末テストも終わって、受験生には戦いの季節がやって来る、でも青春を歌する人達にはビッグイベントが
「もう少しで冬休みだけど、受験生だから遊びと勉強を半々で」
フウちゃんのいつも通りの気の抜ける話、眠くならないのは良いことだけど、ずれてるんだよな
「先生、半々じゃなくて、普通全面的に勉強じゃないの？」
サエ、良いこと言うじゃん
「だって勉強しないでしょ？」
『確かに』
一同納得、悲しいけどそうだな、みんな勉強しなさそう、一番しなくていいサエが勉強してるだけ
「俺は勉強も手につかないよ」
「コクっちゃえば、楽になるかもよ」
「まだだよ、最低でも卒業してからだね」
ダイチの恋、思った以上に辛そうだな、ダイチが選んだ道だもんな、俺にはそんな恋出来ないよ
「カイ、久しぶりに海行こうよ」
今日は午前中授業だし、サーフィンもしてなかったから行くか、最近ウェットスーツを入手したし
「ＯＫ」
「学校終わったボード取って直行な」
海に着いた時は波は落ち着いてたけど、暫く待ったら良い波が出てきた、冬は荒れるけど良い波が来るんだよな、寒いけど
「やっぱ、冷た」
「何情けない事言ってんだよ、サーフィンが出来るんだからありがたいって思えよ」

確かに、学校から帰ってすぐサーフィン、今の俺にとっては最高の贅沢だよ、寒いのに海なんて、とか思う奴もいると思うけど、冬は水の方があったかいぞ
「チカ、悪いな、二人でクリスマスできなくて」
「良いよ別に、ココは何も無いからみんなで騒いだ方が楽しいだろ」
「そうだな、二人とも高校受かったらデートしよ」
「うん！」
チカの笑顔、コレを見るたび、俺は癒される、どんな所にいても、どんな事が起きようと、チカの笑顔だけでいい
「クリスマス、最高の思い出にいてやるから」
「アタシは辛口だよ」
「大丈夫、絶対に楽しませるから」
「頼んだよ」
チカとの思い出が一つ増えるたび、俺の心がチカに一歩近づくような気がする。

波が無くなって、日も沈み始めた時、俺達はボードを置いて夕日を見に行った、寒い時ほど光が綺麗に見えるからな
「カイ、人を好きになるのって、どういう事だと思う？」
「何だよ急に」
「何となく」
人を好きになるか、気にした事が無かった、自然現象みたいなものだと思ってたし
「相手に自分の全てを捧げる事かな」
「捧げる？」
「自分の気持ちも、過去も、未来も、今も、全部貴方がいるから回ってる、僕は貴方のサイコロに従いたい。みたいな」
「サイコロ？」
「我が侭とか、相手の気持ちとか」
「カイの“好き”って自分を犠牲にしてるよね」

犠牲か、チカのタメなら俺の犠牲は易いもの、これって俺のエゴだよな
「チカの“好き”は？」
「アタシは、解放かな、アタシの全てを受け入れて欲しい、アタシの心に入って来て欲しい、そんな感じ」
「強引じゃない？」
「良いの、恋は自己チューにならなきゃ」
それも良いかもな、でも何でチカはこんな事聞いて来たんだろ、好きなんて人によって定義は違うし、他人の意見を聞いて何かが変わるわけでもないし。

夕日はいつもと変わらなかった、導かれてるような感覚に陥る海の赤い道、照らされてる所は燃えてるみたに赤い、でもチカの髪だけは夕日に負けないで赤い
「カイと夕日を見ると、カイをもっと好きになる」
「俺も。夕日って不思議だよな」
自然とチカの顔を見てた、チカも見てた、目があうとまだ顔が熱くなる
『好きだよ』
チカにキスをしてた、意思が通じあってたかのように同時に、目を瞑って、顔を近づけた。

また一歩、チカを好きになってる俺がいた

青の聖夜準備

ついに待ちに待ったクリスマスがやって来た、この日をどれだけ待ちわびたか、俺にとって人生最高のクリスマスになるな、確実に。

でもクリスマスなのにめちゃめちゃ早起きの俺、理由は料理の仕込みと、ダイチのケーキ作りの指導&サポート、サポートって言っても手術中のナースみたいなものだけど

「もう少しフルーツ入れた方が良いよ」

只今制作中のケーキは普通のショートケーキじゃなくて、フルーツをこれでもかと入れたケーキ、今は2層目を乗せるところ、俺の予定では3層まで行きたいと思ってます

「じゃあ同じ事繰り返して」

「うん」

ミッチーの家の厨房を借りてやってるけど、後ろで専属のシェフがせかせか料理してる、弟子入りしたいくらい料理の手際が良いし、綺麗、今度ミッチーの権限を使って教えて貰お

「カイ、どう？」

「良いじゃん、最後は生クリームを全体に塗って、フルーツをペタペタ貼っておしまい、層と層の間に空気が入らないようにね」

ダイチの真剣な顔、恋する乙女は強いとか何とか言うけど、男もたまにはやるよな、ダイチはココまでしても足りないくらいだし

「もう少し押し込んで」

ダイチに教えてるのは良いんだけど、俺の仕込みが進まないし、今は唐揚げの下味とか、ポテト切ったりとかしかしてないからな、メインに辿りついてない、クリスマスには欠かせない七面鳥が…、タカアン●トシみたいなツッコミが飛んで来そうだけど、そこは気にしないで

「出来た！」

「クリームだけね。次、フルーツね」
「あと少し、あと少し」
そりゃ嬉しいよな、約2時間近くやってるから、俺の仕事も終わったら寝るか
「どう？カイ」
「最高、始めてのクセに売り物みたいじゃん」
「フウちゃん喜ぶかな」
「当たり前だろ、努力ってものは相手に伝わるものだから」

ダイチのケーキが一通り終わって、俺の仕込みも一通り終わった頃は昼間だった
「8時に来たから、4時間以上もココにいたんだ」
「少し寝るか、ミッチーの家だから客間の一つや二つあるだろ」
「そうだな、疲れをとって、フウちゃんに最高のクリスマスをプレゼントしなきゃ」
俺らは厨房を出て家の中を歩いて人を捜した、何度か迷子になりそうになったけど、やっとの思いで女の子を捜しだした
「コノミちゃん」
「カイさん」
「あのさぁ、寝れる所ない？」
「有りますよ」
「案内してくれない」
コノミちゃんは慣れたように、迷路を歩いて行った、俺は既に自分の位置を把握できなかった
「ココならどうですか？」
『スゲェ』
ホテルのスウィートルームみたい一室だった、始めて見るようなベッドに、始めて見るような内装
「ここ誰の部屋？」
「ゲストルームですよ」

「ゲストルーム！？」
言葉にとりあえずびっくり、普通家でゲストルームとか使わないだろ、しかもこの貴族仕様みたいな部屋
「ホントに良いの？こんな部屋」
「ミッチーのお友達ですし、カイさん達は大事なお客さんですから。それに…」
コノミちゃんの視線の先には大の字で寝てるダイチが…、断る訳にはいかないな、ダイチのタメにも
「じゃあ、5時くらいになったら起こして」
「はい、分かりました」
俺はベッドに倒れこむと、あっという間に眠っていた

“ゴツッ！”
「痛ぁ！」
誰かの拳が俺の頭を殴った、誰が…、って一人しかいないよな
「おはよう！」
俺の大好きなチカの笑顔がそこにあった、この笑顔を見ると全部許せるところが怖い
「…おはよ」
「早く仕上げるぞ」
そういえばコノミちゃんが起こしに来るはずだったのに
「何でチカが起こしに来てんの？」
「コノミちゃんがココでカイとダイチが寝てるって言ってたから」
「コノミちゃんは？」
「飾り付けに決まってんだろ」え～と、そうなると…
「あの迷路を一人で来たの！？」
「迷路って…、ミッチーの家はアタシ達の遊び場だったから」
ガキの頃から遊んでれば覚えるわな、俺は覚えられる自信がないけど
「ダイチは？」
チカが顎で指した先には、寝た時と頭が逆の位置を向いてるダイチ

がいた、器用な奴
「…フウちゃん…」
寝てても馬鹿丸出し
「ダイチ、起きろ」
ダイチの頬を叩いてダイチを起こした、寝起きの良さは天下逸品だった
「ん！？おはよう！カイ、仕上げだ仕上げ！」
俺も見習わないとな、人に起こされると親の仇を見るような目になるからな
「おう、行くぞ」
そういえば、チカが迷路を攻略出来たのに、何でダイチは迷ったんだろ…、馬鹿だからか。
後はメインディッシュのフウちゃんを待つだけ、口実は歓迎会という事で、まぁサエがいるから大丈夫だろ

青と聖夜

サエとミッチーが呼びに行って２０分、もうそろそろだな、ダイチはだんだん落ち着きが無くなってきたし、ユメちゃんはゲンと隅で話してる、チカはコノミちゃんと話してるし、俺はダイチを落ち着けてるけど効果無し

「ダイチ、落ち着け」

「でもさぁ、無理…」

「キョドっても何も変わんないぞ、どっしり構えとけ」

焼け石に水か、フウちゃんが来るまで待つしかないな、事前に知らせてあるし、車だからもうすぐだと思うんだけど…

「みなさん、来ましたよ！」

ダイチの緊張が最高潮に達したのが雰囲気で分かった、ダイチ頑張れ

「スゴ～イ！これ全部みんなでやったの！？」

「そうだよ、料理は俺とダイチ、飾り付けはみんなでやってもらった、フウちゃんのためだよ」

「ありがとう！」

フウちゃんの満面の笑顔、ダイチは腹をくくったのかいつもの調子になってきた

「フウちゃん、何か足りないよな。クリスマスと言えば？」

「クリスマスケーキ？」

「ビンゴ！」

「チカ！コノミちゃん！」

二人に支えられて、大きいケーキがテーブルの真ん中に置かれた

「スゴイ！スゴイ！」

フウちゃんが跳ねながら喜んでる、分かりやすくてありがたい

「これ全部ダイチが作ったんだよ」

「ホントに！？」

「そう、フウちゃんのタメに」

「嬉しい！」
フウちゃんがダイチに抱きついた、ダイチは一気に顔が真っ赤になった、みんなで顔を合わせてアイコンタクトで喜んだ、でもフウちゃん、生徒に抱きつくのは良くないだろ
「じゃあ、イチャイチャしてる二人はおいといて、始めるか！」
各々が騒ぎ始めた、ユメちゃんは騒ぐゲンに着いて行ってる、ミッチーとコノミちゃんはいろいろ食べてる、ダイチはフウちゃんと二人で良い感じに、大成功だな、俺とチカはサエとお話
「良いの？二人の邪魔して」
「大丈夫、アタシとカイの間に誰が来ても、猫に小判」
頼むから人前で腕組むのはやめてくれ、サエが呆れてるだろ、ってか笑ってる
「何で笑うんだよ？」
「チカが羨ましいなって」
「何でアタシが？」
「こんな良い旦那を持って、それに…」
俺が作った料理を食べた
「ほいひい（おいしい）」
「サエ最近、一皮剥けてきたよな」
「カイのお陰」
「カイ、サエに何かした？」
チカの目が怖い、なんだかマミ姉に似てきた
「何もしてないから」
「強いて言うなら、私の心に台風起こしたくらいかな」
サエ、かなり危ないよそれ、チカが頭良かったら俺は台風直撃だよ、床上浸水だな
「台風？」
「あれだ、サエにとってのライバル出現だよ、な？」
「そういうこと」
チカに言ったら…、考えたくないや、怖いっていうか切ない

「サエ、これ」
サエにシャーペンをあげた、クリスマスプレゼントってか、シャーペンって言っても１００円くらいのじゃない、高級品のシャーペン
「良いの？貰って？」
「良いの良いの、あれだ、受験頑張れのシャーペンだよ、大事にしろよ」
「良いなぁ、サエ、アタシも何か欲しい」
さぁて、ココからが本番だ、ダイチと何十回も練習した、絶対に成功するはずだ。
中指と薬指の付け根の所にプレゼントを噛まして、手を繋ぐフリをしてチカの左手薬指にはめる
「まぁまぁ」
「ひっ！？何か指に…」よっしゃ！成功！チカが指を見てフリーズしてる
「なにコレ？」
俺は、俺の左手薬指をだした
「ペアリング！」
「アタシに…」
「当然。気に入らない？」
「大好き！！」
飛び付いてきた、かなりでかい声を出してたからみんな見てる、しかも答えになってないし
「チカ、少し抑えて…」
「無理！」
流石にキスまではしてこなかったけど、みんなの視線が集まってる、主役は俺じゃないから。やっと離れたと思ったら、チカは走りだしてみんなに自慢してる、ココまでとは
「やっぱりチカには敵わないよ」
「今はチカしか見えないから」
「馬鹿」

「俺が？」
「類は友を呼ぶ」
会話になってないけど、言わんとしてる事は分かる、悔しいけど否定出来ない、チカの前ではどんな馬鹿にでもなれる、あ、チカが戻ってきた
「カイ、ありがとう！」
「分かったから、少し抑えて」
「でもでも、凄く嬉しいんだもん！」
テンションの高さにビックリだよ、ついていけないよ、こんなにキャイキャイ騒ぐチカもあんまり見れないし、たまには良いよな
「チカ、大切にしなよ」
「大丈夫、絶対に落とさない！」
「そうじゃないよ、蛍光灯に蝿が群がってくるから気をつけな、私もその内の一人だし」
「？？？」
サエ、頼むから俺の肝を冷やすのはやめてくれ、しかも例えも選んでくれよ
「とりあえず、今あるものをなくさない事だね」
「大丈夫、何にもなくさないから」
「だってよ、カイ」
「俺にふるな、答えに困るだろうが」
チカは何も知らずに騒いでるけど、さっきから俺はギリギリの綱渡りしてる。

みんなそれぞれの雰囲気を作り出してるな。
ゲンとユメちゃんはまだ騒いでる、ガキだな
ミッチーとコノミちゃんはティータイムか、こんな時まで飲むなよ。
メインのあの二人は、フウちゃんがケーキ食べてる、あれ、止まった、まずかったのかな、でもそんなハズはないし…、泣きだした！？おい、ダイチ何かしたのかよ

「おいしい、ありがとう、だって」
「チカか。誰がそんな事言ってた？」
「フウちゃん」
二人までかなりあるぞ、とても常人には聞こえるもんじゃない、もしかして盗聴機を仕掛けたとか？
「何で聞こえんの？」
「耳が良いから」
目も良いし、耳も良い、チカはアフリカ人？その話はおいといて
「じゃあ嬉し泣き？」
「そういう事になるね、あの二人ホントに付き合ったりしたら笑えるよな」
「良いことじゃん」
もしかしたらもしかするかもしれないな、勝率０．００００…からの勝利か？
「ダイチがポケットから何か出したぞ」
プレゼントだ！一気に畳み込むつもりだな
「袋に入ってるな」
「どうなってる？俺よく見えないから実況頼むよ」
「持ってた皿を置いてフウちゃんが袋を開けた、止まった……、抱きついた！？」
最後は俺でも分かった、ダイチ、やるじゃん！これで勝率は７０％くらいにはなっただろ
「髪留めか？多分そうだ、貰ったもので髪留めてる」
「ダイチはどう」
「顔が真っ赤。フウちゃんが何か喋ってる」
「何て言ってる？」
「“男の人にプレゼントを貰ったの始めて”だって」
「これは大どんでん返しだな、ダイチの恋、成就するかもな」
周りを見ると、みんなダイチの事を見てた、小さくガッツポーズで合図を送った

「じゃあこれにてお開きにしますか」
「カイさん、片付けくらいはうちでやるので」
「じゃあ、お言葉に甘えて。ゲン、ユメちゃん送ってけ」
「当たり前でしょ、行こ、ユメ！」
無理矢理手を引っ張って走って行った
「俺はチカとサエ送ってくから、ダイチ、フウちゃん頼んだ」
「了解」
「ダイチ君帰ろう！」
ダイチの腕にしがみついた、あれでも一応先生だよな
「じゃあ、チカ、サエ行くか」
俺はチカの手を握って出ようとした
「私は一人で帰るよ、危ないもの何てないし」
「サエ、気が利かねぇな、チカと長くいる口実なのに、台無しにする気？」
嘘だけど、流石に一人で帰すのは可哀想だけど、まあ、チカと一緒にいたいのも嘘じゃないな。
犬達がもう寝てて、身震いする寒さだった
「寒いな」
「カイがいればアタシは寒くないよ」
「チカ、変わったね。前はそんなに積極的じゃなかったし、女の子っぽくなかったよ」
「カイのお陰だな。サエも変わったぞ、トゲトゲしさが無くなった」
「カイのお陰だね」
なんか、俺、かなり過大評価されてるんだけど、一番変わったのは俺なのに
「じゃあ、俺は二人に感謝」
『何で？』
「最高のクリスマスをくれた事」
二人とも笑ってる、俺もつられて笑ってる、クリスマスって最高だな

「ココで良いよ、家はすぐそこだから」
「分かった、じゃあな」
「バイバイ」「じゃあね」
サエと別れて二人になった、考えてみると、クリスマスに始めて二人きりか
「チカ、明日会える？」
「当然」
「二人でクリスマスやるか、いつもの夕日の所で」
「良いよ」
「じゃあ3時くらいに迎えに行くから」
「待ってる」
明日はチカの誕生日、二人で祝いたいよな、家だと誰かいるからいづらいし。

俺とチカは寒さをしのぐように、体を近づけて歩いた、冬の夜なのに暖かかった

赤の誕生日

１２月２５日、クリスマス兼チカの誕生日はいつになく寒かった、東京より比較的南にあるこの島は、冬でも雪は降らないくらいらしい、でも本日の気温は段違いに低い、しかも曇りだし、雨降らなきゃ良いんだけど。
いつもより遅く起きたから朝飯ってよりは、昼飯を自分で作って食べた、休みの日はいつもこんな感じだ
「今日はチカちゃんとデート？」
おかぁか、おかぁはいつも動いてる、暇だと逆に疲れるらしい
「そうだよ、クリスマスだし、それに今日はチカの誕生日だから」
「泊まるの？」
「ゴホッ！ゲホッ！」
飲んでた水を吐き出しそうになった、あまりにも大胆な親な事
「そんなんじゃないから」
「つまんないわね、恋人同士なんだからそれくらいしてもいいじゃない」
いつもと変わらない口調で、いつもと変わらないトーン、なんか狂うな
「まだ中学生だから」
「今どきは中学生何て普通でしょ？」
普通、親なら健全な方向に教育するだろ、無理矢理そっちに曲げてどうする
「俺らはそんなんじゃないよ」
「ませたガキのクセに」
そういって二階に上がって行った、なんかいつもおかぁのペースに呑まれるんだよな。
支度もしたし、持つもの持ったし、これで大丈夫だろ、もう時間も

ないし出るか。
チカの家に行くとチカが外で待ってた、寒いのにわざわざ待ってるなんて、もう少し早く来た方が良かったかな
「家にいて良かったのに」
「待ってられなかった」
「じゃあ行こう」
チカと手を繋いで海に向かった、外は思った以上に寒かった、ニット帽を被ってるけどマフラーが欲しいな、手はチカと繋いでるからあったかいけど
「曇ってるな」
「夕日が見れなそう」
「残念だけど我慢だな」
夕日が出れば最高だったけど欲張り過ぎかな、チカがいれば満足、今はそんな気分だ
「ユキとマミ姉は２８日には帰って来るって」
「初詣は一緒に行けるんだ」
「そうだな」
「カイと始めての年越しか」
「その前に今日を楽しもうよ」
いつもの道も、何か違って見えた、空気がどんどん冷たくなってきたのが分かった、空から白い粒が落ちてきた、冷たくてふわふわした粒が
「雪だ」
「ホントだ何年ぶりだろ」
「夕日より、雰囲気でるな」
「うん。少し急ご」
着いた頃には、雪が強まってた、視界が悪くなるってよりは、綺麗にするかんじの雪。
俺らはいつものように座った、いつもと違うのは夕日じゃなくて、

雪を眺めながらって事だけ
「海に落ちた雪って可哀想だね」
「何で？」
「溶けちゃうだろ、陸に落ちれば綺麗な姿を保ってられるけど」
「“海”と“雪”が仲が悪かったらだろ」
「どういうこと？」
「雪は積もるタメに降るんじゃなくて、海に会うタメに降ってるとしたら、ロマンチックじゃない？」
「面白い事言うね」
海に落ちる雪があまりにも綺麗だったから、ついつい変な事言っちゃった
「チカ、これあげる」
「なにこれ？」
俺は小さい箱を渡した
「開けてみな」
チカは恐る恐る箱を開けた、別にびっくり箱じゃないのに
「うわぁ！凄い！」
「モンブランが好きって聞いたから」
昨日、少し遅くまで起きてモンブランを作ってたから、今日起きるのが遅かったんだ
「誕生日ケーキ、食べよ」
「カイが作ったの？」
「そうだよ」
ゆっくり口に運んでった、味わうように食べてる、悪いけどかなり美味いから
「美味いだろ？」
「普通“不味い？”って聞くだろ。でも、今まで食べたモンブランの中で、一番美味しい」
「当然だろ」
内心凄く嬉しかった、どんな奴に言われるよりも、チカの一言が俺

の自信になるようになってる気がした
「あとコレ」
第二のプレゼントのブレスレットを渡した
「何コレ？」
「誕生日プレゼントに決まってんじゃん」
「良いの？貰って？」
「当たり前だろ、誕生日何だから」
「知ってただけでも嬉しいのに…」
チカは手首に付けた、俺の勘は的中した、かなり似合ってる
「カワイイ。指輪といいコレといい、いつ買ってきたの？」
「ダイチのプレゼントを買いに行くという名義で、ダイチとユキと一緒に」
「あの時か」
納得したように手首を見てる、笑って見てるのを見ると嬉しくなる
「カイ、目瞑って」
「何で？」
「良いから」
何だろ、キスはないだろ…、何か首に巻いてる、あったかい、もしかして？
「良いよ」
「…マフラー？」
「しかも手編みだよ」
「あ、ありがとう」
「いつもマフラー欲しいとか言ってただろ」
「しかも手編みだろ、スゲェ嬉しい」
ヤベェ、かなり涙腺緩んできた、でも耐えられるかな、手編みのマフラーってこんなにあったかいんだ
「どう？」
「どうも何も最高だよ！」
自分抑えられずに、強引に近いキスをした、少し長めに

白と黒の帰省

今日は港にいる、フェリー待ち、今日はユキとマミ姉が帰ってくる、マミ姉とは4ヶ月近く会ってない、ユキとは3週間くらい前に会ったばっかだし、でも心が踊る、チカはさっきからはしゃいでうるさい

「なぁ、まだかな？」

「あと少しだよ、落ち着けよ」

「でもさぁ、でもさぁ…」

ダメだこりゃ、来るまでは落ち着かないな、来たらもっと落ち着かないだろうな

「あれじゃないの？多分あれだよ。絶対あれだ！」

俺には暫く分からなかったけど、何とか分かる所まで来た、確かにユキ達が乗ったフェリーだ

「良かったな、もうすぐ会えるぞ」

「うん！」

ガキだな、でも兄弟が戻って来るようなものだもんな、俺も少からずテンション上がってるし。

フェリーが接岸して、一目散にユキが降りてきた、ユキもガキだな

「チカぁ、久しぶりぃ。カイはこの前会ったばっかりだよなぁ」

「久しぶり！元気だったか？」

「当たり前だろぉ、二人も元気そうだなぁ」

後からマミ姉がゆっくり降りてきた、マミ姉が一回り大人っぽくなった感じがする

「カイ君、チカちゃん久しぶり」

「マミ姉、大人っぽくなった？」

「分かる？少し変えてみたの」

「かなりね、ユキにはもったいないくらいだな」

「ユキ君に似合う女になるために頑張ってるんだから」

マミ姉はまんまでも、ユキにもったいないくらいなのに、強力磁石

の彼氏を持つとちんけな砂鉄も気になるのかな、でもこのままマミ姉が頑張るとユキが可哀想だな
「カイ君は髪の毛伸びたね」
「分かる？」
「分からない方が凄いよ、伸ばしてるの？」
「そんなとこかな、後でかるく整えてよ」
「分かった」
みんな少しづつ変わってるけど、根本は変わらないんだな。

荷物を置いていつもの海に行って髪を切ってもらいながら、みんなで話した
「こんなでどう？」鏡を受け取って、切ってもらった髪をみた
「最高、流石マミ姉だよ、期待以上」
「ありがとう」
「チカも伸ばしたらぁ、彼氏より短くて良いのぉ？」
「うるせぇな、アタシの趣味に口出しするな！」
あっ、蹴り飛ばした、この二人は相変わらずだな、でも俺の方が長いってのは変だよな
「チカちゃん、その手首と指、カイ君から？」
「そうだよ、似合う？」
「凄くカワイイよ」
「マミ姉の指輪もかなりカワイイね」
「分かった？」
「当たり前でしょ、ユキとお揃いってのもね」
二人の仲もおさまるどころかヒートアップしてるし、二人でずっと手を繋いでる、まぁ俺らも人の事言えないけどな
「カイ君は新しい学校には慣れた？」
「慣れたよ、楽しくやらしてもらってるよ。マミ姉とユキはどうなの？」
マミ姉の顔が悪魔に近付いた、俺何か悪いことでも言っちゃったかな

「ユキは女の子に大人気よ」
「マミ以外は興味ないからぁ」
泣き付くようにマミ姉に弁解をしてるけど、悪魔が聞く耳持たずっていうか、言い訳は聞きたくないというか
「でもマミ姉も他の男が放っておかないだろ」
「でも、ユキ君だけだから」
「どっちもどっちじゃん」
持てる彼氏彼女を持つと大変だね、二人とも告白された回数聞いたらビックリする数字が出そうだな、二人合わせて一クラスくらい出来るんじゃないの
「カイなら高校行けば辛さが分かるよぉ」
「アタシは分からないのかよ！？」
「チカちゃんはもう少し大人っぽくならないとね」
「マミ姉、ズバリ言い過ぎ」
でも髪が短いのもあるし、カワイイんだけど、子供っぽいのは否めない
「良いもん、告白されまくってカイに焼きもち妬かせてやるから」
「無理だね」
「何が？アタシがガキっぽいから？それともアタシ何かに寄ってくる男はいないとか？」
「後者は無いな、それに誰に何と言われようが、チカは俺から離れないから」
「随分の自信だなぁ」
「でもそうでしょ？チカちゃんはカイ君しか見えてないもんね」
「悔しいけど…、そうだよ」
俺も然りってか、他には興味ないし、チカを離す気も無いしな。
今日は現状報告みたいな感じで終わった、これから冬休みが終わるまで、またこの４人で楽しい日々が始まる、別に今までがつまんなかった訳じゃないから。

今回は宿題大丈夫なのかな？

白の武勇伝

今年も残り9時間に差し掛かった、外は寒いから家でユキと二人で話してる、おとぉとおかぁは毎年、年越しは東京に行って騒いでるから、家には二人きり
「今日は8時からでしょぉ？」
「そうだよ」
今日は8時からうちで年越しをすることになってる
「一年は早いなぁ」
「俺はこの島に来てからが早かった」
「いろいろあったからなぁ」
チカに出会って、ユキとマミ姉に出会って、サーフィンに出会って、前の親に捨てられて、いろいろ有りすぎたな、でも今までで最高な時間を過ごしてた事は確かだな
「この島の人もぉ、変わった人が多いと思うよぉ」
「いるのかな？」
「チカが一番良い例だよぉ。女の子っぽくなったしぃ、笑顔も変わってきたよぉ」
「そうなんだ、俺が来たからチカが変わったとしたら、何だか嬉しいな」
「絶対カイのお陰だよぉ」
ユキが言うんだから確かだろ、自分で言うのもなんだけど、一番変わったのは俺だと思う
「ユキはマミ姉の事を泣かした事はある？」
「何だよ急にぃ？」
「何か、チカの事泣かしちゃう事があるからさ」
泣かせないって誓ったのに、泣かせてる自分が許せなかった、だから身近なユキはどうなのかなって思って
「一回も無いよぉ」

「やっぱりか」
「泣かしたっていうかぁ、マミが泣いたところを一回も見たことがないんだぁ」
「マミ姉って泣かないの？」
ユキは少し悲しい目をした、何かあるのかな、泣かれないのは良いことだと思うけどな
「泣いてくれないのは辛いよぉ」
「何で？」
「弱みを見せてくれないと弱い部分が分からないしぃ、不安になってくるよぉ」
確かにそうだよな、口では言ってても不安になることはあるもんな、泣いてくれるって、頼られてる事なのかもな
「ユキは泣いた事ある？」
「無いよぉ、マミは優し過ぎるくらいだからぁ」
「何か大人だな、二人を分かりきってる感じだな、それに比べて俺達は、天秤みたいにグラグラしてる」
「それで良いんじゃないのぉ、ぐらついてるから安定した時にそれが実感出来るだろぉ、俺達なんてずっと安定してて有り難みが分からないからさぁ」
そんなものなのかな、ユキの言ってる事も一理あるけど、安定して欲しいのもある、まぁこれを楽しまなきゃ恋なんてやってらんないよな

こういう男同士の話でしか聞けない事があった、男同士ってか約一名聞かれちゃいけない人がいるって方が正しいな
「マミ姉がいないから聞くけど、何人くらいにコクられた？」
「マミに言うなよぉ」
言わないし、言えないよ、俺も悪魔は見たくないし、ユキを見殺しには出来ない
「え～とぉ……、１８くらいかなぁ、他校も合わせるとぉ…」

「ちょっと待って！同じ学校だけで１８人！？」
「そうだよぉ」
ユキ凄すぎ、俺もたまにあったけど、そこまでは無いな、多分学年一のイケメンとか言われてるんだろうな
「で、他校は何人？」
「他校じゃなくてぇ、学校外だぁ。それだと5人くらいかなぁ」
「学校外？」
ユキ、どこまでモテ男なんだよ、こういう奴がいるから一人身が増えるんだよ
「バイトしてるお店に来た人とかぁ、逆ナンで無理矢理連れ回された時とかぁ」
「案外修羅場をくぐりぬけてるんだな」
「そうだよぉ、逆ナンの時なんて何回走馬灯を見たことかぁ」
マミ姉のせいだろうな、俺の場合泣き出すだろうな、どっちにしろ困る事には変わりないな
「バイト先のは？」
「たまに終わった時に外で待ってるんだよねぇ」
「辛い思いをしてるんだな」
「分かるぅ？」
普通の人は良いよなとか言うけど、実際辛いだけだよ、彼女がいると自分は何もしてないのに居場所が無くなるんだよな
「バイトはどこでやってるの？」
「おとぉのコネでサーフショップでバイトしてるんだぁ。ちなみにマミはコンビニでバイトいしてるよぉ」
マミ姉がコンビニって、ユキより大変な事になりそうだな、マミ姉目当ての客も少からずいるだろ
「大変なんだな」
「でも楽しいよぉ、毎日が新鮮だからぁ」
「４ヶ月後にはチカと一緒にそっちに行くから、待ってろよ」
「待ってるよぉ、こっちに来たらカイも女の子に気を付けろよぉ」

「キバって行きます」

４ヶ月後か、長いようであっという間なんだろうな、女の子に捕まらない術を身に付けとくか

青と赤と白と黒で年越し

今年も残すことあと４時間、ユキといろいろ話をしてると約束の時間になってた、集まるって言っても、そば食って、カウントダウンして、お参り行くくらいだからな
「ユキ！カイ！入るぞ！」
いつもの事ながら、どこの家にもチャイムってものがあるんだから使えよ
「あけおめ！」
「死語だし、まだ１２月３１日の２０時だよ、先走りすぎ」
「細かい事は気にするな！」
テンション高すぎだよ、後ろにいるマミ姉も呆れてるよ、ついていけるのはユキだけだよ
「カイ、年越しだぞ、年越し！一年が終わって始まるんだぞ、お祭りだよお祭り！」
「チカ、俺は分かるよぉ」
似たもの同士だなコイツら、マミ姉は一人でこのテンションについていってたとなるとキツイよな
「マミ姉、どうにかならない？」
「治まるまで待つしかないよ」
放任主義か、ほっとけば人間だからいつかはおさまるだろ、でも治まる前にこっちがおかしくなりそう

少し早いけど夜飯でそばを食べた、当然俺の手打ちです、ダシからこだわった一点もの
「そば美味しい！」
「当然だろ」
「そばまで打てるなんて凄いなぁ」
「どこでこんなの覚えてくるの？」

「立ち読みとか、見よう見まね」
「流石アタシの男だ」
当たり前だ、と、今回のは我ながら出来が良かったから、良い年になるな来年は、ってか他人にそば食わしたのは井上以外だと始めてだな、前の親は家にいなかったから、井上は無理矢理来てただけだけど、今思うと井上は俺が引きずってた事を知ってたんだろうな
「毎日でも食べれるよぉ」
「疲れるからやだよ」
「そんなこと言わないでさ〜、アタシからも頼むよ」
「甘えても無理」
「お願い、カイ君」
「少し色気を出しても無理」
『ケチ』
前略、おとぉおかぁみんなが僕を良いように遣います
「紅白やってるよぉ」
紅白か、毎年飽きずにやってるよな、派手な衣装で路線がずれてる奴らもいるし、あんまり俺は好きじゃない
「プラ●ド見ようよ」
「俺もそっちが良いな」
「マミはぁ？」
「私も武●が見たい」
「はい決定！はい変えろ！」
ユキが渋々チャンネルを変えた、調度●蔵が試合をやってるところだった、武●が出たとたんマミ姉が騒ぎ始めた
「頑張れ！そこでローは無いだろ、何でパンチしないの！？」
「マミ姉、どうしたの？」
「私、格闘技とかみると興奮しちゃって、大好きなの●蔵とか」
「意外」
あんまり格闘技とか見ないタイプだと思ったのに、マミ姉の意外な一面が見れて良いか

「マミ姉って格闘技見るといつもあんななの？」
「そうだよ、唯一マミ姉が興奮する瞬間」
「あぁなると誰も手をつけられないんだよねぇ、ちなみにチャンネル変えたらぁ、来年は迎えられなくなると思った方が良いよぉ」
野球を見てる酔っ払いばりにたちが悪いと、確かにさっきから異常に熱くなってるマミ姉がいるけど、いつもの大人な感じと違って、拳を振り上げて応援してる。

プ●イドも終わって、俺達はお参りに向かってた、その間も除夜の鐘を聞きながら、ちなみに只今９０回を突破したところです、あと少しで年が明ける
「あと少し、あと少し！」
「深夜なのにテンション高すぎだよ」
最近は歩いてる時は、チカと俺、ユキとマミ姉で歩いてるのが当たり前になってきた
「今何分？」
「５５！今年はあと５分だよ！」
「ユキ、マミ姉、あと５分だからここら辺でカウントダウンしよ」
ユキが携帯を開いて時計を見た
「ホントだぁ、ココでやるかぁ」
今年はいろいろあったな、一番濃い一年だったな、来年はもっと濃い一年になるんだろうな、年が変わっても俺達は何も変わらないけど、年を積めば変わる事もあるんだろうな
「カイ！あと２０秒切ったよ！」
「よっしゃ、じゃあ行くか…」
『……５・４・３・２・１！ハッピーニューイヤー！！』
「カイ！年越しちゃったよ！アタシ達４人一緒に年越したんだよ」
「分かってるよ…、ってあれ」
俺が見た先にはユキとマミ姉がキスしてた、人目を憚らないで、堂々と

「嘘…、大胆」
「過ぎだろ」
キスが終わったらしい
「どうしたのぉ？二人ともボケ～っとしちゃってぇ」
「せめて見てない所でやれよ」
「良いじゃないの、前に一回みたんでしょ？」
「見たけどさぁ…」
二人がそんなに大胆だったなんて思わなかった、最初に見たときは遠目だったから良いけど、今は目の前で堂々と
「ほらぁ、良いから早く神社行こうよぉ、人が集まっちゃうよぉ」
「行くか」
ユキとマミ姉が先を歩いて行った、俺達は軽いカルチャーショックを受けてた。

神社はそれほど人がいなかった、１０分ちょっと並んだだけでお賽銭出来た
“チカとずっと一緒にいれますよ～に”
ベタでバカだけど、俺がホントに願ってることだからな、気合い入れて５０円も入れたから叶うだろ
「なにお願いしたんだよ？」
「言う訳ないだろ」
「教えろよ」
「願い事は教えると叶わないんだぞ」
「ホントに！？」
「知らないけど」
チカがフグみたいに膨れた、人の邪魔になるし、いつの間にかユキとマミ姉がいなくなってたから裏に行った、お祭りの時に教えてもらったところに
「ユキとマミ姉いなくなったな」
「また二人でイチャイチャしてるんだろ」

「カイは人前でキスなんてしないよな？」
「するしないじゃなくて、出来ないよ」
チカの顔がさっきの事を思い出したのか真っ赤になってる、暗闇でも分かるくらいだからかなり赤いんだろうな
「アタシ達の始めてのキス覚えてる？」
「覚えてるよ、ユキとマミ姉のキスを見た後、無理矢理俺がキスしたんだろ」
「あの時、心臓が破裂しそうなくらいビックリした」
あの時は意味わかんない理由で無理矢理キスしたからな、自分でも大胆さにビックリだよ
「チカに対するキモチが爆発した結果、気づいたらキスしてたんだよな」
「アタシ、カイに一目惚れしてた、だからキスされた時凄く嬉しかった」
「俺も一目惚れかな、始めての感覚だったよ、あの時の俺は受け入れたく無い事だったと思うくど」
チカには悪いけど、初恋じゃないけどあんな感覚は始めてだった、だから自分を抑える事ができなかったのかな
「アタシね怖いんだ」
「何で？」
「人をこんなに必要としたことが無かったから、兄貴もユキもマミ姉にもこんなに依存しなかった、まる一日泣けば気がすんだ。でもカイは違う、完全に依存してるんだ、アタシの頭の中はカイでいっぱい、今アタシの中に物凄い嵐を作ってるの、でもその嵐が無くなった時アタシは生きて行けないと思う」
チカが俺の事をそこまで思ってくれてるのが嬉しかった、俺もチカがいなくなったらあの時より心が荒むと思う
「大丈夫だよ、絶対にチカから離れない、チカが遠くに行かなきゃいけなくなったら俺も行く、絶対にチカをはなさないから」
「でも、もしカイがアタシに飽きたりしたら？」

「飽きない、チカ以上の人が見つかるとも思えないし、俺もチカと同じくらいチカに依存してるから、だから俺もチカと同じくらい不安もあるから、だから依存しあってれば良いじゃん」
チカがぽろぽろと泣き出した、また泣かしちゃったよ、もとから泣き易いってのもあるけど、心が痛む
「チカ、じゃあ誓うよ、チカに、ユキに、マミ姉に、ミナに、学校のみんなに、チカを絶対に離さないって」
「ホントに？」
「誓うよ」
チカがうるんだ目で俺の目を見た、俺もしっかり見てチカに近付いた。

心が通じあった気がした、目を瞑ってキスをした、今年始めてのキスを、去年の事が頭に浮かぶなか、チカの記憶だけをかきあつめて

白と赤の餅搗きツインズ

正月気分を満喫してる今日この頃、正月気分って言っても家でお正月番組みて、餅食って、ぐーたらしてるだけだけど、そして本日は市販の餅に飽きたから餅搗き大会、いつもの４人でぺったんぺったん

「よっしゃ、次行くぞカイ」

「まだ作るの？」

「当たり前だろ、さっきクラスの奴も呼んできた」

うわぁ、強引、既に3周目に突入してる、一回で2、3キロくらい蒸してるからかなりの量になる

「ユキ、悪いパス」

「了解ぃ」

ユキにパスをして俺は餅に味付け、にしてもあの二人餅搗き上手いな

「何であんなに上手いの？」

「小さい頃からよくやってたから。私の中では餅搗きツインズって呼んでるんだ」

確かに餅搗きツインズだな、手際が良いし、リズム感もバッチリ、最初から俺にやらせないでユキがやれば良かったじゃん

「初心者にはキツイよ」

「カイ君は頑張ったよ、ほら出来たお餅、きな粉やらアンコやら付けて」

俺はこっちの方が楽しいし楽で良いや、餅の味付けはきな粉、あんこ、ごま、いそべやき等々を作る予定、でも確実にクラスの奴が来ても食いきれない量になるのは明らか、持って帰ってもらうか

「カイ〜！」

ダイチと…、フウちゃんか、あの二人付き合ってんじゃねぇの

「よぉ、歳の差カップル」

「やだなぁ、違うよ」

「えっ！？私達のあの熱い燃えるような一夜は遊びだったの？ダイ

チ君、酷い」「いやいや！まだフウちゃんに指一本触れてないから！」
それにフウちゃん、それは男の言う冗談だし、アンタ先生だろ、もう少し自覚を持ってくれよ、でも、フウちゃんもダイチに慣れてきたし、はっちゃけてきたし、後者は先生にはいらないけど
「…シオリさん？」
「あら、マミコちゃん？」
何！二人知り合い！？でもフウちゃんは今年赴任になったからマミ姉が知ってるハズがないんだけどな
「知り合い？」
「うん、私のお兄ちゃんの元カノ」
『えぇぇ！』
ダイチと俺、絶叫、マミ姉とフウちゃんが知り合いってだけでもビックリなのに、マミ姉のお兄ちゃんの元カノ、それにマミ姉に兄妹がいたことにビックリ
「フウちゃんってこの島出身なの？」
「あれ、言ってなかったっけ？」
「初耳」
「シオリさんは私のお兄ちゃん初恋の人」
「あらそうなの、私も初恋よ」
かなりビックリ、でもダイチが可哀想、そりゃ初恋くらいしてない方がおかしいけど、よりによってこんなところに
「チカちゃんのお兄ちゃんも同級生だよ」
『えぇぇ！』
今回はフウちゃんも参戦、ってか気づけよフウちゃん、“潤間”なんてそうやたらめったらいないぞ、それに同じ島ときたら確定だろ
「潤間君が…」
「シオリさんこっちで先生やってるんですか？」
「そう、母校に赴任されちゃった」
二人で盛り上がってると、ゲンとユメちゃんが来た、相変わらず騒

いでる
「よっ、ガキんちょカップル」
「ガキじゃない」
「そうですよ、もう中学生ですよ」
でも見た目誰が見てもガキだよ、小学生料金でも怪しまれないな
「ユメ！お餅だよ！」
「ゲンちゃん、待って」
うわぁ、年が明けても元気だな。
その後参考書を読みながら…、このあとは言わなくても分かるよな
「すぐ終わる？」
「まぁそうせかせかするな、受験勉強にも息抜きは必要だろ」
「しょうがないな」
渋々参戦したサエが端の方で参考書を読んでる、ホントは受験生だもんな俺達
「カイさん、久しぶりです」
「ミッチー、コノミちゃんも久しぶり」
「私、来ちゃまずかったですか？」
「全然、大歓迎、餅いっぱいあるからみんな食べよう」
チカとユキも来てみんなで餅をつまんだ、いっぱいあるから無くなる事は無いと思うけど…
「美味！つきたての餅ってこんなに美味いんだ」
「だろ、アタシがこねたからな」
「いやいや、チカは関係ない、むしろ俺の慣れない手付きのお陰、ビギナーズラックだよ」
「言ってろ」
みんなで騒げるのも後少しだもんな、みんな受験モードになって騒いでる暇はないんだろうな、今日を楽しむか、明日はどうなるか分からないんだし

赤は泣き虫

冬休みが過ぎるのは早い、あっという間に過ぎて行った、2週間しかないから当たり前だけど、何か寂しいよな、ユキとかマミ姉といろいろ話してたからあっという間に感じたのかもしれないし、まぁ濃い冬休みだったから良かったな。
今日はユキとマミ姉が帰る日だけど、寂しくなるな、血は繋がって無くても共通点が無くても兄弟だからな、でももっと辛いイベントが一つ、実際こっちの方が辛い
「じゃあ次に会えるのはカイ達が高校入学の時だなぁ」
「そうだな、ちゃんとユキとマミ姉のいる高校行くからな」
「チカちゃんも頑張ってね、待ってるから」
「うん」
「じゃあ待ってるからぁ」
「じゃあね」
ユキとマミ姉を乗せた船が出航した、俺達は船が見えなくなるまで見送った、次は俺達が出向く番か、俺はともかくチカが頑張んないとな、と、そのチカは……、やっぱり泣いてる
「チカ、少しは慣れろよ」
「で、でも…」
歩きながら泣いてるチカと手を繋いでるとお守りみたいだな、でもそんな冗談話じゃないんだよな、俺のせいでもユキ達のせいでもないけど心が痛む
「高校合格すれば毎日でも会えるんだから、前向きに行こうよ」
「分かってるけどぉ…」
「俺じゃ不安か？」
「違う、カイが…、いれば満足、で、でも」
「でも？」
「何か、わかんないけ、けど…、悲しい」

最近なんとなくだけど、泣いてるチカを見ると愛しくなってくる、何か矛盾が生じ始めてきた、慣れちゃったのかな？
「じゃあ、泣き止むまで待つよ」
チカを抱き締めた、抱き締めるとワッと泣き出した、あれでも我慢してたんだ、泣き虫な彼女を持つと苦労するんだな、でもユキと話して分かった事があるんだ、泣かれないより泣かれた方が良いって事に気づいた、だから多少は泣かれても辛くはない
「ありがと、カイ」
「どう、楽になった？」
「うん、いつも泣いてばっかりでゴメン」
「良いよ別に、俺の胸はセルフサービスだから」
また嘘ついてるよ、俺のために泣かないでくれってのも何か嫌だから嘘ついちゃったけど、実際問題泣かれないにこした事はないよな
「カイは悲しく無いの？」
「悲しいよ、兄弟だもん、でも我慢する事で解決するじゃん」
「大人だね」
「そうか？ぶってるだけだよ」
泣くのを我慢するなら泣いて欲しい、これも一理あるかもしれない、やっぱり素でいて欲しいしそれを受けとめる自信もあるから、だから最近チカが泣くとホッとする事がある、やっぱりおかしいよな
「カイみたいになりたいな」
「何で？」
「強いから、アタシよりも全然強い心持ってるだろ、それがアタシはうらやましい」
「バ～カ、俺が強いのは俺のためじゃないよ、チカが弱いから俺がいる、チカが強くなったら俺はいらなくなるだろ、今のままで良いんだよ」
「でも…」
「チカはチカ、俺は俺。それで良いだろ、他人に近付こうと思えば思うほど自分じゃなくなる、なら自分らしくで生きてけば良いじゃ

ん」
「まぁ、カイがそういうならそうするよ」
チカはただでさえ気が強いんだからたまには弱みを見せてもらわないとこっちがめいる、世の中はそうやって調律がとれてるんだよな
「まぁ、あれだ、ユキとマミ姉に毎日会いたいなら勉強だな、高校落ちたら話になんないだろ」
「アタシには最高に頭が良くて、最高にカッコイイカテキョがいるから」
「こんな生徒がいたら授業なんないよ、何もしないって自信がない」
「馬鹿じゃない、良いから全身全霊をかけてアタシに勉強教えろ」
「了解です」
普通にやってればチカなら受かるけど、やっぱり不安なんだろうな、受験なんて始めてだし全部そこにかかってるからな。
チカが泣きをみないようにする、それが今の俺の目標かな

赤と散歩

ヤベェ！時間が過ぎるのが早すぎる、ありえない、ってか毎日単調過ぎてあっという間だよ、推薦入試近いし、受かる自信はあるけどやっぱり俺も受験生だな、不安って感情が残ってたらしい、チカの勉強を見てて、俺ってこれで良いのか？みたいな事を思ってくる、うるさいようだけど自信はあるよ、でも見えない何かが俺を不安に…、ってやめた！悩むのかったるい

「カイは推薦だろ？」

「そうだよ、めんどくさいし、早く終らしたいじゃん」

チカはいつも通り問題を説きながら話してる、チカはもう一つ上の学校狙えるくらいの頭はあるんだけどな、チカも受験生ってことか

「ねぇ、散歩行かない？」

「何で？」

「勉強ばっかりで疲れるだろ、だから息抜きだよ、それにチカの頭はもう足りてるから、こんつめてやってると逆効果だよ」

チカはいろいろ悩んだ結果

「分かったよ、散歩行くか」

渋ってるチカを無理矢理連れて、いろいろ歩き回った、くだらない話とか進路の事その他もろもろ、最近は勉強ばっかりでまともにチカと話もしてないし、俺自身が受験から離れたかった

「ミッチーは農業系なんだ」

「あの家見ればわかるだろ」

「確かに、ダイチは俺らの一つ下の学校だろ、サエは有名大学の附属高校、ユメちゃんは商業高校、みんなそれぞれの進路か」

何だよ、結局その話かよ、腐っても受験生か。

歩いてるとクライミングで使えそうな岩盤にあれは…、ユメちゃんとゲンか、ゲンが岩を登ってる…、ってあの馬鹿、素人が登れるわ

けないだろ
「ゲン！何してんだよ！」
「えっ！？カイさ…」
あっ、落ちた、１ｍくらいだから怪我はしなかったけど、アイツなにしてんだよ
「何してんだよ、危ないだろ」
「イテテテ、カイさん…」
「大丈夫？」
ユメちゃんが駆け寄る、心配するのは分かるけど登らせるなよ
「で、何してんだよ？」
「あの花」
ユメちゃんが指差した先には岩盤に咲く一輪の花が、あれを採ろうとして登ったと
「登れると思った？」
「やらないと分からないじゃないですか」
「ゲンじゃ無理だ、俺が採ってやっても良いけどそれじゃ嫌だろ」
「当たり前じゃないですか！」
忘れてる人も多々いると思うから説明しておこう、俺の特技はフリークライミング、ちなみにここら辺も登った事がある
「カイ、登れる？」
「登れるけどゲンが許さないだろ、だからゲンを登らしてやるよ」
「ホントですか！？」
「ホント」

みんなを置いて俺は家に道具を取りに行った、一応チカを監視役につけて、戻った頃には二人ではしゃいでた、二人ってチカを抜いた二人ね
「ゲン、少し待ってろ、上いって仕掛けて来るから」
「お願いします！」
上に行っていろいろ仕掛けて下りた、ザッと１５分くらいで終わっ

た、ゲン吊り上げるための仕掛けを
「よし、これで大丈夫、じゃあ構えろよ」
「はい！」
軽く登ってそこから縄を持って一気に落ちる、ゲンが案外軽くて予想以上に落ちるのが速くてビックリしたけど問題はない、後は力で吊り上げるだけ
「あとどれくらい？」
「２ｍくらいです」
……
「ＯＫで～す」
「大丈夫、ゲンちゃん」
「ユメ！採れた採れた！」
「下ろすぞ！構えろ！」
ゲンは下りて来ると大騒ぎ
「ユメ！これこれ、ほら」
「ゲンちゃん、ありがとう」
何かこの二人を見てると和むな、とても恋をしてるとは思えない
「何であんなの採ろうとしたの？」
「ユメと今年でお別れだろ、だから記念に」
「馬鹿だな、怪我したら意味がないだろ」
「でも…」
始めて凹んでるゲンを見た
「まぁ、気持ちは最高だよ」
ガキだけど相手を思う気持ちは一人前と、カッコイイ事してくれるじゃん
「まぁ、今後無茶するなよ、ユメちゃんのためにも」
「はい」
「行こ、ゲンちゃん」
二人は走って行った、ユメちゃんは嬉しそうに花をもちながら、でも恋人と離れるのって辛いよな、俺は耐えられない、それをゲンを

体験するんだから可哀想だな、ユメちゃんも同じ思いか
「二人とも離れ離れで可哀想だよな」
「じゃあアタシ達は幸せ者だな、一緒にいる権利があるからな」
「年齢差は恋には敵か」
ゲンは根が強いから一年は何とかなるかな、見た目はガキでも心はでっかいからな。

ユメちゃんとゲンには悪いけど、俺達は思いっきり幸せになってやるからな

青の受験後

只今東京の高校に来てます、ってのも高校入試の面接で、教室に無理矢理わけられて順番待ち、でもみんなの視線が刺さる、内容はこんな感じだ

「おい、アイツ髪青いぞ」

「受かる気ないんだろ」

「変な奴」

「…カッコイイ」

等々、言わせとけば良いんだけど、うるさくてしょうがない

「はい次、来て」

俺の番か、待ってるよりも１００倍めんどくさいんだよな、慣れてるけどこんなところで障害になるなんて

「君、その髪は？」

「自毛です」

「本当に？」

「はい」

「まぁいいや」

何かムカつく、落ちないとは思うけど髪の色でいろいろ決めつけられたきがする。

帰りは私立の一般入試のサエを拾って帰る予定だったけど、盛のついた雌どもに囲まれて身動きが出来ない状態だった

「ねぇねぇ、どこから来たの？」

「遠く」

「彼女はいるの？」

「いるから退いて」

「これからは同じ学校の生徒だよ、よろしくね」

あぁ、うぜぇ、これだからやなんだよこういうのは、彼女いるって

言ったんだから離せよ
“プルル…”
おっ、助け船！電話だよ、相手は…、サエか待たせてるからな、調度いいやこれで強攻突破するか
「はい、もしもし」
“カイ、遅い、何してるの”
「いや、ちょっと囲まれてて」
“はぁ、早く来ないと一人で帰るよ”
「待て待て！今行くから待ってろ」
「ねぇ、誰？」
「あ、ゴメンね、待ち合わせしてるから、じゃあね」
走ってその場から逃げた、疲れるな。

待ち合わせしてる駅に着いた時サエは明らかにキレてた
「サエ悪い！」
「遅すぎる、こっちの女なんかたらしこむなよ」
「違うって、囲まれただけだよ」
「ならチカに言っても良いよね」
腕を組んで仁王立ちしてるサエは、マミ姉を彷彿とさせる怖さ、サエにも逆らっちゃいけないな
「頼むから言わないといて、アイスおごるから」
「わ、分かったよ」アイスに弱いんだ、今度からこの手を使っていこ
「当然2段ね」
「えっ！？」
「チカに今日の事、ことこまかに言っても良いんだよ」
「2段に決まってんじゃん」
サエが笑った、そういえば最近受験で余裕が無かったから久しぶりに笑ったの見たな、笑ってれば和かいイメージなのにな。
近くにあった某31日違うアイスを食べれる全国チェーン店に行った、実際こんなに量いらないだろ、一日中誰にも指名されない可哀

想な奴もいるだろうに
「じゃあこれとこれとこれ」
これとこれとこれ？俺の聞き間違いじゃなきゃ３つになる予定なんだけど
「サエ、２段だよな？」
「いいじゃない一つくらい、それともチカを泣かしたい？」
「…分かったよ」
マミ姉以上だ、頭が良いからたちが悪い、一番敵に回したくないタイプだな。
近くにあった公園のベンチに座った、俺は寒い時にアイスは食べたく無かったから何も食べてない
「カイはいらないの？」
「いらないし、寒いのによくアイスなんて食えるな」
「アイスならシベリアにいても食べれるよ」
女の子って強いんだな、アイスを食べてるサエの顔、これが至福の笑ってやつなのかな
「食べる？」
「寒いからいいよ」
「アタシのアイスが食べれないっての？」
うわぁ、宴会での一コマだ、これで潰れた若きサラリーマンが何人いたことか
「分かったよ」
寒い、一発で頭にくるよ
「間接キスだ」
「ゴホッ、ゴホッ、ゲホッ！」
自分で食わしときながら変なこと言うなよ
「驚かすなよ」
「勝手に驚いただけでしょ」
端からみたら学校帰りのデートに見えるだろうな、チカにバレたら一日中泣かれるだろうな、どっちも下心ないのに。

後日、俺とサエが高校に受かってたのは言うまでもないだろ、あの時の二人の笑顔は受験から解き放たれた笑顔と、いろんな柵を無くした笑顔、両方だよな。
重ねて言うけど下心はこれっぽっちも無いから

青の受験応援

今日は公立の一般入試、だから俺とサエとフウちゃん＋α、αはフウちゃんがつまらないから呼んだ助っ人、授業もやることないし、受験も終ってるからみんなで遊んでる、一応登校だけして帰って良いんだけどフウちゃんがつまらないという職権乱用により軟禁されてる

「あのぉ、私はココにいて良いんですか？」

「何、もしかしてコノミちゃん、私とトランプしたくないの！？」

そうαはコノミちゃん、3人でトランプしてもつまらないから緊急招集された、ってか早く俺達を家に帰してほしい

「はい、あがり」

「私も、また二人が残った」

俺とサエは毎回先にあがってるけど、フウちゃんとコノミちゃんは残ってる

「ババ抜きは終わり！次は大富豪やるよ！」

「サエ、どうする？」

「私は良いけど、なにやっても勝てないよ」

「だな、コノミちゃんは？」

「良いですよ」

何回やっても俺らが勝つけど、トランプは頭脳戦だからな。

「それ、ロンね」

「またカイ君？」

「フウちゃん悪いね」

ついに麻雀にまで行き着きました、フウちゃんの提案だからフウちゃんが知ってるのは分かる、俺とサエは１０分でルールが頭に入った、問題はコノミちゃんがルールを知ってる事にビックリした

「コノミちゃん何で麻雀知ってるの？」

「ミッチーの家で働いてる人がやってるのをみてマスターした」
どんな仕事場だよ、しかもマスターするほどその輪に入ってるコノミちゃんが凄い
「こんなののどこが楽しいの？」
「サエちゃん分かってないな、お金がかかって無いからつまんないのよ、なんならお金をかける？」
「フウちゃん、それは犯罪行為だし、それに先生が生徒に麻雀を教えた時点で間違ってると思うんだけど」
「良いのよ！楽しい事は独り占めしちゃ悪いじゃない！」
そんな力説犯罪支援しなくても良いだろ、しかもその口ぶりだと犯罪に手を染めてるようにしか思えないんだけど…
“プルル…”
携帯の発信元はチカだ、受験が終わったのか
「はい、もしもし」
“終わったぞ、カイ”
「どうだった？」
“みんな問題なし！手応えあり”
「やったじゃん」
チカの声が心なしか元気がある、昨日はＭＡＸ　ＬＯＷのテンションだったのに
「遊んでから帰るの？」
“まぁな、そっちはどう？”
「俺とサエとフウちゃんとコノミちゃんで麻雀中」
チカがみんなに麻雀をしてることを伝えると、笑い声が聞こえた
“誰の提案？”
「フウちゃん」
“そう、じゃあ夜には帰るから、バイバイ”
「じゃあね」
みんな受験から解放されて楽になってるんだろうな、受かれば良いな。

あの後、フウちゃんの蛇のような呪縛から逃げ出して、コノミちゃんを帰してからサエと一緒に帰ってる
「みんな受かれば良いな」
「受かるよ、だって立派な先生が二人もついてるんだから」
「俺とサエ？」
「うん」
「フウちゃんは？」
「あれはムードメーカー」
案外可哀想な事言うな、実際そうだけど口に出すとは
「みんな別々の道に行こうとしてるんだよな」
「こうやって皆で騒いでられるのも、後一ヶ月、なんだか悲しいね」
「大丈夫だよ、この島の思い出があれば、みんな繋がってる」
「精神論でしょ？」
「精神論だろうが根性論だろうが、俺は繋がってるって信じてるよ」
サエが鼻で笑った、その後に
「じゃあ私も」
そういって別れ道を俺とは違う方に歩いて行った。

さながら俺達の未来みたいに

青と赤の進む先

進路が決まって後は卒業をするのを待つだけになった、今日は前にチカと約束してたデートで東京に来てる、普通にデートをするのは始めてってのについさっき気づいた
「カイ、あの店行こう」
チカの暴走を抑えながら雑貨屋巡りをしてるけど、手を繋いでなかったら確実に今頃迷子のアナウンスをかけてるな
「ねぇ、このネックレス可愛くない？」
「欲しい？」
「欲しいけど値段が…」
６５００円也、これくらいなら何とかなるかな。

店から出るとチカは装着済みだった、仕事の速さは天下逸品だな
「ホントに良いの？」
「当たり前じゃん、それに似合ってるよ」
「ホントに！？」
「かなりね」
喜んでくれたのはありがたいけど、更に暴走がヒートアップした、デートってどんなスポーツより体力がいるな
「チカ、もうそろそろ昼にしよ」
「もうこんな時間か、どっか行きたい所ある？」
「そこのパスタ屋で良くない」
「良いよ」
調度近くにあった店でパスタを食べることにした、流石にかなり歩いたから腹が減った。
店内は普通だけど一つだけ違う事が、コックが外国人、日本語ペラペラで背が高くてカッコイイ、男の俺が見ても見とれるくらいキレイな顔をしてる、まぁこの話はおいといて

「何食う？」
「…カルボナーラ」
「じゃあ俺も」
注文を取りにくるのはアルバイトっぽい大学生だった。
食べ終えた感想はめちゃめちゃ美味かった、久しぶりに感動できるもの食ったな
「美味かったな」
「カイの勘は確かだったな」
「奇跡が起きたよ」
ホントに普通のデートだな、島にいたからできなかったから、より一層幸せを感じるな
「来月から俺ら高校生だぞ」
「何かカイが来てからあっという間だったよ」
「俺もかな、毎日が濃かったな」
「高校生活はもっと濃くなるんだろうね」
「その前に、一つチカにビッグイベントがあるだろ」
また面倒な事になるんだろうな、今回は俺もキツイんだよな
「何？」
「お別れ」
「お別れ？」
頼むから理解してくれよ、それに何で今こんな話をしてるんだろ
「皆が皆、同じ学校に行くわけじゃないだろ、ってか俺とチカ以外は皆違う学校だから、バラバラになっちゃうじゃん」
「そっか…」
遠い目をしてる、俺だってつらいけど、割りきるしかないだよ、全員を繋ぎ止めておけないから
「でも今回は多分大丈夫」
「何で？」
チカの優しい笑い方が大人っぽかった、全てを悟ったような、割りきったような笑顔だった

「ユキとマミ姉がいるから少しは楽だよ」
「そっか、なら安心だな！」
大人っぽいチカを、子供と戯れるように頭をクシャクシャにした、目が可愛かったから。

帰りは少し歩いた、時間に余裕があったしチカが街を見たいって言うからしょうがなく、でもふと思った、チカが一緒にいると東京も嫌じゃないことに、多分周りがまったく見えてないからだと思う
「カイ、サエにコクられたでしょ」
「へ？」
思考回路が完全に止まった、その後恐怖にも似た感情が襲って来た、恐れからじゃないと思う、不安から来たんだ
「サエから全部聞いたよ」
「…黙っててゴメン」
チカの笑顔が苦しい
「何で言ってくれなかったんだよ？」
「言えなかった」
「アタシのタメ？それともサエのタメ？」
「二人のタメ、二人の仲が悪くなるのをみたくなかった、俺のせいで二人を傷つけたくなかったんだ」
歩きながらだけど、泣きたい気分だった
「そんなんで壊れる仲じゃないよ」
「でも…」
「断ったんでしょ？」
「当たり前だろ！いくらサエでも曖昧な事はしない」
チカの笑顔が変わった、またあの大人の笑顔だ
「サエは2番目でも良いって言ったんだろ？」
「そうだよ」
「なら許すよ」
まだ素直に喜べなかった、チカは本当に許してくれたと思う、でも

何かが引っ掛かる
「でも嘘ついてたじゃん、サエとは何もなかったって」
「それも全部許す、何もしてないんでしょ？」
「出来るわけないだろ、チカだけは裏切らないから」
「なら何が許せないんだよ？」
チカが許しても俺が許せなかった、結局自分の事を守りたいがタメに嘘をついてた事が
「チカに嘘をついてた事が」
「ならアタシも嘘を着いたから良いだろ」
「えっ？」
思わず立ち止まってた、自分の耳を疑ってその次に今の発言自体を疑った
「実は2週間近くサエと喧嘩してた」
「ホントに？」
「うん、でもクリスマスにカイがサエを離さなかったでしょ、それで喋ったら何だかバカバカしくなって、その後仲直りしたんだ、だからカイのせいだけどカイのお陰、±0」
「ホントに良いの？」
「しつこいな、良いって」
「ありがとう」
「でも一つ、約束して、今後何があってもアタシを裏切らないで」
「分かった、約束する」
やっと引っ掛かりがとれた、一番大きな問題が解消できてすっきりした、もう絶対にチカは裏切れないな。
電車に人は少なかった、そのうち車両には俺とチカだけになってた、車内には電車の音と俺達の大きな声だけが響いてて、世界に二人ぼっちになった気がした
「今日は楽しかった！」
「喜んでもらえて幸いだよ、俺も楽しめたし」

「アタシ達が乗ってる電車って何処に行くのかな」
何変な事言い出すんだよ
「港の近くの駅だろ」
「頭かたいな、その電車じゃないよ、臭いけど人生の」
「確かに臭い」
人がいないから大笑いしたけど、チカの顔が真っ赤なのは確認できた、後先考えないからだよ
「もう笑うな！」
「悪い悪い」
あぁ、腹いてぇ
「だからアタシ達の乗った電車は何処に行くのかなって、この後誰が乗ってくるかとか」
「そんなのどうでも良いだろ、ずっと一緒に乗れれば」
どこで誰が乗ろうが、どこで誰が降りようが俺には関係ない、俺とチカの二人で終点にまでいければそれでいい
「今はサエもダイチもミッチーもユメちゃんも、乗り換えでアタシ達とは違う路線に」
「でも俺達は一緒、いつまでも…」
「そうだね、ずっとずっと…」

俺達は二人を乗せた車両でキスをした。

まだ幼い恋の戯言とは知らずに、口約束をして

青と赤の進む先（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございます。誤字脱字が多くて読みづらいところもあったと思いますけど、とりあえずありがとうございます。まだまだ続きます、つまらないけど続きます！続編もよかったら読んでください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4460a/

青と赤の白黒テレビ

2010年10月19日13時55分発行